
女神の微笑みは刃の味

猫梟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神の微笑みは刃の味

【Nコード】

N1983I

【作者名】

猫梟

【あらすじ】

神都ベレス。

大陸随一の都市らしいが、俺アーティが住むのはそんな喧騒から離れた路地裏ひしめく貧困街だ。

いつものように飯を食うだけで精一杯の俺の前に、裕福層でも上の上、最高司法神庁ナンバー1のお偉いさんが現れた。

無表情な銀髪の少女。

何かから逃げているらしいが、ハッキリ言おう。出来れば回れ右して帰ってほしい……

第一話

プロローグ

息も詰まるような沈黙が場を支配していた。席に座り固唾を呑んで次の一言を待ち受ける老若男女が数百人。その視線は全員が一箇所に固定している。彼等の対面奥には七人。いずれも高価な椅子に腰掛け、少し高い壇上の位置からこの最終局面を織り成す。七人の中央に座するのは、絹のような美しい銀髪をたなびかせた小柄な少女。他の六人は妙齡の老人という中で一際その輝きを際立たせる。彼女はその美しいエメラルドグリーンの瞳で目の前の一人の若者を見据えた。今この場の主役はこの二人。数百の視線が見つめる先は少女と青年。大きく異なるのは、無機質で能面のような少女と対比的に、青年の方はその体を小刻みに震わせているという所か。

そして少女は鈴の音のような旋律で告げた。

「判決。テッド・アウエイスを懲役三百十年と課す。収容先はアベニスタン溪谷第二地区、紅の塔。その命尽きるまで己が罪を後悔し、断罪の為に最期の時まで働き続けなさい」

罵声と歓声が不協和音となって一斉に弾かれた。中には安心して声の出ない者、即座に扉の外に出て携帯電話でどこかへ電話をかける者、齒軋りをしながら涙を流す者……様々だ。

滑稽なドラマのように、老人達の中の何人かが静粛に！ 静粛に！ と木槌を打ち鳴らす。だが熱は更なる熱を呼び覚まし、膨張して破裂する。

「俺はやってない！！ 違うんだ頼む、信じてくれ！！」

テッドと呼ばれたその青年が涙ながらに叫ぶ。それは熱の中に爆弾を注ぎ込んだようなもの。彼の言葉を皮切りに、十、二十の灼熱が聴衆から飛び交う。まだ二十も半ば。紅の塔に収容されれば、七十、八十という通常の寿命は確実に真つ当できないだろう。自ら命

を絶つか、他者によって絶たれるか、彼はそれが分かっているからこそ魂の奥から叫ぶのだ。だが少女はそれを見て、聞いても何の感慨も浮かぶ事はない。

その顔は人知れずこう言っている。「いつもの事だ」

そう、彼女からすれば何百人と見てきた事なのだ。

「これにて閉廷。……連れていきなさい」

叫ぶ青年の傍らに控える屈強な男達にそう告げると、彼女は淡々と机の上に広がる書類の取りまとめに入った。引きずられていくように連れ出される青年を見ようとせす――

あらん限りの罵詈雑言が青年の口から少女へと浴びせられる。呪ってやる、呪ってやる、それも千は浴びた言葉だ。彼女にとっては街中で飛び交う他人の会話、もしくはテレビで流れるコマーシャルと同じくらい意味の無い言葉の綴りに過ぎない。

火山が噴火したかのような灼熱は当分静まりそうもない。人々の怒号と喝采は少女と、連れ去られる青年の二人に集中砲火する。やがて青年は扉の外に連れ出され、重々しい物音と共に古めかしい木製の扉が閉じられた。

少女のエメラルドグリーンの瞳は最後まで揺らぐ事は無かった――

1

最後の砂袋をかけ声と共に下ろした時は、夜の帳が空を覆いつくしていた。砂塗れの埃塗れ、体中についたそれをパンパンと申し訳程度に手で払い落とす。

「おう、お疲れアーティ。今日はもう上がりな」

「はい。お疲れっす」

汗だくの体は悲鳴をあげる事は無い。この街で俺のような人間がつける仕事と言ったら大抵は相場が決まっている。頭は使わないが体は使う。もうすぐ二十二になるが、力仕事を転々とこなしてきた体はそれなりに頑丈に出来上がってきていると自負してもいい。

「これ今日の分な。……いつもあまり出せなくて悪いな」

「何言ってるんですかボス。俺のような身元の知らない人間を使ってくれるだけありがたいですよ。……それで、明日はあるんですか？」

俺の質問にボスは顔をしかめた。それが答えだ。

「正直に言うぜアーティ。ある事はある。だがそれはもう、人員が決まっちゃまっているんだ。次にお前に来てもらうのは四日後だな」

四日間か。さてどう食い繋ぐか……

「分かりました。また近くなったら来ますよ。是非優先して俺を使つて下さいね」

「ああ出来ればそうする。本当は臍負は良くないんだが、お前はそこ等のただの荒くれ者と違って礼儀正しいし覚えもいいからな。何よりサボらない所がいい」

「苦労しているんですねボス。部下に愚痴とは」

「うるせえ、さっさと帰れ」

顔面を髭で覆い、頬と額に刃物の刺し傷痕が残る大男だがその懐はなかなかどうして。色々な仕事を転々としているが、このボスの下で働くのは嫌いじゃない。

憎まれ口を最後に夜の街を帰宅する。最短ルートはあえて通らない。理由は単純、物騒この上ないからだ。多少迂回をしても俺は明るい大通りを選んで歩き始めた。

神都ベレス。大陸にも随一の大都市の人口は百万とも二百万とも言われている。正確な数は誰にも分からない。それは一重に俺達のような貧困層の人間のせいだ。住む場所を失った人間、元より無い人間、ワケありの人間、どこから逃げてきた人間。神様とやらのご加護を受けている裕福層の裏側で、俺達はどういうわけかご加護を得られずに地べたを這い回っている。供え物が無いから仕方ないのか？ 勝手に生きて勝手に死ぬ。戸籍の無い人間だって大勢いる。よって貧困層が果たして現在何人なのかは一切不明というわけだ。

だから……分かるだろ？ それなりに腕に自身はある俺があえて

裏通りを避けて通る理由。奪い合いなんて日常茶飯事の世界だ。さつき手にしたばかりの金を奪われるわけにはいかない。それに一応の「大黒柱」である俺だ。俺にもしもの事があつたらあいつ等が――

「お帰りアーティィ!!」

崩れかけた廃墟ビルの二階。元は弁護士事務所だか何だかだったらしいが、今ではここが俺の――俺の家族の住む家だ。

「いつも一番に出迎えてくれるなシャーロ。それより謎の答えは解けたのか？」

「ちよつと待って！ もうあと一日だけ待ってよアーティィ！ 絶対解くからさ！」

ボサボサになった栗色の髪に、グラスの入っていない眼鏡。そして今は持っていないが、入手経路不明のパイプを普段から口に咥えている（火はつけてない）シャーロはまだ十二歳だ。ある日、いつものようにツキがどこからか拾ってきてウチに住み着いて五年になるだろうか。当時、体の下は痣だらけで、聞けば名前も無かった。ウチに居る子供の中でも名前が最初から無い子は稀だ。俺とツキがシャーロの名前を考えて口論している時に、コイツは俺達そっちのけで、熱心に俺が適当に拾ってきた本の中の一冊を読んでいたのを思い出す。それは推理ミステリーで、シャーロがあまりにも夢中になって読んでいたのを見て、名前に関してその後、俺とツキの意見は珍しくピタリと一致したのだった。

それから五年、本人は将来探偵になると言つて、格好を探偵っぽく（？）真似し始め、謎解きに日々チャレンジして推理頭脳の礎を培っているらしい。

シャーロに続いて、俺の帰宅に気づいた子供達が何人か俺に寄ってくる。年齢はバラバラだ。五歳の子もいれば十八歳の子もいる。ちなみに我が家は現在十人家族。人数は……たまに変動する。ツキが拾ってくる子もいれば……病気で亡くなった子もいる。

ここは何なのかつて？

家族だよ家族。俺とツキが最年長の二十二歳。最初は俺達二人だ

けだったが、身寄りの無い子や捨てられた子をツキがどんどん拾ってくるので今では十人だ。当然学校なんて行ける金はない。日々食わしていくだけで限界だ。実質働けるのがツキは除いて俺と年長の子の二人だけなので経済状況は日々絶望的と言ってもいい。仕事もロクに無い。

それでもツキはこの街に捨てられた子を放っておけない。俺達の懷事情なんて承知の上で、それでも彼女は子を拾って（いい加減この言い方はやめようか）、もとい連れてくる。俺達は誰からも見放された存在。ならば皆で助け合ってしか生きていく手段が無い。

「遅いぞ。さつさとご飯食べちゃって。食器洗えないじゃない」

と、噂のツキの登場だ。サーッと皆が道を切り開いていく。彼女はエプロンをつけ、おたまを持ったまま登場するという、見事な主婦的登場で俺の前に現れた。

金髪碧眼の勝気な顔立ち。身長は百六十あるかどうか。確か靴のサイズは二十三だったか。体重までは流石に俺でも分からない。

綺麗な奴だとは思うが、俺は女としてツキは見えないようにしている。一度でも見てしまうと後々面倒な事になりそうだからだ。

「もうちょつと労わってくれてもいいんじゃないか？ 飯にも朝から必死にお前達のために働いてきたんだぞ俺は」

「無職がよく言うわ」

「っ……！」

手厳しいヤツめ。身分を証明する物を何も持たない人間が、まともな職につけるはずが無い事くらい分かっているだろうに。

「ツキ、今日は綺麗だな」

「ワケ分らない事言っていないで、さつさと出す。ほら」

俺の言葉に頬をほんのり赤く染めるどころか、逆にカウンターを放ってくる。ま、そのくらいの逞しさがないとこの十人家族の母親は務まらないか。俺は今日の稼ぎをツキに全部渡した。

「アーティ、完全に尻に敷かれてるね」

「お前は世界一の探偵になるんだろ。探偵はそんなツツコミはしな

くていいの」

「キスはしたの？」

「お前探偵じゃないな。二番目か三番目に死ぬ役だ」

小声で下らない事をシャー口と話しつつ、既に俺以外の人間は食べ終えた夕食の席につく。味気の無いパンを齧りつつ、フォークで量の少ないサラダを突つついた。他の連中が水浴びをしたり、遊び始めたり、各々の時間を過ごすのを見計らって俺はそっとツキに報告する。

「ワリ。次ボスの所に行くのは四日後だわ」

「別にアーティが謝る必要は無いでしょ」

内職である織物に手と顔を向けたままツキは答える。彼女は器用だ。何でもそつなくこなす。

「職は勿論探す。でも同時に……狩り相手も探す」

やはりツキは答えない。肯定だ。俺にその類の事はしてほしくない、でもしないと十人全員が生きていけないという現実。

狩り、と言っても強盗や恐喝をするわけではない。裕福層の家にターゲットを定め、ちよいとそこから小銭やら飯やらを頂いて来るだけだ。家を見れば大体人となりが分かる。傲慢そうで、強欲そうな家を選び俺は狩りを行う。

だがツキが心配しているのは俺が悪事に手を染めるという事だけではない。この神の都において空き巣は重罪だ。日々労働を繰り返し見返しに食物を得る。その神の決めたルールを破る事は冒瀆。捕まった盗人はその手を切り落とされる。

「……アーティ。私が働けばそれで済むわ」

「ツキ、今日は綺麗だな」

スプーンをかき混ぜるスプーンの手を止めて、俺は睨みを利かせてツキに告げる。

綺麗だな。

その綺麗すぎる体を汚して俺達を養うつもりか。そんな飯、不味くて食えるわけないだろうが。

彼女はたまに今の主張を通そうとしてくる。だから俺はその度に本気で怒らなくてはならない。俺達十人は皆で助け合っていていかなく
てはならない。でもその助けとは、犠牲ではないのだ。

手を止めてこちらを見ていたツキの顔に浮かんだのは後悔。俺から本気を読み取ったらしい。

「ごめんなさい」

織物を止め彼女は立ち上がると、片付けもそこにして俺の前から姿を消した。頭でも冷やしにいったのだろう。

「……俺がもつと稼げていればツキを不安がらせなくても済むのにな」

遠くから聞こえてくる子供達のはしゃぎ声をBGMに、俺は一人食事を再開する。ツキには感謝してもし足りないくらいなのだ、今度きちんとそれを口で言ってやらないといけないのだろうか。

「お？」

戸惑いは、スプーンをすくったスプーンのそれを見てだ。具の少ないスープの中に、随分と場違いなサイズのジャガイモが一個入っている。切るサイズを間違えた、にしては随分と大きい。料理に関し
達人の腕を持つツキからすればあり得ないミスだ。ましてや貴重な食材の具である。

俺はそのジャガイモをすぐには食べる気にならず、しばらく転がして遊ぶ。

「やっぱり……今度改めて口で言ってやらないといかんか」

口にしたジャガイモの味は、きっと世界でも俺にしか分からないだろうから記さない。

異変を察知したのは俺とツキが同時だ。この貧困街で生きるにおいて危機への察知は動物のように敏感でなければならない。確実に眠っていた俺だが、その瞬間にハッと頭が覚醒する。寢床は男女別になっているが、俺は他の男連中を起こさずにそっと部屋を抜け出す。そしてドアを開けた瞬間、対面の部屋である女連中の寢床のド

アが開きツキと顔を合わせる事となった。お互い目配せをしてその行動を開始する。

異変は外からだ。微かな足音。この廃ビルの階段を誰かが上がってきている。時計を確認すると現時刻は午前の二時。まともな客であるはずがないし、それ以前に俺達の家へ来る客など滅多にいない。そして貧困街へ空き巣へ入ろうなどという愚か者はいない。そもそも当たり前だが金と物は持っていないのだ。ならばそれ以外の良からぬ目的である線が濃厚か。

「ツキ、子供達を避難路へ」

コクリと頷くとツキは迷わず女部屋の方へ抜き足で戻っていった。夕食時と違い、緊急事態で口論するほど俺達も間抜けじゃない。取り決めは随分前から作られている。

足音は二つ分。一人は成人男性、一人は小柄な女性といった所か。どんな武器を持っているか分からないが、二人くらいまでだったら何とか俺一人でも時間は稼げる。そして僅かな逡巡の後、俺は急いで入り口まで行きそこにある鍵を外した。入り口に鍵がかかっていれば、この侵入者達は中に人がいるかどうかを疑ってしまうだろう。それだったらあえて鍵を外し、ドアを開けるその瞬間までこの元弁護士事務所が廃墟であると見せかける。

子供達の避難は完了したのだろうか。そして遂に外にいる二人は入り口まで辿り着き、そのノブをゆっくりと俺の方へと押し出した――！

我が家に足を一步踏み入れたのは男の方。疾風迅雷、俺は全速力で男の胸倉を掴んで前のめりに体勢を崩させる。そしてそのどてっ腹に力仕事で鍛えた拳をめり込ませた！

「ハッ！！？」

完璧なるタイミングでの不意打ちは男の息を一瞬止めさせる。崩れ落ちる体をよそに、俺は驚いて硬直している、外にいるもう一人の侵入者の首を瞬時に捕まえる。女だからと言って手加減するつもりはない。とりあえず膝でもぶっ叩いて少しの間歩けなくなっても

らうか。

その時、雲が晴れて月明かりがカーテンの無い窓から部屋へと差し込んだ。俺は女の膝を仕留めるべく自分の脚を振り上げ――

銀髪が月明かりを反射した。流れるような美しい髪が俺の手の先で舞う。次いで目に飛び込んだのは宝石。天然自然の美しさは至宝のものだ。ではそれが人に宿ったら？ それを持つ人は果たして人と呼んでも良いのだろうか。

女神――

その女の瞳は美しく輝く緑色。虚をつかれた。危険と隣り合わせで生き抜いてきた俺が、その瞬間、目の前に存在する造形美術とも呼べる女に一瞬我を忘れてしまったのだ。

銀髪に緑の目――？ そう言えば、そんな新聞の記事をいつか読んだ――

「やめなさい、アーティ！」

ツキの声で俺は体をビクリと震わせ我に返る。そして現状を正しく認識しようという脳の働きが遅れて戻ってきた。気づけば右手は女の首を締め上げたままだ。俺は自分が間違っている気がして慌て手を離す。咳き込む女を前に、氣遣うべきか威圧的になるべきか不覚にも迷いすら生じた。ちなみに男の方は悶絶中だ。俺は注意を女に向けたままツキに尋ねる。

「どうして止めた、ツキ」

「偶然その人の顔が窓から見えたからね、急いで止めに来たのよ。大丈夫アーティ、その人は悪い人じゃないわ。言うなら……」『この世で一番悪くない』人じゃない？」

「??？」

ツキにこのような特異な風貌の知り合いがいるとは聞いてない。先程も俺の頭の中で一瞬何かの情報がかすめたが、もしかしてどこかの有名人なのか？

女（よく見ると、やはり少女だ）は咳が収まると、無表情ながらも目つきをやや鋭くして俺を睨みつけてくる。そして初めて口を開

いた。

「何をする。お前死刑になりたいのか」

色々な意味で思考が停止した。まずはその声。美しく澄み渡るような綺麗な声に唖然としつつ、その物騒な内容の意味に困惑し、更に少し考えても言葉の意味がよく分からない事に気づく。それ等にやや気圧されながらも、俺はこの家に住む家族の事を考え自分の主張を押し通した。

「あんた誰だ。とりあえず、こんな夜中にコソコソしているって事は不審人物って事だよな？ 悪いが返答次第ではここから叩き出すぞ」

睨みを利かせた声は、夕食時にツキに向けたものとはまた異なる声だ。不信感と敵対心を相手に向ける時に使う威嚇。

「どうぞこちらへ。とりあえず入って下さい。……すみません、お腹大丈夫ですか？」

そんな俺をよそにツキは二人を丁寧に招待し始めた。おい、頑張っている俺の横で何を言う！？ 気づけば子供達の何人かがそっとドア越しにこちらを覗いている事に気づく。正直あいつ等の前ではあまり「怖いお兄さん」を演じたくない。

痒くも無いのに頭をカリカリと搔いて俺は諦念のため息をついた。
「どうぞ、何も無い所ですが」

男の体が回復した頃には暖かいお茶が二つ机の上に出揃っていた。相変わらずドアの外では何人かの子供達が夜更かしして聞き耳をたてているが、構わず本題に入る事にした。そしてツキの言葉を聞いて俺はようやく、ああ、と納得する。

「白き天秤の乙女。私達貧困層の人間だって知ってるわ。ベレスの最高司法神庁における神の代弁者。罪人に適量の罰を与える審判長」
「ご存知でしたら話は早い。そうです、まぎれもなくこの子はこの神都における実質的な最高司法官です。全ての罪は彼女が決め、断罪する」

悶絶から回復した男はタイラと名乗った。隣の少女の父親らしい。歳は四十前後だろうか、誠実そうな顔には苦悩が刻まれている。ここまで来るのによほど神経を使った挙句、最後は俺の拳を浴びたのだから当然か。最初は俺達に何かをされるのではと警戒していたが、ツキの真摯な説得や、無邪気に視線をこそそドアの奥から送る子供達を前にやつとホツと息をついたみたいだ。

さて、ベレスは様々な移民が昔から入り込む。それは大陸からも海を越えてもだ。だから当然髪や目の色など皆バラバラなわけで、髪が青かろうが紫だろうが別に珍しくも何ともないのだが……

「銀色の髪。噂には聞いていましたけど初めて見ました。おかげですぐに分かりました」

「ハハハ、この子の識別信号みたいなものですからね。おかげでどこに行っても目立つ」

俺も噂は聞いている（というか思い出した）。今目の前で無表情に座っているこの少女は、髪が銀というだけで生まれながらに今の役職についたって話もある。どこの高貴な家の生まれかまでは知らないが、赤ん坊の彼女を見た面々は、天からの遣いと思ったとか何とか。両親もその血筋も銀色の髪なんて一本も生えてない。それにしても髪の色だけで最高司法官の地位を与えろとは、流石は神の都神だけに髪で決めてしまうわけだ。

さて、そこまでは笑って話せる話だ。彼女には笑えない話がある

「……この子は多くの恨みをかけています」

「それが、こんな今にも崩れそうな廃墟ビルにやって来た原因なわけですか」

「はい。つい先日、世間を騒がせた大きな案件に判決を下しました。ですがそれが火種となって、以前から燻っていた一部の人間達の反発を触発してしまったのです」

「確か……どこかの政府高官の家の、押し入り強盗の事件ですか。金を奪い娘を強姦した」

記憶では犯人は死よりも辛い、紅の塔行きの判決になったはず。実質は死刑宣告に等しい判決だ。何度も言うがここは神様の都、よってその道徳に反するような行動は咎められるのだが、その時のお仕置き率は他の国の数倍と考えていい。罪を犯せば死刑なんてのはザラにもザラだ。だから以前から一部の市民の間では刑の見直し運動を唱えている者達がいる。今言っているのはその類の事だろう。「突然でした。窓ガラスが割れる音がしたと思ったら次いで爆音。そして人の群れが雪崩れ込んで来まして……」

その言葉に俺もツキも押し黙る。所詮は別の世界の出来事で、俺達は聞いた話しか知らないわけだが……まさか白き天秤の乙女に対し、そこまで不満が高まっていたのは初耳だったからだ。そう、彼女の笑えない話はそれなのだ。神の名の下に人を裁く。そして彼女の造るその十字架は人では背負いきれない程重い。こんな年端のいない少女が、たった一人で、多くの人間達を死の淵へと追いやっていたという事実。実際には他にも「審判長のお供」がいるのだろうが、それはお飾りと聞いている。判決を下すのは彼女一人。全ての人間を裁き、全ての人間の恨みをかう。

となると話の展開が見えてきた。ああ、正直に言おう。

今すぐ回れ右してお帰りいただきたい。

「それは大変でしたね。今日はもうお疲れでしょう、今布団を用意しますからお休みください」

長い付き合いだ。俺の気持ちなんて見透かしているだろうに、ツキは平気でそう言つてのけた。いや、俺の気持ちがかかるが故に、か。先手を打たれたのだ。

「よ、宜しいのですか？ 今お話した通りです。我々は追われているのです。あの鬼気迫る彼等の表情からすれば、おそらく捕まれば私達は……。ここに辿りついたのも偶然です。どこか人の居ない所までと思い……」

「ここでは助け合わないと人は生きていけませんよ。たった二人でそこらの道端で眠ってごらんなさい。暴徒の前にここの住人にどう

にかされますよ」

それはタイラさんも察していたのだろう。難しい顔を浮かべたのは一瞬、次に顔を上げた時はツキへの感謝で満ち溢れていた。……俺への感謝はないのかよ。根に持っているのか、さっきの一発を。

「ありがとうございます」

椅子から立ち上がり深々と頭を下げる。ちなみに先から天秤さんは隣でずっと押し黙ったままだ。声も発さず顔も変えず。

「ま、とりあえず明日だな。今日はもう寝ましようよ。俺達で警戒はしますから」

話は終わりと言わんばかりに俺は立ち上がる。追いつ返すのが無理と判断したら気持ちを百八十度切り替えた。こっちは明日から職探して一日歩き回らなくてはならないだろう。休んでおかなくてはならない。だがその前に一つ聞いておくべき疑問がある事に気づいた。「あ、そう言えばそちらのお名前は？」

渾名が幾つかついているせいか、天秤さんの名前を俺は知らない。見ればツキも同様のようだ。

「……カゲヤ」

俺への死刑云々を除き、ようやくまともに言葉を発した天秤さん。相変わらず声は綺麗だ。だが俺への目つきを見る限り、先程の一件をどうやらこっちは確実に根に持っているようだ。

彼女の澄んだエメラルドグリーンの瞳の不動なる輝きがとても印象的に見えた。

第一話（後書き）

初めまして。

投稿する初作品です。

全5〜6章程度で完結させる予定です。

誤字をはじめとしたお見苦しい箇所が多々あると思われますが、お暇な時にでも読んで頂けたら幸いです。

ご指摘・批評意見、何でも構いません。

まだまだ勉強していきたいので、感想お願いします。

第二話

眠りについたのが深夜だろうが夜明けだろうが、我が家の朝食は朝の八時だ。夜更かしした子供達でも、きちんとそれに合わせて起きてくるのだから正しい。一方の客人達も、ツキがまだ眠っていていいと言ったにも関わらずきっちりとそれに合わせて食卓についてくれた。それにしても子供達のやかましい事と言ったらない。銀色のお姫様に対する集中砲火の質問。子供は無邪気だ。こぞってカグヤに對しどうでもいい事をマシンガンのようにまくしたてる。だがそれに対するカグヤの返答はたった一つしかなかった。

「……」

無視だ。

俺とツキはその態度に正直戸惑いを覚え、タイラさんは俺達に申し訳なさそうな苦笑いを浮かべる。ま、このベリスの、ある意味で言えば一番偉い人だからな。自分の事をあまりベラベラ喋りたがらないのも分かるが……。押してもビクともしない大木に、次第に子供達の興味は別の事に移ってしまった。そして最後に食卓に残ったのは昨夜と同じ顔ぶれ。俺とツキとカグヤとタイラさんだ。

「すいません、悪気は無いのです。ただこの子は、ずっと中立である教育を受けてきたものですから」

「中立？」

オウム返しに聞き返しながらも、俺は何となく想像がついた。

「なるほど。人を裁くわけだから常に公平な立場でいると？」

「酷い話なのです。本当は声高には言えないのですが……、この子を教育していたのは亡くなった私の父でしてね。カグヤを『神の使い』とすべく、俗世との関わりを一切禁じたのです。世に対する知識や常識は本で学ぶ事ができますし、この子も本当に天から来たものでは、と周りに思わせるくらい頭が良く、読んだ本の知識をスポンジのように吸収していきました。ですがそれ以外の、たとえば人と

の関わりや、歳相応の楽しみである買物や音楽などの趣味娯楽。父はカグヤに対しそれを完全に遮断しました。最高司法官となるのに必要な事以外は一切排除されたのです。」

「本当のお姫様ってわけですか」

「失礼でしょ、アーティ」

とうの本人と言えば、こちらの会話などどこ吹く風でお茶を呑気に啜っている。

「本当にご迷惑をおかけします。反乱分子が一掃されるのは時間の問題でしょう。所詮は烏合の衆、ベリスの警察が今彼等を一人残らず捕らえるべく動いています。今朝情報を聞いた限りでは、八割方の人間を既に捕らえる事が出来たとか」

「お時間の許す限りこちらに居てくれて構いません。ご覧の通り少々五月蠅く、ご飯も質素な物で大変申し訳ないですが。せめてこちらのアーティにカグヤさんを護衛させますので」

「おい!？」

「どうせ無職でしょ。丁度いいじゃない、あと数日間仕事が無いんだから。適材適所だぞ」

——言い返せない。昨日からやられっ放しだぞ大黒柱が。

「何から何まで……感謝します。実は私も、どうしても今日は向こうへ戻って状況を確かめなければならなかった。カグヤを一人残していくのは気が引けていたのです」

タイラさんは俺の目を見て深々とお辞儀する。大の大人にそこまですてもらっては、まさか断るわけにもいかないか……

結局朝の食事はこれにて終わりとなった。タイラさんはカグヤにここで大人しく待っているよう言い残し、俺達に頭を何度も下げて家を出る。カグヤは部屋の片隅に積まれている俺が適当に拾ってきた本を見つけ、それ等をパラパラとめくり始めた。ツキは当然後片付け。で、俺はと言うと……

「彼女に何かあったら死刑じゃ済まないわ。目を離さずしっかり護衛する」

ツキの言いつけにしたがつて、仕方なく俺はカグヤに倣って食卓の椅子に座り、既に一度読んだ小説を部屋の隅から見つけ読み返す事にした。だが一度読み終えているという事もあって、なかなか文字が頭に入ってこない。とりあえず本を読むフリをして目の前のタ―ゲットを観察する。

カグヤは一心不乱に本を読んでいる。今読んでいるのは……昆虫図鑑？ 何でそんな物を。それにしてもやけにページをめくるのが早い、本当に文字読んでいるのか彼女は。

「それ面白いか？」

素朴な疑問をつい口にしてしまった。ちなみに相手は年上でもないので敬語はつけない。

答えは返ってこない。こちらをチラリと見たカグヤは一秒後にはまた図鑑に意識を戻し、パラパラとページをめくる作業が続く。

無視かよ。

中立だか何だか知らないが、返事の一つくらいしてもバチが当たらないんじゃないか？ まあ、亡くなった何とかって奴の、極端な教育のせいで彼女に非は無いのだろうが……。それにしても、恩を着せるつもりはないが一応こっちは面倒を見てやっている側なんだからぞ。

「ムカデとダンゴムシ、どっちが好きだ？」

やっぱり答えは返ってこない。あ、だが今またチラリとこちらを見たぞ。どうせ見るなら答えればいいだろうに。ツンデレなのかお前は。

「デスメタルとラップ、どっちが好きだ？」

カグヤは昆虫図鑑から目を上げない。おいおい徹底的に無視かよ。どうするかな、セクハラ的な質問でもすれば答えてくれるのだろうか。お、今チラリとこっち見た！ 何となく心でガッツポーズ。

では次は何と質問するか。神様への冒瀆にならない程度の質問だったら許されるだろう。それでいて、ちょっと顔が赤くなってしまうような質問を試してみるか……

「水……」

「アーティ！」

この静謐なる空間に土足で踏み入ってきたのはシャーロだ。何となく残念なような、それでいて少し救われたような微妙な心持になったが、俺はカグヤからシャーロへと向き直る。

「分かった！ 答え分かったんだよ！ 三十六でしょ！？ この丸は太陽のマークの裏返しの意味だったんだ！ だから数字も反転して……」

「ブブー。やり直し」

「えー！？ 何で、どうして！？ 正解じゃないのかよー！」

「かつては俺もそこまで考えたさ。でもそうするとほら、この目の記号が意味を成さなくなるだろ？ 最初にウサギが言っている。全ての記号は意味がある、て」

「でもそしたらさ——」

そこまで騒がしくやり取りをしていると、いつの間にかカグヤがこっちをジッと見ている事に気づいた。読書の邪魔をしてしまったか、と思つたのも束の間、敵意の視線ではない。となると……

——はっはーん。

「いや参ったな！。難しいよなあ百七のしゃれこうべシリーズ。実は俺もまだ解けてないのが二十くらい残っているんだよな！。こんなの全部解ける奴いるのかね」

「え、そうだったのアーティ。全部解けたって前に言っただけ——ほがっ！？」

シャーロの口を塞いで、俺は右手でオデコを抱える。そして残念そうに首を振った。

「くそう！ これが全部解けないと、俺は死んだ親父に顔合わせできないのに！ ちくしょう！ 特にこれだ、九十番目。亀の上に猫が乗り、その口に鈴を咥えた。だが……」

「六」

俺とシャーロはグルン！ という勢いで首を振り返った。その勢

いに一瞬眉を潜めたお姫様だったが、一度口にしてしまった言葉を渋々と言っただけで続けた。

「亀は川に来る前にツバメと蛙に会っている。鈴はあくまでキツネに騙されて渡された代物だから吹こうが吹くまいがカウントには入らない。猫は結局自分の足では一步も歩いていない。だから最終的に残るのは亀とツバメと蛙。十から一と三を引いて、残りは六よ」

沈黙。

俺とシャーロは馬鹿みたいに口を開けて目の前の少女を凝視していた。それを受けてカグヤは居心地悪そうに昆虫図鑑に戻ろうとする。だがそれを前に、シャーロがカグヤへ駆け出して行く！

「すっげー！ すっげー！ 何で分かったの！？ そうか、それでいいんだよね。問題だけは俺も見ただけどさあ、全然分からなくて！ ねえねえ、この三十二番目の問題も教えてよ！」

子供は無邪気だ。その点大人は面倒臭い。空気を読めだ、雰囲気を読しろだ、見えない壁とばかり戦っている。だが子供はそんな見えない壁など「見えない」のだ。存在しないのだからいとも簡単にすり抜けられる。

「じ、自分で解きなさい。他人から教えられてどうするの」

慌てふためくカグヤをよそに俺は最初読みかけていた小説を手にとった。やれやれ、これで俺も安心して読書に戻れるというものだ。まったく、中立だか何だか知らないが、もっと適当に過ごしていればいいんだ。シャーロにマークされたカグヤが恨めしそうにこっちを見てくるが、今度はこっちがだんまりを決め込む番だ。読書に没頭しようとして――

ドン、ドン、ドドン。

何とも特徴的なノック音にすぐさまそれを中断させられる。滅多に客が来るはずの無い家だが、その「滅多」が今訪れたらしい。わずかに迷った後に俺はカグヤの手を強引に取る。

「コラ、何を――！？」

「悪い、入っててくれ」

抗議の声を無視し、呆然とするシャーロの前で俺は彼女を近くに
あつた物置の中に押し込み、即座にシャットアウトする。一応俺の
意図は伝わったのだらう、カグヤは物置の中で静かにしてしてくれ
ている。

「どうぞー！」

玄関のドアが開く音がして、「お邪魔しますね〜」と呑気な声と
共に一人の足音がこちらへ近づいてくる音が聞こえる。俺達の目の
前に現れたのはヨレヨレの茶色いコートを羽織り、それと同じくら
いくたびれたスーツを着た冴えない無精髭の中年男だった。必要最
低限の手入れしかされていない黒髪を、相手に失礼にならない程度
に整えたその男は――

「師匠！」

「やあシャーロ。師匠じゃないけど、おはよう。相変わらず元気そ
うだね」

アーベスト。このいかにも頼りなさそうな男は真正正銘の探偵だ。
この金のならない貧困街において看板を掲げて商売している変わり
者。シャーロはいつか彼の助手になると日頃から息巻いている。ほ
んの些細な偶然であつたのだが、俺はかつてアーベストさんを一度
「助けた」事になっている。別に大した事をしたわけじゃない。だ
が彼はそれ以来何かと俺と俺の家族を気にかけてくれる友人となつ
た。たまに依頼をする事もある。金など無いのを承知で俺も頼むし、
出世払いでいいと笑って引き受けてくれるアーベストさんには頭が
上がらない。

「アーティ。朝からすまないね、おはよう」

「おはようございます。どうしたんです？珍しいじゃないですか。
ここに来るなんて」

こんな街で育ってきた俺だが、アーベストさんは絶対に信頼でき
ると言い切れる。だが……それでもカグヤを隠させてもらった。そ
れは何というか……タイラさんとカグヤを裏切りたくなかった。言
わば義理のようなものだ。たとえ相手が信頼できるとしても、無闇

に不特定多数の人間にカグヤを知られたくない。

「いやね、今ここら一帯の連中が、日が昇ってからずっと浮き足立つちゃってるの知ってた？」

ちよつと待て、まさか……！？

「何でもさ、とんでもないゲストが夜中のうちに貧困街に紛れ込んだって噂なのよ。目撃したのが酔っ払い連中だから僕も最初は気に留めてなかったんだけどさ。よく調べると、丁度昨日の夜に都の方ででっかい事件が起きていたわけさ。知ってる？あの白き天秤の乙女の家が襲撃され、行方が知れないって話。お上はきっちり保護してます、なんて言うんだけど……多分嘘だねありゃ」

「——つまり、白き天秤の乙女さんが、ここらをフラフラうろついていると？冗談キツインじゃないですか、逃げる場所を間違えてる逆に餌食にされちゃいますよ」

「ありえない事じゃないんだよ。襲った連中も馬鹿じゃない。逃亡ルートや彼女の潜伏先はあらかじめマークしていただろう。それ等の裏をかくには、この貧困街は十二分に適している。ま、危険だがね」
「マズいな……。下手に隠すよりは、いっそ何もかもを打ち明けてアーベストの協力を得るというのも手だ。繰り返すが、アーベストさんは信頼できる。だが……」

俺は意識を背中に向け、カグヤが息を潜めている物置に向けた。

カグヤは今この会話を全て聞いているに違いない。突然俺が、彼女の事を見も知らない男（彼女からすれば）に打ち明けたら、何て思うだろう。……クソッ、だから昨日俺は回れ右して帰ってほしかったんだ。でも仕方ない。ここに一度来て、同じ釜の飯を食った以上は……

「悪いっすアーベストさん。俺達は昨夜グッスリと就寝してて何も気づかなかったですよ。子供達とはもなく、俺とツキは敏感だから――」

「まったく朝っぱらから何です。いらっしやいアーベストさん。でもこっちは忙しいんですよ？」

突然背後から、それも不機嫌全開で現れたツキを前に、アーベストさんはぱたと手を振って慌てふためく。

「ああ、ああ、すいませんツキさんお忙しい所を。いえ僕も別に興味は無いんです、ただ……この貧困街に都の警察が大々的に介入してきたら、ここら一帯は混乱も混乱。カオスになってしまう危険性があるのですよ。だからそうなる前に、情報を得て皆を落ち着かせてやってほしいと、今朝市民から僕に依頼がありました……」

何でツキには敬語なんだ。

「残念ながら私達は昨夜イロイロ忙しかったからねえ。何にも見てないし、聞いてる余裕も無かったぞ」

人差し指を頬に当て小首を傾げる動作に、アーベストさんはビデオの早送りのように手をぱたぱたと先程の二倍速で動かす。

「ええ、ええ、すいません！　そうですね、忙しいですね！　お邪魔してすいません、あー、もう帰りますので、ホントすいません！」

何故か顔を赤くしたアーベストさんはツキから視線を外し、最後に俺へ曖昧な視線を向ける。

「すまないねアーティ！　色々邪魔して悪かったね！　ごめん！！」

「何も邪魔してないけど、とりあえずお疲れ」

昨夜から客の連続訪問で、疲れているのは俺の方だ。やれやれ、と言った感じで顔を上げ俺は最後にアーベストさんと目が合った。

苦笑いをしていた。

その笑みを見て、俺は一瞬にして見抜かれた事を知る。外見はだらしないがその中身は研ぎ澄まされた刀のように洗練されたのがこのアーベストという男なのだ。食えない男だ、そして優しい男だ。俺やツキはあくまで「何も言っていない」。アーベストさんも俺達に言わせたくなかったのだろう。だから勝手に見抜いたのだ。真実を。俺の視線が挙動か、一体何から俺の嘘を読み取ったのだから……。またどこまで知ったのか。そもそも冷静に考えれば、朝一で我が家に聞き込みに来た時点できっと何かネタを掴んでいたに違いない。

観念して俺も苦笑いして答えを返す。

すいませんっす。どこまでバレたか分からないけど、言えないのを理解して頂けたら幸いです、と。

「それじゃあね！ えっと、シャ、シャー口も元気で！ さ、さよなら~~~~~！！」

そして顔を赤くしたまま探偵はバタバタと勢いよく玄関から出て行った。少しして、どこかの探偵が盛大に転ぶ音が聞こえたが、おそらくあれは素だろう。嵐のように去って行った。

「やれやれ。面倒な事にならなければいいんだがな」

「八割は敵を捕まえているんでしょ？なら樂觀的かもしれないけど、今日中くらいにはカタがつくと思いたいぞ」

俺は物置のドアを開いて、中で彫像のようにジッとしていた（俺の想像だ）カグヤを明かりの下へ出してやる。ちなみに背後は、よく事情を知らないシャー口がツキに情報をねだっていたが、逆にツキからオネシヨの件で脅されて静かになった所だ。

「おう、急に放り込んで悪かったな。でもま、とりあえずは誤魔化せたし安心だ」

笑顔で嘘をつく。大人の特権であり自分の顔に唾を吐きなくなる瞬間でもある。

「……」

お姫様はトコトコと食卓に戻ると、放置してあった昆虫図鑑の続きを何事も無かったかのように読み始めた。

昨夜も思ったが、彼女には恐怖心のような恐れ of 感情は無いのだろうか？ それとも理解していないのだろうか？ もし捕まったらその後どんな事態が待ち受けているのか。頭の回転は悪くないだろうし、物事だつてきつと俺なんかよりずっと知っているだろうに。

きつと聞いても答えてくれないに違いない。俺は今度こそ読書をすべく自分の席に戻る。

だが意外にも、問いかけは彼女の方から俺にあった。

「どうして私を庇った？」

どうやら先程のアーベストさんの件を言っているらしい。俺達がカグヤの存在をヨレヨレ探偵に話さなかった理由が知りたいのだから。ツキは俺を見た。俺に答えろという事らしい。

「……家族は死んでも守り抜け。親父の言葉だよ」

それを聞いてツキはさつさと自分の仕事へ戻ってしまった。問いを発したカグヤは俺の答えをどう頭の中で反芻させているのか。それつきり黙ってしまう。もしかしたらもう俺の答えなど頭から消えているのかもしれない。昆虫図鑑に再び視線を落としたのがその理由だ。

カグヤはそれ以降俺に話しかける事は無かった。俺も何となく話しかけず、お互い本を読みながら日が暮れていくという、非常にまとまりと、状況のわりにはのんびりした時間が過ぎていった。

だが完全に日が沈んでようやく出た一つの疑問。

その日、タイラさんは家に戻らなかった――

第二話（後書き）

1話にて「5」6話で終わらせます」と書きましたが、あくまでそれは物語内での事でした^^;

現在このネット上では2話目ですが、物語内の話（章）で換算するならまだまだ続きます。

言葉足らずで申し訳ありません。 m (| | ;) m

第三話

2

いつもの賑やかな夕食も、今日ばかりは俺の耳にはどこか空虚に感じた。ツキも俺の心情を察しているだろう、気持ちいいくらい何も言つてこない。隣ではシャーロがアーベストの過去の功績を讃えていたが今の俺は何よりも優先して決断をしなくてはならない案件があつた。

この家を捨てるべきか否か。

子供達には適当に言つてあるが、タイラさんが戻つてこないといふのはナイフをこの身に突きつけられたような事実であつた。あれだけ心配していたカグヤを放置してどこかへ行つたきり、というのは有り得ない。つまり……

「敵に捕まつたのか？」

目の前でお茶を注いでくれたツキにだけ聞こえるようにそつと呟く。彼女の表情もいつも以上に引き締まっている。これはそう……危機だ。

「大多数の暴徒は捕らえられているが、未だ捕まつていない僅かな連中の手にタイラさんが落ちたというのは考えられない事じゃない。連中の目的はお姫様だ。タイラさんを拷問して口を割らせればあつさりこの家がばれる」

「別にアーティのせいじゃないけど、深刻な事態と受け止めるのが少し遅かつたね。もう日は落ちた。今から子供達をぞろぞろ引き連れてこの街の寢床を探しに行くのは危険すぎる」

「だがこの家が既に暴徒にばれていたら、今にでもそのドアが押し破られるかもしれない」

痛い沈黙。そうなつた場合、昨夜のようにトントンと敵を撃退できるはずもない。

「白き天秤の乙女を匿っていた。連中は私達も許さないでしょうね」
「肉親や恋人を実質処刑台送りにした子を庇うんだ。正直……命が幾つあっても足りないな」

その時横から天使が囁いた。

「あなたはどうして私を助ける？」

いつの間に来ていたのか、「賛美なる時計千選」という分厚い力タログを抱いたカグヤがツキに尋ねていた。ツキは首を振って笑う。
「アーティの親父さんの言葉らしいからね。ウチの大黒柱の出した答えには私は従うつもりさ。それに何より、この街で弱い者が良いようになぶられるのは私は嫌いだぞ。弱い者は弱い者同士、結束して生きていくのが私の昔からのやり方」

「ほいほい色々な子を連れて来るからなあ、ツキは」

「嫌だつたら私を追い出せばいいぞ」

自然と笑みが浮かぶ。俺もツキも毎日生きるだけで精一杯なのに、苦勞に輪をかけた苦勞を背負っているのにこのように笑ってしまう。カグヤにはそれが意外だったらしい。いつもの能面ではなく、目を丸くしてこちらを見つめていた。ま、本だけでお勉強できる事柄なんてたかが知れているからな。

「大丈夫大丈夫、カグヤがツキを殺してもしない限り、俺はお前の味方してやるって」

……しまった！ いつもならこんな事絶対言わない俺なのに、つい口が軽くなってしまった。案の定、ちらりとツキを見ると何とも歯痒い表情をしているでないか。あー。

「そうやって言うのはやめて。口にする本当に現実になりそうで怖い」

「殺そうとしても返り討ちにあいそうだ、相手がツキなら」

とりあえず笑って誤魔化す。あくまで中立で人との繋がりを持つとうとしないカグヤはそれきり本へと戻ってしまった。つまり、些細な疑問だったのだろう。彼女は分かっている、自分を守っても俺達自身は何の得もならない事を。ならばそれに対するツキの答えは力

グヤの中でどう受け止められたのだから。俺のも合わせて一度聞いてみたいものだ。

結論として、その日俺とツキは眠るのをやめた。眠っていても俺やツキの五感是十分働くが、今回は流石に事が事だ。不測の事態に備えるのならやはり起きていた方がいい。このまま我が家に残る。だが即座に危険な気配がしたら俺が籠城している間にツキは子供達を連れて避難路から逃げる。要はいつも取り決めてある手順なのだが、結局これしかないという事だ。

目を閉じて神経を研ぎ澄ませる。カグヤの傍にるのが一番なのだが、さすがに就寝時に女部屋に行くのもまずいので今はツキに任せてある。俺は周りの男連中の安らかな寝息を聞きながらじっと何とも静かで緊張する戦いを始めていた。今頃はツキも同様だろう。

深夜一時。あと五時間程はこの戦いは続くだろうか。楽なわけではないが、実はこれも慣れている。昔はよくやっていた事だ。

深夜二時。カグヤの事を考える。自分を正義と思うわけではないが、果たして俺は正しい事をしているのだろうか。彼女の決断で命を奪われた者達は、きっと死しても尚カグヤを許さないだろう。何しろ他国と比べてあまりにその罰が重すぎるのだ。神の都。神様はお空から見て、これをどう思っているのだろうか。だがきっとカグヤはそのように教育されてきて、そこに何の疑問も持たないようなある種「洗脳」されてきたに違いない。喜怒哀楽も無く他者との関わりもゼロ。そしてこの件が片付いたら、また毎日のように死神の鎌で罪人の首を狩り続けるのだろうか。

「ま、罰の量はともかく、一応悪いのは罪を犯した側だからなあ……」

深夜三時。無職について考える。俺は決して働く意思が無いのではなく――

ジャリ。

そこで俺の意識は爆発した。目が冴え耳は獣のように更なる情報

を求めて辺りを探る。

足音——！？

昨夜に続き今夜もか。だが決定的に違うのはその足音の数である。即座に女部屋に向かおうとするが、ドアを開けた瞬間既にツキが険しい顔をして立っていた。

「七人か八人。おまけに力チャカチャという金属音まで聞こえた」
「最悪の事態だな。いつも通りの手順だ。子供達を逃がせツキ。特別にお姫様にはご丁重にな」

無駄な口は利かない。あまり胸張って言えないが子供達もこのような事態にはある程度慣れているため、ツキの指示に従って速やかに避難路へと進んで行く。

視線を感じて振り返ると、そこには子供達の波から一人外れて力グヤがこつちを見ていた。

さて、何か言ってやるべきなのだろうか。

「お守りしますお姫様。ここは私めに任せてどうぞお逃げください」
力グヤが読んだ本の中に絵本がある事を祈る。でなきゃ今の俺の言葉はただの阿呆な人で終わってしまう。相変わらずの無表情は俺の言葉では崩せなかった。やがて力グヤもツキに従って避難し、あとには俺だけが残される。

既に足音はこのビルを包囲していた。迷いの無い動き。どうやら力グヤがここに居る事は知られてしまったらしい。俺は一つ深呼吸をする。さて……

死ぬかもしれないな。

俺しか知らない隠し場所から、拳銃と円月刀を取り出す。どこから仕入れたかつて？ それは内緒だ。ちなみに拳銃の腕前は下手も下手。何しろ撃つ機会も無ければ弾数だって限られているんだ。ま、脅しくらいには使えるだろ。

一対一、一対二くらいなら何とかなる。だがあいにく俺は映画のヒーローじゃない。こんな七人も八人も相手に一人で勝てるわけがない。でもやるしかないだろ？ 力グヤだけじゃない、家族全員が

危機に晒されているんだ。俺が皆を守らないで誰が守る。

その時、突然背中に重く、温かい何かのしかかってくる。

「……ツキ？」

「やめよう、アーティ。逃げようよ……」

「……取り決めはどうした。お前が先頭で子供達を避難させる。もうずっと前から決めた事だろ」

「アーティはどうなる!!」

それも……ずっと前に散々言い争って決めた事だ。

「要は俺が死ななきゃいいんだろ？」

「無理に決まってるぞ!!」

ツキは震えていた。そして俺は背後を振り返りはしないが、何か温かいものがポタリと俺のうなじに落ちたのも感じていた。つまり――ツキも分かっているのだ。この後俺がどうなるか。

「お前が色々な奴拾ってくるからだ、まったく」

「アーティだって、たまには逃げてもいいじゃないか！　いつもいづも私達の先頭で傷ついて!!」

「俺の家族だ。誰一人見捨てるわけにはいかないさ」

そう……親父の、言葉でもあるしな。

「こんな時に女らしい事言うな。迷っちゃうだろうが」

「ならせめてこっちを向いてよ。顔、見せてよアーティ」

「不意打ちでキスでもされたら敵わんだろ。未来の旦那さんのために取っておけ純潔乙女」

そして俺は振り向くと同時にツキの体を抱きしめた。一瞬見えたツキの顔は、涙でグシャグシャになっていた事は俺だけが最後まで知る秘密にしておこう。

「今までありがとな。ツキ」

「アーティ!!」

窓ガラスが碎かれる音が響いた。そこには明らかなる敵意が込められている。

「行けツキ！　俺達の子供達を頼んだぞ!!」

毒にな。男の絶叫が下手糞な演劇役者のように風を裂く。水溜りの中に男が沈む有様がありありと浮かんた。

次に破られたのは正面玄関。昨夜タイラさんとカグヤが潜った入り口が無骨な音と共に開け放たれる！そしてそれが引き金となつて俺お手製の猛毒を仕込ませた木の矢が一直線に飛来した。ドアを砕いた男が呻き声一つで崩れ落ちる。そいつの踏み入れた先は黄泉への入り口となった。

さて、だが小細工はこれでおしまいだ。

仲間の死を雄たけびと共に乗り越えて、正面入り口からデーモンのマスクを被った男とゾンビの仮面を被った男が突撃してくる。俺は対面する二人へ向かい、黒光りする九発実弾入りの自動拳銃を向けた。驚いた二人は反射的に横へ飛び退き、拳銃の弾道から自分の身を逸らす。

とにかく時間を稼がなくては。

「白き天秤の乙女を出せ！！」

「神の代弁者気取りの、あの悪魔の娘はどこだア！」

「何言ってるのか知らないが、ウチの子供達に手を出す奴は容赦しないぞ」

均衡は数秒後に崩れる。拳銃があろうとも、こっちは一人で向こうは二人。何より相手は狂信的な人間だ。自分の死を恐れるような連中じゃないだろう。

最初に動いたゾンビに、俺は躊躇わずに鉛弾を発砲した！耳を破るような乾いた音が鳴り響き、硝煙と共に鮮血があがる。

「ぐぎゃ！」

だが下手糞な俺の腕前では、ゾンビの脇腹を貫くだけで終わった。致命傷にはほど遠い。そして俺を潰すべく突進してくるのはデーモン。よく磨かれた斬刀を、俺は自分の円月刀で受け止める！拮抗はまずい。怒り狂ったゾンビが痛みを忘却に押し込むかのようにして俺へと向かってきているからだ。キチキチと金属音同士が擦れる音、防御に回った俺の円月刀を押し切ろうというのか、デーモン

は己の全てを刃に込める。

「どけよ」

力合戦などするか。俺はこの外す事のない至近距離で、斬刀に夢中になっているデーモンの頭に銃弾を注ぎ込む。脳漿をぶちまけて絶命するデーモンをよそに、俺は急いでゾンビに向き直った。一対一なら絶対に負けはしない。ゾンビの手に握る獲物は短刀、俺は円月刀を構え――

「――！！」

激しい衝撃が俺の背中を打ち付ける。咄嗟にその場を退いて致命傷を避けたが、前方に気を寄せすぎて背後からの侵入者に気がつかなかったのだ。不適な笑みを浮かべる青い炎が刺繍されたマスク。本来プロレスラーが被るような物だが、そいつの体格がまさに現職のそれとも言えるほどだった。手には何も持っていない。その両の腕だけで人の命を絶つのに十分なのだろう。

「おい！ 外の連中を何人がこっちに回せ！ この家を探し尽くすんだ！」

その巨漢は連中の指揮官なのか、脇腹を苦しそうに抑えたゾンビは頷くと外へ応援を呼びに行く。

クソッ、最初に聞いた足音の数以外にもまだ敵がいたのかよ。

背中がズキズキする。俺は拳銃を構え巨軀の目を射抜く。

「人の家を土足で踏み荒らしやがって。出てけよ」

「お前が何者か知らないが、あの小娘の味方をするなら容赦しないぞ。ここに居るのはもう調べがついているんだ。知っているのか？」

あの娘は何人も人間を不当に刑にかけ、その命を非情にも奪っているのだぞ」

僅かな逡巡。……だがとりあえず今は考え込んでいい場面じゃない。

銃声と巨軀が動いたのは同時だ。激音と反動の中、すぐさま武器を持ち替え敵に臨む。繰り出された拳に合わす様にこちらも円月刀を振るう。かち合えばどうなるかは誰にでも想像がつく。男はすぐ

に拳を引つ込め、こちらの攻撃の回避に専念した。

「ブルー！ 手を貸すぞ！」

次々とマスクを被った連中が我が家に入ってくる。もはや俺一人という防衛ラインなど、敵側からすれば問題にならない状況だ。

「こつちはいい！ それより早く白き天秤の乙女を探し出せ！ どうやら敵はこの男だけらしい、俺一人で十分だ！」

ブルーと呼ばれた巨軀は俺から視線を外さずに答える。周りの男達は一斉に散って家捜しを始めた。

「寢床を発見した！ まだ布団も温かいぞ！！」

「緊急時の隠れ先を考えるなら、おそらく寢床の近くにあるはずだ！ 探せ！！」

ビンゴだよクソ！！

床を蹴って俺は青マスクに踏み込む。状況は刻一刻と悪化している。ツキ達はどこまで逃げれた？ 冷静であろうとすればするほど気持ちは昂ぶる。相手は見事に俺以上に戦い慣れていた。迫る円月刀をギリギリの所でかわすとチャンスとばかりに俺の顔面に拳をぶち込む。一瞬麻痺した頭が回復する頃には二撃目の拳が肩甲骨に突き刺さった。

激痛が口から吐き出た時、完全に攻守が分かれていた。迫り来る攻撃の波に、俺は全力を持って逃げ回る事しかできない。致命傷には至らずとも、奴の拳が俺の腕を顔を、腹を的確に碎いて体力を削り取っていく。

ちくしょう、ちくしょう！

このままでは確実に殺られる。向こうはこつちの拳銃攻撃もしつかり視野に入れている。まさか一对一でここまで手も出ない相手に出くわすとは。

「逃げたければ逃げればいい」

突然青マスクがぐもった声で告げる。

「本来ならあの白き天秤の乙女を匿った大罪でこのまま殺したいところだが、今はお前より本命を捕らえるのが先だ。俺も本当ならお

前なんかに気をかけず搜索を続けたい。お前が逃げてくれれば俺も助かるのだから」

逃げる――

家族を見捨てて？

「プツ」

笑うしかないだろ。前も言ったが正義の味方を気取るつもりはない。だが――

「何故あいつの味方をする。白き天秤の乙女は偶然この家に転がり込んだと聞いているぞ。お前とは縁もゆかりも無いのだろう？」

「あるさ。俺達は家族だ。親父の言葉でな、家族は大切に、てよ」
既に肩をやられているのを承知で俺は銃口をその巨大な体に狙いを定める。敵の反射神経は流石だ。俺がこうするのを事前に予測していたのだろう、草食動物のように颯爽と場を飛び退く。そして俺は――

「でもまだ死ぬのはゴメンだな」

回れ右して、玄関へその身を滑り込ませると一目散に駆け出した。それは気持ち良いくらいの逃走。きつと青マスクはポカンとしているだろう、まさか俺が本当に逃げ出すとは思っていなかったはずだ。敵は家捜しに人員を投入しているため、包囲網はほとんど無いに等しい。見慣れた我が家から全速力で遠ざかる。

「悪いな、ツキ、カグヤ」

皆の顔を一人一人思い浮かべながら駆ける。歯軋りしながらも、足は決して止まる事は無い。

無人と化した深夜の貧困街を俺は無様に一人で駆け続けた――

その地下道は下水道になる予定だったらしい。貧困街を開拓するという都市計画の名残らしいが、もはや詳しい事は誰も覚えてない。どんな理由で、この貧困街を開拓するという希望満ち溢れた考えが徒労に終わったのか、とにかく今はただのがらんどうの空間が放置されている。ツキが子供達と駆け足に進むのは、そんな元下水道の

一つだ。あのビルを家に選んだ理由の一つが、この地下道の真上に建物があったという点。アーティと別れたツキは、カグヤと子供達を引き連れて秘密の入り口から一階へ下り、そこから更に地下へと繋がる階段を抜けて今に至る。幼い子供を連れながらという事もあって、その避難速度はあまり褒められたものではない。

「皆、あと少しだから頑張つて！」

涙を振り切つて指揮を執るツキは、今後の計画を頭の中で反復する。今進んでいる地下道は一直線だがあと数百メートルも行けばそこからネズミ穴のように迷路になる。アーティと一緒にかなり念入りに調べ上げたが、それでも実は未だに全て把握しきれてない。深入りすると元の場所に戻つてこれないくらいなのだ。だが逆を言えば、その中に上手く入つてしまえば敵に見つかる可能性は相当減るという事だ。

アーティの事を頭から締め出さなくてはならない。冷静になるために、必死にツキはあの別れの場面を頭の隅に押しやるうとしていく。本当はまだ抱かれた時の暖かささえ覚えていくのに。

カグヤも皆に合わせて走っている。相変わらず表情は見せないが、今がどんな状況下にあるのかは理解しているらしい。

五感を研ぎ澄ませていたツキに、思考を打ち破るような無骨な足音が鳴り響く。荒だたしく、凶暴に満ちたそれは子供達を疎み上がらせた。音はツキ達が走つてきた方向からだ。

遂に避難路の入り口が見つかつてしまったのだ――！

「いたぞ、こつちだー！！」

静寂なる空洞は音をより振動させる。彼女達の走っていた音はどうやら追つ手の耳にはゆうに伝わっていたらしい。

でも、あと少しなのだ！ あと少し走ればきつと自分達は助かる！！ ツキはそれを必死に声に出して子供達を先導する。追つ手との距離はかなり稼げている、このままのペースでもギリギリで安全圏まで避難できるというのがツキの考えだ。走る。走る。だがそこで起きた予想外の出来事は、ツキの心を完全に凍りつかせた。

嗚咽と泣き声が空洞に木霊した。子供達に遂に限界が訪れたのだ。迂闊だった。少し考えれば分かった事だったのだ。多少はこのような事態に慣れているとは言え、周りにいるのは子供。年齢が一桁の子供もいる。背後からは大人の凶暴な声と足音、子供達にそれを耐えて走り続けるという方が酷な事だ。むしろここまで来れた事の方が奇跡なのかもしれない。一人、また一人と恐怖は伝染していく。そして恐怖という闇は両の瞳から溢れ出す。気丈にシャー口や年長組がいくらなだめようが、一度火がついたそれはもはや静まらない。足音が激しい地鳴りと共に近づいてくる。それに反応し余計に子供達は泣きじゃくった。ツキは頭の中で必死に手段を考えるが、この事態を打破できる打開策は何一つ浮かばない。子供達を全員逃がしたい、だがその子供達が動かないのではどうしようもないのだ。絶望が暗雲となってツキの心を支配する。

そして悪夢が現実となつて遂に姿を現した。複数の人影。体格的に皆男だろう。モンスターを模擬したマスクを被り、手には銀に煌く大小の刃を携えている。男達はツキと子供達、何より標的であるカグヤの姿を捕らえると臨戦態勢に入る。そして人影が割れて奥から青いマスクをした巨軀の男が前に出た。ツキは知るよしも無いが、アーティと戦っていた男である。

「見つけたぞ白き天秤の乙女。この場でお前を殺す！ お前によって陥れられた俺達の肉親、家族、恋人、親友、亡き同胞の怒りを知れ！！」

怨嗟に満ちた声は、場慣れしているツキの心にさえも響いた。同時にその言葉に疑問を抱く。だが今はそれについて考えている余裕などない。

自分を盾にして背後に庇っていたカグヤが、それを受けてトコトコと前に出る。ここまで来てもその顔は崩れない。足取りも軽く、呼ばれたから出た、といった感じさえ受ける。

「何だお前達。死刑になりたいのか？」

久しぶりに発したその声は淡々としていた。ツキが驚く間もなく、

その言葉に男達は一斉に逆上する。

「死刑だと！？ ふざけやがって！！ 貴様が言うか！！」

「俺の子供は最後まで言っていたぞ！ あの時ぶつかってきたのは、高官の方からだったと！！ そしてその証人もきちんと呼んでいたはずだ！」

「不正を暴いたのだぞ！！ それがどうして逆に謂れの無い罪を受けて処刑されなくてはならない！？」

口々に発せられる呪詛はカグヤにはまるで届いていないようだった。あまりに無表情、無関心。そもそも生命の危機にさえも無頓着に見えた。

「私は被告原告から提示された証拠を吟味して判決を下したに過ぎない。お前達の言葉は私への侮辱、すなわち神への侮辱と知れ」

殺意が膨れ上がる。マスク越しにも、彼等がどんな表情をしているのかツキには安易に想像できた。男達の一人が吼えた。

「ブルー！！ 頼む、この女は俺に殺させてくれ！！ もう我慢ならねえ、コイツは自分がどんな事をしているかまるで分かっていないんだ！ 死の痛みと恐怖を俺が教えてやる！」

前に出たのは、氷柱のような無数の牙が口内にビッシリ詰まったサメのマスクを被った男だ。ブルーと呼ばれた男は頷いて許可を下す。もはや爆発寸前の彼等を引き止める者は何もない。サメ男の手にしているのは青竜刀と呼ばれる分厚い曲刀だ。カグヤの前にて立ち止まり、天へと刃を掲げる。それを見ても尚、少女は関心を持たない。それが更にサメ男を苛つかせた。ただ一人、ツキだけは駆け出そうと、彼女を救おうと手を伸ばす。だが一步遅かった。ツキ自身知らぬ間にこの空気に毒され、思考が働くのが一瞬遅れていたのだ。

無慈悲にも、淡く煌いた青竜刀がカグヤの肉を切り裂こうと振り下ろされた。

命の終わりの瞬間くらいには何か感慨深いものがあるのか。カグヤ目を閉じる。

そこに浮かんだ表情は――

風が唸りを上げた。

その風はサメ男の青竜刀よりも力強く吹き荒れ、怨呪漂う地下のトンネルを吹き飛ばした。

曲刀が食らったのは、ほんの僅かなる肉の切れ端。それも目当ての獲物ではない、無粋なる乱入者の血肉だ。

カグヤの顔に滴が散った。拭ったそれは赤。自らを死の刃から守ったそれは彼女自身を強く抱きかかえている。流石に少し驚いたのか、カグヤが表情を浮かべた。

「親父がこうも言ってるな。……絶対に女に手をあげちゃいけない、て」

カグヤをそつと下ろすと、頬から流れる血を舐め取りながらアーティはマスク集団を睨み付けた。

「アーティ！！」

ツキの胸に詰まったような言葉がその存在を確かなものとした。

最初に動いたのはサメ男だった。俺の事が誰かを確認する必要も無いのだろう。カグヤを庇う、ならそれだけで敵と値するには十分というわけだ。気合と共に下ろされた青竜刀は、しかし俺の円月刀によって受け止められる。俺は懷に手を入れて――

「よける、レオ！！」

青マスクのくぐもった声がサメ男の耳を打つ。俺は舌打ちと同時に発砲！ 青マスクには、俺と一度手合わせしているために俺の行動が読まれたか！ 罅迫り合いから咄嗟に回避へと専念したサメ男へ弾丸が飛ぶ。顔面から狙いが逸れた弾がサメ男の右肩に吸い込まれるのが見えた。敵は青竜刀を落とし、苦痛と共に床を転げ回る。

「痛エエエ！ ちくしょう、痛エよオオオオ！！」

何人かがレオと呼ばれた男に駆け寄りその傷を見る。だがそれを振り払うと、痛みに塗れながらもその男は俺の横にいるカグヤを睨みつけた。

「よくも……よくもテッド兄さんを！！ 兄さんは無実だ！ どうして、あんな収容所とは名ばかりの紅の塔行きにしたんだ！！ どうしてだ、どうしてだよ！！？」

カグヤは何も言わない。人形のような瞳で地に這うレオという男を見つめていた。

それを見て、俺は青マスクに言われた時から感じていた疑問が今更となって燦り始めた。カグヤは我が家に来た以上は全力で守る。だが……

……いや、やはりこれ以上考えるのはやめよう。所詮、裁判の事になんて俺が口を出すべき事じゃない。

男達はもはや言葉を発しなかった。仲間の血が目の前で流れた以上、次を取るべき行動は火を見るより明らかとなったのだ。先頭に立つ青マスクは俺を威嚇するように拳を鳴らす。

「逃げたと思っただが……なるほど、この地下道がどこに繋がっているかは知らんが、そちらから入ってここまで全力で走ってきたというわけか」

「悪いな、ツキ、カグヤ、遅れた」

ツキは後ろでどんな表情をしているのか。残念ながら振り返っている時間は無い。

沈黙。男達是不気味なほど静かだ。いつの間にか子供達の泣き声も止んでいた。一触即発。レオの呻き声だけが地下道に木霊する。そして火蓋を切ったのは青マスクだった！

「やれエ！！ 白き天秤の乙女を髑髏に殺しにするんだ！！」

「走れツキ！！ こいつ等は片っ端から俺が撃ち殺す！！」

暴徒と化した男達の声が魔物のように押し寄せてくる。死などとうに覚悟した。俺は残弾の少ない自動拳銃を男の群れに向け――

無数の発砲音。

息の詰まったような声と共に、数人の男達が突如床に崩れ落ちた。無論――俺ではない！

それによく見ると、発砲は男達の背後から行われているらしい。

一体誰だ！？

「伏せる！！」

疑問だらけだが、俺にできるのはそんな当たり前の指示を出す事だけだ。立ち尽くしているカグヤを抱え込み、頭を伏せて床に蹲る。宙に無数の弾丸が飛び交うのを耳で感じた。どうやら狙いは俺達ではなくマスク連中らしい。一人、また一人と鮮血を舞わせながらバタバタと倒れて行く。

「大丈夫か、カグヤ！！」

発砲音が止んだ奥から、聞き覚えのある声が俺達に向けて発せられた。

「タイラさん！？」

それは紛れもなく、カグヤの父親タイラさんのものだった。夜になっても戻らず、てつきり敵に捕らわれたかと思っていたが。その後ろからはマスク連中とはまた別の複数の足音。それはちよつとした人数の警官達の姿だった。マスク連中への発砲は彼等だろう。タイラさんが連れて来てくれたのか。

「無事だったんですね、タイラさん！」

「いえ、恥ずかしながらそうでもなくて……」

タイラさんの右手には痛々しい包帯が巻かれていた。そして俺は愕然とする。

指の数が足りない事に。

「情けない……！ 私は情けない。ここの居場所を教えたのは……私なのです！」

苦渋に満ちた表情で、タイラさんは左手で顔を覆う。

安易に想像できた。やはりタイラさんは連中に捕まったのだ。そしておそらく拷問を受け、渋々この家を連中に教えたのだらう。だが一体、誰がそれを責められるのか。自分の指を一本一本切られる痛みと恐怖に、誰が声を大にして打ち勝てと言えようか。

状況は既に決まりつつあった。マスク達はその場で抵抗した者は容赦なく警官に撃ち抜かれ、得物を捨てた者はすぐに手錠をかけら

れ連行されて行つた。一部のマスク達は奥の空洞へと全力で逃走し、やはりそれを警官が追いかけて行く……

俺はタイラさんに向き直つた。

「でもその後で、よく連中が無事に解放しましたね」

「それは――」

背後から一際大きな声が響いた。

「師匠――！」

「やあ、シャーロ。師匠じゃないけどこんばんわ。アーティもツキさんも無事で何よりだ。そちらの銀髪のお嬢さんもどうやら平気そうだね。結構結構」

シャーロが駆け出して行つた先から、相変わらず飄々とした風貌のアーベストさんが気さくに手を振っていた。――どうしてここに？

「私は彼等に捕まり、おそらくその場で殺されるものと覚悟していました。でもその時、そちらの方が警官を引き連れて、危険を顧みずに私を助け出してくれたのです」

感慨深そうにタイラさんはアーベストさんを振り返り、おそらく何度も口にしたのだらうお礼の言葉を伝える。

アーベストさんが？ でもどうして？

俺の、若干猜疑が混じつた目を見たのか、探偵は慌てて手を振つて釈明する。

「偶然、偶然だつて！ 僕もビックリしたのよ。貧困街でいつものように探偵やつてたら、道歩く隣の廃屋から突然呻き声やら叫び声やらが聞こえるんだもの。後は慌てて通報さ」

そんな適当な理由なんて信じると思うのか。ああ、そう言えばこの人には、大なり小なり見抜かれていたんだっけ……

それでも解せない俺は、コッソリ探偵に耳打ちする。

「どうしてここまでしてくれるんです？ アーベストさんにメリツトなんて無いでしょ」

「何言つてるのさ。あの白き天秤の乙女と、その父親に貸しを作つたんだよ？ これは今後の人生で非常に大きなメリットさ。アー

ティだつてそのつもりで助けたんじゃないの？」

「俺はそんな邪な思いはないです。大体、結局貴方が来なかったら守りきれなかった」

「それだけ擦り傷作つてよく言うよ。僕の予想だと、結構あの子の中でアーティのポイントは上がったんじゃない？ 逆玉だよ逆玉。ここから恋が芽生えるかもしれないよ。彼女を手放すな、口説け」
別にアーベストの言葉に感化されたわけではないが、振り返つてカグヤを改めて見る。

——いつも通りで全く変化が無い。無表情に無関心。ツキもシャーロも子供達も、皆怖い思いをしたつてのに……。

少し頭に來た俺は軽いジャブを放つ事にする。

「カグヤ。サメ男がお前を殺そうとした時に見せた表情、あれ結構いい顔してたぜ」

一見すると暴言だ。ツキもアーベストもそう思つたに違いない。だが自惚れではないが、二人共俺がそんな言葉を言わないのを知っている。その証拠に二人はカグヤを見て——

カグヤの顔が一瞬赤く染まり、それに気づいたのかすぐに表情を変えた。へばり付いたそれは「不機嫌」。俺を鋭く睨みつけてくる。「死刑にするぞ、お前」

「そりやないだろ。でもそうか、きつとあれ——お前の素顔なんだろうな」

おそらくあの時カグヤは死を覚悟したに違いない。ならばそこで見せた顔に偽りがあるものか。俺はあの瞬間、ようやくカグヤという一人の少女の姿をかいま捉える事ができたのだ。

「アーティ」

優しい声は背後から。そこにはいつもの勝気な顔をしたツキが、いつもの佇まいでそこに在った。カグヤはともかく、あの時のツキの顔は俺だけの秘密にしておこう。

「よく頑張ったな、ツキ」

「アーティも。お疲れ」

これだけで俺達は十分だ。またいつもの二人に戻る。ツキは流れるような目でアーベストさんに視線を向けた。何故か怯むヨレヨレ探偵。

「しかし怖いわ。探偵さんの前では、どうやら我が家はプライバシーは持てないみたいだぞ」

頭のいいツキは、とうにアーベストさんが今回果たした役割に気づいている。感謝はしているだろうに、これだ……

「何言っているんだよツキ！ 師匠が来なかったらヤバかったぜ俺達！」

「師匠じゃないけど、ありがとうシャーロ。いや、ツキさん。あ、あの、誤解が無いようにお願いしたいのですが。私は別にツキさん達のプライバシーを、ええ、ええ……」

何はともあれ一件落着だ。ほっと一息。

視線を感じて振り返ると、そこには気遣うタイラさんを無視しながらジツとこちらを見つめるカグヤの姿があった。何を見ているのか分からないが、とにかくもう会う事も無いだろう。元々住む世界が違うのだ。お姫様は月だろうが富豪層だろうが最高司法神庁だろうが、俺達とは違う場所に帰る。最後まで心開く事は無かったが、無事「家族」を守れただけでも及第点だろう。いつかは教えてほしいものだ。その澄んだ瞳にはいつも何を映しているのか。

朝日が昇る頃には支度は整っていた。我が家の中には入れない。俺が作った数人分の死体が転がっているし、血やら脳漿やらが散乱しているのだ。そんな家に子供達を入れる事は適わないので、眠そうな子供達には申し訳ないが全員家の外で見送りをする事になった。「本当に、どうもありがとうございます。貴方達にはいくらお礼を申しても足りません。向こうに戻って落ち着いたら、それ相応のお礼は必ずさせていただきます」

相変わらず腰が低いタイラさんは、最後の最後まで何度も頭を俺達に下げている。俺とツキの横にアーベストさんが立ってその存在

をアピールしているのが面倒くさい。

「カグヤ。お前も一言皆様にお礼を言いなさい」

促されてもカグヤは相変わらず何も言わない。……どうやら日頃、父親の言う事も聞かないのが今ので分かってしまった。タイラさんは苦笑いをして頬をかく。

俺は最後の意地悪をしてやる事にする。

「カグヤ、次会った時こそは、デスメタルとラップ、どっちが好きなのか教えてくれよな」

そして俺はドンと彼女の手の上に分厚い本を置いた。驚きながらも手渡されたそれを反射的に受け取るカグヤ。

タイトルは「賛美なる時計千選」。昨夜カグヤが熱心に読んでいたものだ。

「餞別だ、やるよ。お前が持つて帰れよ？ 俺がお前に渡したんだ。まさか人の好意を無駄にするわけないよな？」

すなわち、タイラさんに持つてもらうなよ、という事だ。結構重いが、まあ大丈夫だろ。

予想通り俺は彼女から鋭い視線を受ける。俺も数日間、この能面娘の感情の引き出し方が大分レベルアップしたものだ。無関心でいられるより、今の顔の方がよほどいい。

そして俺を真似てか、慌ててシャー口が自分のポケットの中を何か無いかまざぐり始める。そして小さい、黄のリングがついたメモ帳を発見するとそれを勢いよくカグヤに差し出した。

「あのさ！ 問題の答え教えてくれてありがとう！ お礼にこれあげるよ！！」

どうやらただのメモ帳を渡すだけでは無いらしい。不思議に思っ
て俺が一ページ目を捲ると、そこは意味不明な記号でギッシリと埋まっていた。火やら手？ 本や、靴下の絵らしき物もある。

「お前……何だこれ？」

口を利かない（であろう）カグヤにかわって質問する。

「へっへ。未来の名探偵シャー口の暗号原文さ！ ほら、この記号

が『あ』、これが『い』、これが『う』、伝言が敵に渡っても平気なように、探偵はたまに暗号文を使うんだ！あとでアーティにも同じのをあげるよ！」

「なるほどな」

間違はなくカグヤは一生使わないだろうな。

カグヤは困ったような、何か言いたそうな顔をして暗号原文のメモ帳を見ている。どうやら俺と違い、瞳を純粹に輝かせているシャー口を睨む事には抵抗があるようだ。口に出して伝えればいいものを。難儀な奴だ。

「大したおもてなしは出来ませんが、またいつでもいらして下さい」最後にツキがそう締めた。

そして挨拶もそこそこに二人は護衛の警官に付き添われて我が家を後にした。何でも彼女の失踪は向こうでは大事件になっているらしい。裁判だって彼女が不在では進まないのだろう。混乱を一刻も早く沈めるためには「白き天秤の乙女」は元の位置に戻らないといけないそうだ。

彼女に関わったおかげで大変な目にあつた。そう言い返る事は容易いが、俺は別の主張を通す。「家族が他の家族に迷惑をかえるのは当たり前前の事だ」。尊敬する——誰の言葉かは言うまでも無いな？

こうして台風は去っていった。しかしこれを上回る最悪の事態はすぐそこまで魔手を伸ばしていたのだ。俺達の、貧しいがそれでも満ち足りていた生活はこの日を境に土台に罅が入った——

第四話

新居は使われなくなった印刷工場だ。廃棄され一見ボロボロのそれだが、中に入ってみると意外と綺麗にガラクタ類が片付いている事が分かる。大掛かりな5台のオフセット印刷機は、とくに誰かがバラして使えそうなパーツだけ抜き出したのだろう、見事に解体されている。機械の主軸となる印版や版胴が隅に適当に寄せられていた。この物件はアーベストさんによれば、屋根はまだ生きており少なくとも雨漏りの心配は無いらしい。ちなみに前の住居同様、「非常口」も備え付きだ。

極上の家である。

いずれタイラさんから相応の「お礼」が貰えるはずだ、とアーベストさんの気分はすこぶる上々だった。都の最高司法神庁のナンバー1の人間を救ったのだ。事件に噛ませてもらった俺達へ対してのアーベストさんからお礼らしい。勝手に噛んだのは探偵の方だがそれにしてもよくこの街で、このような良い場所を確保できていたものだ。廃墟の類は大抵「先客」がいる。今更ながらにアーベストという男の、この貧困街における力に少しの畏怖を抱いた。

「やっぱり師匠は凄いや！」

「師匠じゃないけど、まあ……アーティには借りがあるからね。ところでシャーロ、そのパイプどこから拾ってきたんだい？」

俺達を案内してくれたアーベストは変わらず冴えない格好と表情で受け流す。ついでに俺はシャーロに聞かれないようにこっそり尋ねた。

「別に弟子にしてやったっていいじゃないですか。シャーロ、勇気もあるし結構鋭いですよ？」

のらりくらりとした答えが返ってくると予想していた。だが俺の予想に反し、アーベストさんは日頃からは想像もできないような落ち着いた声で俺に向き合う。その目は真剣だ。

「探偵家業なんてやるもんじゃない。本を読んで懂れる分にはいいが、現実にはシビアだ。僕達探偵にはまず味方がいない。警察のように徒党は組めないし拳銃だって無い。それでいて、人に恨まれるような事、人の秘密を暴いたり覗いたりするわけだ。この貧困街でそれをやったら命に関わる。お上品な裕福層と違って、貧困街では人の命なんて簡単に失われる。ここに舞いこんで来る仕事に浮気調査や犬探しなんて無い。薄汚れた仕事ばかりだ。僕は何人も部下を失っている」

何も言えなかった。自分とて楽に生きているつもりではないが、アーベストさんの世界の一端を垣間見た今、そこに乗せる言葉なんて持っていない事に気づく。

じゃあどうして探偵なんてやっているんだ？ 俺の視線をどう受け止めたのか、アーベストさんは苦笑して見返してきた。

やれやれ、いつか教えてくれ。

騒動から数日後。いつもの日常が始まっていた。俺はボスの所に行って朝から晩まで働き、ツキは帰った俺を何かと理由をつけて労わろうとはせず、それでもきつちり俺のために飯を残してくれる。あんな事件があつて、残念ながら俺も流石に「狩り」は控える事にした。今裕福層はどここの家も神経を張り詰めているらしい。まだかがり火は消えていないという事だろう。子供達の中には、夜中に時折り目を覚ましてしまう子もいた。あの騒動の影響だ。不幸中の幸いで皆に怪我は無かつたし、あとは時間が回復してくれるであろう事を祈る。

夕食後に子供達とじゃれている俺の耳朵に、天上に吊るしてあったニツケルの鈴の音が響いた。俺とツキは咄嗟に緊張を張り巡らせる。それはこの新居の警戒網の一つ。誰かがこの工場の敷地に足を踏み入れたら、この工場内の至る所に設置している鈴が鳴るような仕組みになっている。皆に静かにするようにツキが号令を出すと、ピタリと子供達は喧騒を止めた。

足音は一つ。それも、別に隠れてコソコソしているわけではない。堂々と迷うことなくこちらに向かってきている。だが――

「知らない気配だ」

非常に軽い足取り。おそらく女だろう。真っ直ぐ我が家の入り口へと歩いてくる。俺やツキの知り合いではない。ならば一体誰だ――！？

見知らぬ来訪客は、錆びたスライド式の鉄製ドアを丁寧にノックした。

「夜分に失礼します。アーティ様のお宅で宜しいでしょうか」

澄んだ女の声。ここまで作法に乗っ取った強盗もいないだろう。

だが俺は念のためツキと子供達を二階へ下がらせると、頃合を見計らってドアの錠を外した。

そして絶句する。

白いカチューシャは左右で黒のリボンにより結ばれている。シツクな黒生地のワンピースと、その上に被さるエプロン状の純白のドレスは慎ましく重ねられた両腕で隠されていた。全体的に基調は黒で揃えるのが定石なのだろう、ハイソックスは一部白いフリルがついているが膝下から底の靴まではやはり黒。ついで言うと長く流れる髪も黒。きちんと日頃から櫛を通してるのが俺にも分かるくらい、滑らかで艶やかだ。年齢は俺やツキよりも四つか五つくらい下に見える。主張する服装とは裏腹に、その顔の表情はつい先日まで一緒にいたカグヤを思い出させるように表情を成さない。黒い二つの双眸が俺の躊躇う目と交差する。

結論から言うと、そこにはメイドが立っていた。

「どちら様……ですか？」

たじろぎながらもやっとそれだけ口にする。そんな自分を叱咤するように、一瞬思考が停止した脳をフル稼働。彼女が我が家に害をもたらす存在かどうかを見極める。

ツキだけが二階から降りてきた。そしてやはり目の前のメイドを見ると色々な意味で絶句をする。

「カグヤ様からの使いで参りました。アマネと申します」

たじろぐくらい丁寧なる挨拶。その動作一つ一つに手順が込められているのが分かる。

「カグヤさんの！？ ああ、とりあえずどうぞ、中へお入り下さい」

危険は無いと踏んだのだろう、ツキが招き入れようとするが彼女はそれをやんわりと拒んだ。

「ありがとうございます。ですが、すぐに帰りますのでどうぞお気遣い無く」

「カグヤの使い、か。あいつから伝言でも預かってきたのか？ デスメタルかラップ、どっちだって？」

俺の言葉に眉を潜めるアマネ。どうやらその件ではないらしい。

「改めましてその節はどうもありがとうございます。皆様、そしてアーベスト様へのお礼が遅れてしまっている事を謝罪しに参りました。決して皆様へのご感謝、忘れていない事をお伝えしたくて」

アーベストさん辺りは、確かにその件気にしていたな。でも、疎い俺にだって分かる。どうせ今頃あいつやタイラさんは、目が回るほど忙しくてそんな時間も無いに違いない。きっと、昆虫図鑑やら時計図鑑やらを読んでいたあの日の方がカグヤにとって異質な時間だったはずだ。

「今、お二人はお元気なんですか？」

ツキの質問に、アマネは服の中から携帯電話を取り出した。俺達には不要であり、そして決して手が届かない「電話」。そんな物を買ってくるなら食料を一週間分買うだろう。彼女は携帯電話のボタンを押して何やら操作を始める。そして液晶画面を俺達に向けるとそこに映るものを見せ始めた。

知識だけは俺もツキも知っていた。今では携帯電話でテレビも見れるようになっていたらしい。

「録画したのですが、どうぞ」

そこには無数の眩いフラッシュを切られながら、タイラさんと共に法廷へ入っていくカグヤの姿があった。自宅が襲撃され、暴徒が

押し寄せてきたカグヤの事件の事を興奮したようにニュースキャスターが告げている。どうやらこれは、彼女が俺達の元から帰ってから初の仕事風景のようだ。「復帰」だとか「白き天秤の乙女」といったキーワードが何度も飛び交っている。

「相変わらず無愛想だなあ……」

思わず口にしてしまった俺はツキによって即座に制裁される。しまった、仮にもカグヤの家の人が目の前に居るのだった。バツの悪い顔でアマネに謝ろうとして……彼女がじつと俺を見ている事に気づく。その顔に怒りは無い。主人を小馬鹿にされれば誰だって不快に顔をしかめると思うのだが？

やがてニュースの画面が切り替わった。何らかの事件の判決が下ったらしい。だが俺とツキはそのテロップを見て食い入るように画面を凝視する。こう記されていた。

白き天秤の乙女が、自らを襲撃した暴徒を裁く！！

「カグヤ様はこの裁判で、自宅、そしてアーティ様のお家に押し入った賊を裁かれました」

アマネの説明をなぞるかにようにニュースキャスターがそこに肉付けをしていく。自らを殺そうとした人間を、自らが罰する。何という顛末だろう。

「ご存知かもしれませんが、通常の裁判では裁判長、もしくは裁判長の肉親や家族に関する事柄が議題となる場合は、例外が適用され、事件とは無関係の裁判長が座に就きます。私的な思考が判決に結びつく事を防ぐためです。でもカグヤ様は……」

「中立。白き天秤の乙女。いかなる例外も無く、神の使い手である彼女は全ての人間を裁く権利を持つ。人に人は裁けない、でも神の使いならば人を裁く権利を有するから」

紡いだツキの言葉にアマネが頷く。

「カグヤ様の様子はご覧の通りです。そして、ついでは失礼ですが皆様、賊のその後の事を知りたいと思われそうですのでお知らせします」

アマネが言う前に、ニュースキャスターが耳についているイヤホンに耳を傾け二度三度頷いた後、再度カメラ視線となって捲くし立てる。

「たった今、判決が出たもようです！ 懲役四百六十年！！ 襲撃に参加した暴徒達に下った判決は懲役四百六十年です！！ 一人の例外もなく白き天秤の乙女は判決を下しました！ 尚、暴徒の肉親や家族についての処罰はまだ……」

「おいおい、まだ連中が捕まって一週間も経ってないんだぞ？ 何でもう判決出ているんだ。そもそも裁判所、てのは相当順番待ちしているって聞いたぞ。聴取やら調査やらで、一つの案件に時間かかるんじゃないのか」

「事が事でしたので、政府も緊急案件として無理やりねじり込ませたと聞いています。同じ事が二度と起こらないよう見せしめのためでもあるでしょう」

それでも一週間で易々と判決を下せるものなのか？ それに裁かれるのは一人だけではないはずだ。頭の良くない俺でも異質に映る懲役四百六十年。瞼を閉じて想像する。カグヤはきっと、あの無表情な顔で淡々とその事実を読み上げたのだろう。周りは熱気に包まれる。その判決を歓迎する声と不服とする声。それでもカグヤは最後まで表情を変えなかったに違いない。

「カグヤがわざわざここに行って来い、て？」

「いえ、カグヤ様には申し訳ないのですが、私の独断でこちらに参りました」

だろうな。何にも関心を持たないあの少女が、わざわざお礼が遅れている事を気にして人をやるとは思えない。

「ご覧の通り、カグヤ様は大変お忙しい状態でございます」

そしてアマネは携帯電話をしまつと、再度手を組みなおし言葉を投げかける。

「それでも五分、十分時間が空きますと、カグヤ様はご本を読んでいらつしゃいます」

「本？」

「はい。『賛美なる時計千選』というタイトルのカタログでございます」

覚えがあつた。カグヤが最後に読んでいた本。お土産に持たした本だ。俺の表情を読まれたのか、アマネは、やはり皆様から頂いた物でしたか、と呟く。

「まだ目を通していない本、カグヤ様がお好きな本が自宅には大変ございます。以前は時間が空いたらそれ等を貪るように読んでいらしたのに、ここ最近はその本ばかり」

……まあ、分厚いカタログだったからな。読むのにも時間がかかるのだろう。

と、言おうとして記憶を辿る。カグヤの本を読む速度は尋常ではなかった。最初に手に取った昆虫図鑑を読み終えるのにどれほど時間が必要だった？

「アーティ様。素晴らしき本をどうもありがとうございます。そして……」

彼女は俺の視線を真っ向から見つめると、雄弁に言い放った。

「もう二度と、カグヤ様と関わろうとはなさらないで下さい」
時が止まった。

何を言われているのか一瞬俺は理解できなかったのだ。ツキも、今の一言が彼女が今夜訪れた本題であつたことを理解し、言葉を失う。

関わる？ カグヤと？

どのみちもう関わる事も無いだろうに、このメイドは一体何を言っているのだ。だが察しの悪い俺でも、今の言葉に秘められた語気の強さは分かる。それから俺は訂正しなくてはならない。アマネはカグヤみたいに顔の無い少女だと思つた第一印象を覆させてもらう。表情を出す事だけが心の現われではない。静かに、周りに悟らせないほど密かに裡に宿す炎もあるのだ。

「あ、ああ……」

何も言えない俺は、馬鹿みたいに肯定の返事をする。隣を見ると、ツキはアマネの一言を受けて何やら考え込んでいるのが見えた。

「失礼をお許し下さい。ですが、ご存知の通りカグヤ様は『中立』。俗世に触れては、神の使いたる使命を真つ当する事が叶わなくなっています」

詫びのつもりなのか、深く頭を下げる。そしてこれで話は終わらしい。踵を返して夜の闇の中へ消えていこうとする。

「おいおい、待てて！ 一人じゃ危ない、送るぞ！」

考えてみれば、あのような派手な服装でここまで一人で来たのだろうか。襲ってくれと言っているようなものだぞ！？

「ありがとうございます。ですがご心配なく。私、こう見えましても多少は武術の心得がございますので。……来る途中も、薔薇と髑髏のタトウーをした集団にお誘いを受けましたが、丁重にお断りさせていただきました」

薔薇とタトウー！？ 「ロア」の連中か！ あんなヤクザ集団に絡まれて一人で平気だったのか？

「申し訳ありません、それから最後に一つ。カグヤ様を襲った暴徒の集団ですが、実は主犯格の男のみまだ捕まっていらないそうなのです。だからと言って皆様を襲う理由も無いとは思いますが」

「主犯格……あの青マスクだな。地下道の先の迷路に上手く逃げ込んだのか」

だが彼女の言う通りもはや俺達とは何の関係も無い。おそらく既に素顔は割れ、一生指名手配犯として逃げ回るのだろう。

「それでは、夜分に失礼致しました」

「あ、お、お気をつけて……」

思考の旅から帰ってきたツキが慌てて彼女に告げる。俺も何か言わなくてはならないのだが……

「あいつに伝えてくれ！ カラオケとボーリング、どっちが好きだ、て！」

阿呆か俺は！ たった今関わるなと言われたばかりだろうが！？

今度こそ怒られるかと思いきや、アマネは俺をじつと見つめた後に何故かフツと笑みを零した。別に嘲笑の類ではない。歳相応の可愛らしい微笑みだ。

「分かりました」

何で了承する。俺に言っただけで自分のやってる事が真逆だ。

ワケが分からない。

そして彼女は、来た時同様、堂々とした足取りで我が家を跡にした。まさか歩いて帰るのか。いや、きっと舗装されている道までは車で来たに違いない。多分。俺とツキは半ば呆然としながらその背中が見えなくなるまで見守るしかなかった。

ちなみに翌日聞いた話によると、薔薇と髑髏のタトゥーで有名な荒くれ集団「ロア」のメンバーが十人、往來のど真ん中で崩れ落ちているのが発見されたらしい。血を流している者もいれば、骨がへし折れている者もいたとか。

くわばらくわばら。

今度という今度こそ、日常が戻ってきた。

食い扶持をやつとの事で繋いでいる我が家にとって、日々生きていく事こそが全てだ。

「掃除の邪魔だぞ。横になるくらいなら外に出てる」

「ツキ、今日は、今日だけは勘弁してくれ！」

過酷な労働に反してあまりに賃金が少なかったのが昨日の仕事。それでもやるしかなかった。だがその反動が見事に体の節々に行き渡っている。頑丈がとりえなこの俺が一日でここまで沈むとは稀有な事である。だが寝ていたら俺を粗大ゴミにしてツキが捨てかねないので、やむを得ず外に出る事にする。何故かシャー口もついてきた。格好は相変わらずだ。

「どうした。付いてきても何も無いぞ」

「たまたま進む方向が一緒なだけだって」

「何だよ、何か聞きたい事でもあるのか？」

薄汚れたボロボロのシャツを着た人間がポツポツと道を歩いている。寂れた鉄塔が道に連なって延びており、その反対側は、まるで空爆でも受けたかのように散らばったレンガの数々。原型はかろうじて留めてある。まともに機能していた時は、さぞかし頑丈な倉庫だったのだろう。

「あのさ……」

シャーロにしては珍しく遠慮がちな言葉。いつも俺の帰りを一番で出迎える時とは雲泥の差だ。

「もうカグヤには会えないの？」

「……」

好意を持っていたのか、それとも謎解きをしてもらったからか、どうやら帰っていったお姫様に執着を持っていたらしい。こればかりはどうしようもないので、俺はシャーロの頭をポンと軽く叩くと、その目線に合わせる様に腰を落とす。

「カグヤは凄い才能を持った奴なんだ。俺なんて目じゃないくらい凄い奴だ。あいつは、あいつにしか出来ない事をやるために帰っていった。いつまでも俺達の所に居たんじゃ、せつかくの凄い才能が無駄になってしまうだろ？ カグヤのためにもならない。だから……あいつはもう俺達とは会わない。ちよつと残念かもしれないけど、俺達に出来るのは、遠くから応援してやる事くらいなんだよ」

俯き口を尖らせるシャーロはやはりまだ子供なのだろう。仮に、俺達がカグヤと会ったとして、向こうは果たして喜ぶだろうか。シャーロにはあえてそれは言っていないが、おそらく邪魔にしかならないだろう。

未だ顔を上げないシャーロに対し、さてどうしたものかと悩んでいると……

ダッ！ と明後日の方向に駆け出して行った。追いかけるかどうか一瞬判断に悩む。

「おい、シャーロ！」

「ちよつと散歩に行ってくる!!」

内情を知る事は出来ない。だがシャーロはもう十二歳だ。自分で物事を考え、行動できる年齢。ならばきっと、一人になりたい時だつてあるだろうし、俺がうざつたい時だつてあるだろう。俺はシャーロの姿が見えなくなる前に大きく告げた。

「危ない所には行くなよー！ー！！」

振り返らずこちらへ手を振るその姿を見て、俺は大きく息を吐き出すしかなかった。

出会いと別れ。陳腐な物言いかもしれないが、そんなものは大人になるにつれて何度も経験していく事だ。学校に行っていない分、シャーロも俺もそこらは希薄だが、今回の経験が生きてくれる事を願わずにはられない。

「このような街で、よくあそこまで真っ直ぐに育ったな。お前の教育の賜物か？」

完全に背後を取られた自分を呪い、場を飛び退くと同時に振り返る！

一度聞いた声だ。それは相手の巨軀を見て確信に至る。信じられない事に、そこに立っていたのはカグヤの襲撃を指揮し未だ逃亡中の、あの青マスクであつた。

「警戒するな……という方が無理か。知っているかもしれんが、もはや私は一人だ。最後まで残っていた仲間も、私を逃すために捕まったよ」

「懲役四百六十年か。どうして頭であるあんたに懸賞金がかかけられていないのか不思議なくらいだな」

「お上も自分の私腹を肥やすために無駄金は払いたくないのだろう。それにあの事件は、仲間全員が異常なる刑罰を受ける事によって世間体は既に保たれている。だからと言って、私の手配は永遠に解けないだろうがね」

青マスクの素顔は意外にも誠実な人柄をそのまま絵に描いたような男だつた。逃亡中のためであるう、乱れた栗色の髪と伸びた無精髭を除けばそこに残るのは真っ直ぐな淡い青の瞳だけだ。歳の程は

四十過ぎといったところだろうか。薄汚れたグレーのワイシャツとよそに、威厳がありありと体から湧き出ているのが伝わってくる。

「何の用だ。もうカグヤが家に居ない事くらい……」

「勿論分かっている。お前に、俺の居場所を教えておこうと思っとな。俺はここから南に一キロ歩いた所にある河川敷に居る。数多くある中のテントの一つが俺の住まいだ。余所者が来たらすぐに目立つ、来れば俺の方からお前を見つけられる」

「ワケの分からない事言っているな！ 通報するぞデメエ!!」

目的の意味が分からない！ コイツは何故今俺の目の前に居る？ 不可解な現実が俺を苛立たせた。

「……襲撃の前に、簡単にお前達の事は調べさせてもらった。血縁も無いあの白き天秤の乙女をあそこまで命をかけて守る。報酬目当てかもしれないと思ったが、お前が一度逃げ出し、その上であの地下道に現れた時その線も潰れた。お前達は……捨てられた子供を連れては保護し、共に生活しているらしいな」

「俺じゃない。相方が勝手にやっている事だ」

「お前は真っ直ぐだ。お前が育てた先程の少年を見ているもそれは分かった。この貧困街に住みながらも、大切なものを見失わずに生きている。それは同じ人間として尊敬すべき事だ」

青マスクは臆面も無く俺に言い放った。これではさきから身構えている俺の方が滑稽だ。

「今日お前の前に現れたのは警告だ。そして、もし万が一があったら私を尋ねてほしい」

「警告？」

「何故私達が、あそこまで血眼になって白き天秤の乙女を抹殺しようとしたか、一度でも考えたか？」

脳裏に俺が撃ったあのレオという男の姿が浮かんた。あの時一度思考を止めた事だ。考えても仕方ないので頭から意図的に締め出していた。奴は言っていた。自分の兄は――

「あの少女が裁判所に立ってからだ。神の名の下におかしな裁判が

多くなつたのは。罪が他の街と比較して重いのは仕方ない、この街の在るが所以だ。だが明らかに無実であろう者が有罪になる。状況証拠と裏腹の判決が下される。白き天秤の乙女は金でも貰っているのでは、ともつぱらの噂だ。そして過去の統計によると……」

言葉を切つたのはわざとだろう。警告がきちんと伝わるように俺の目を射抜く。

「白き天秤の乙女と関わつた者達の中に、彼女の手によつて極刑にかけられた者が多々いる。理由もどうも胡散臭いものばかりだ。勿論全員ではない。お前達がそうなる確実に言えるわけではない」
唾を嚥下する。嘘を言っているようには到底思えない。どうやら本当にただ俺に警告しに来たらしい。カグヤに気をつける、と。

「もしあの少女に対し恨みや怒り、殺意に憎しみを抱くようになつたら私を訪ねろ。その時は二人でいい相談ができそうだ」

「どうして俺なんだ。俺の家をめちやくちやにして、子供達を震え上がらせたお前を俺が素直に許すとも思っているのか」

「家族を不条理に殺された事はあるか？」

唐突な青マスクの質問。かろうじて首を横にふる。場にのまれ、主導権を握られているのが悔しかった。

「愛する者を不条理に失つてみる。他の瑣末な事などどうでも良くなる。……先程言つた通り、もはや私は一人だ。今から仲間を見つけるより……一度拳を合わせたお前の方がよほど信頼できる。いかにも古ジジイの考えと思われるかもしれないが、喧嘩した相手とは妙な糸で結ばれるものだ。それが己の信念をかけた喧嘩ならば尚更な」
そして奴は振り返ると闇に消えていこうとする。グレーのシャツがほどよく影に溶け込む。俺は慌てて呼び止める。

「本当に通報するからな！ 懸賞金がかかったら尚更だ！」

「フツ。わざわざご報告頂けるとは、お前は本当に真つ直ぐだな。そうそう、遅れたな私の名前はランバルド。お前はアーティ、だろ」
それだけ告げると、いけ好かないランバルドとやらはさつさと姿を消してしまふ。後に残つたのは齒痒さと苛立ちが混ぜこぜになつ

た俺だけだ。

「どいつもこいつも、勝手言っ て勝手に消えるな！」

子供だったら地団駄を踏んでいるところだが、大人な俺は手頃なレンガの山を蹴り飛ばすだけで我慢する。妙に不愉快だった。

カグヤにまつわる不穏な噂とランバルドの唆し。どのみち、両者とはもう会わないし、会う事もないはずだ。

俺は家には帰らず、頭が冷えるまで街中をプラプラと歩く事にした。

無職で良かったよちくしょう。考える時間は山ほどあるんだからな。

第五話

家に着いたのは十九時と言った所だ。結局昼間あった出来事は俺の心の中だけに留めておく事にする。不必要な事を話して皆を不安がらせる事もないし、おそらくあのランバルドも我が家へ襲撃などしてこないだろうからだ。途中から職探しに明け暮れたが、残念ながら空振りに終わり本日のお勤めを終えたのであった。

だが俺を出迎えたのが、いの一番で駆けてくるシャーロでなくその師匠のアーベストさんであった時、少なからず驚いた。

「アーベストさん？」

「どこへ行っていた。いいからこつちへ来て座りなよ」

ここは俺とツキの家なのに「座りなよ」て……。そう言いかけたが、普段のいい加減な様子がまるで見られない探偵を前に俺は無言で従うしかなかった。何かが起きたのだ。この直感はおそらく外れではないだろう。

居間。ツキとアーベストさん。そして子供達も全員揃っている。

——あれ？

「シャーロはどうした？」

我が家の騒がしい源が欠けている事をツキに尋ねる。だが返ってきたのは重苦しい沈黙のみだ。そんな中、それでもツキはようやくと言った感じで口を開いた。

「アーベストさんが来て知らせてくれたぞ。シャーロが……裕福街で警備員に拘束された」

——冷たい手が心臓を鷲掴む感覚。

「……容疑は窃盗。金持ちの家に貧困街の人間が忍び込んで金目の物を盗む、よくある事らしい」

「ふざけるなよ!!」

一瞬にしてそれは有り得ないと理解できる。シャーロの性格を知っている俺達なら皆そうだ。確かに俺達は貧乏だ。だがそれでもシ

ヤーロは、日々真っ直ぐ生きていたではないか！

アーベストさんが補足する。

「貧困街の人間の場合、わざわざ『貴方の身内が捕まりました』なんて連絡は来ない。お上からすれば時間と人件費の無駄になるからね。僕のネットワークにたまたま引つ掛かった情報だ。今シャーロは、留置所に居る。そして判決が下るのは……明日だ」

「はあ！！？」

盗み一つで裁判沙汰になるのがこの神の都ベレス。年齢が低いからと言って例外では無い。それでも――

今日捕まって明日判決？ その超速度の裁判は何だ！？ 意味が分からない！ そんなやり方で本当に司法は成り立っているのか！！？ まるでもう最初から……

「おかしいだろ……」

そんな展開でシャーロの容疑が晴れるとは到底思えない。そもそもきちんとあいつには弁護士がついているのか？ それすらも分からない。出来レースをさせられている気分だ。

「連絡する方法は無いのかよ！」

「貧困街の人間がどうなろうと、裕福層からすれば知った事ではないからね。僕達にはお金が無い、だから神様の庇護を受けられているとは思えないのよ。晩御飯が与えられていれば御の字というのが実際のところだと思う。シャーロには外との連絡は許されていないだろう。今から押しかけても出迎えてくれるのは銃口くらいだろうね」

軽い口調とは裏腹にアーベストさんの表情は重い。多くの情報やコネを持っているこの人の事だ。きっとシャーロの事を聞いた時から走り回ってくれていたのではないだろうか。

「僕一人だったら、何とか一人二人脅せば明日の裁判は参加できると思う。正直に言うよ、判決に対して僕は何も働きかけてはやれない。ただ聞くだけだ。それしか出来ない」

最後に、すまない、と呟いて探偵は押し黙る。

俺の胸にシャー口が最後に見せた俯き顔が浮かぶ。あの時、察してやるべきだったのか。「俺があの時止めていれば！」お決まりの台詞が浮かんだが無意味なので口には出さない。代わりに、シャー口の今朝の様子を皆に伝えた。

「あいつは多分……カグヤに会いに行ったのかもしれない。いや、そこまでは考えてなかったのか、とにかく一目見れば満足したかもしれないな。カグヤとはもう会えない事は分かっていたはずだからな」

「でもおかしいわよ。窃盗なんてする子じゃない。それがどうして拘束なんて……」

「いくら差別されている俺達でも裕福層を歩いているだけで捕まるなんて事はないはずだ。もしかしたら、シャー口は本当にカグヤを見つけたのかもしれない。偶然か奇跡か、どこかの建物にカグヤが入っていくのを見たのか。それを追いかけて行って、中で拘束されたいうのは考えられないな」

「それが本当だとして、窃盗扱いされちゃ堪らないね、ホント」
今朝のランバルドの言葉が響いた。嫌な預言者だ。朝言われた事が、夜既を起こっていたなんて、早すぎるだろ。

アーベストさんが席を立った。あと今日出来るのは、悪夢を見ないよう眠る事くらいだ。

「伝えておくよ。明日シャー口を裁くのは、白き天秤の乙女だ」
稲妻が走った。頭にズキンと受けた衝撃は一瞬俺の目に浮かぶ世界を回転させる。色々あった一日だが、最後の最後にとんでもない爆弾が落ちたものだ。

「暇人だな！ たかが窃盗犯に、カグヤ様が自ら出立かよ！」
「窃盗は神の教えに背く重罪だ。分かっているだろう？ ま、それにしてもおかしい事はおかしいよね。明日だって裁判の予定は埋まっていたはずだ。それをわざわざずらしてまで行っなんて」

シャー口は……カグヤが自分を裁くと知っているのだろうか。もし知らないのならその事実を教えられた時、果たしてどう思っのか

……

一礼するとアーベストさんは出て行った。

俺達も出来る事は無い。夕飯もそこそこに、俺は不安気に瞳を揺らす子供達を落ち着かせ、一人一人寝息を立てるまで見守る。最近のはたて続けに色々な事が起こりすぎる。少し早いが、俺もツキも早く眠った方がいいだろう。

子供達が眠り、年長者組も眠り、いつものように最後には俺とツキが残る。今俺が居るのは、元印刷機が置いてあったメインルームだ。何をするわけでもなくがらんだこの無駄に広いスペースにどっかりと胡坐をかいて座っている。

「カグヤさんがシャー口を裁く……？」

「シャー口はともかく、今頃はカグヤもそれを耳にしているはずだ。あいつがどんな面をしているか見てやりたいぜ」

戸締りの確認も済んだのだろう、湯気立つ俺の分の湯のみをコトリと目の前に置いたツキは、隣に座り込む。

「シャー口に罰が下った場合、罰はどの程度のものとなる？ 勿論それは冤罪だがな」

ツキは博学で、雑学もかなりのものだ。あえて「シャー口は無罪だ」という言葉を口にしなかった。状況の悪さが、最悪の結末となつて降りかかってくる想像がイメージできてしまっているのだ。皆分かつてる。無実だからといって無罪になれるほど、この街は綺麗に作られていない。そもそも「窃盗」の時点でまず間違っているのだ（あえて言いきろう）。

「あの子はまだ十二歳。それをふまえれば、ギリギリで……腕が切り取られるような罰まではいかないと思う。鞭打ちを受けて——それでも、しばらくは立てないかもしれないけど——許してもらえないはず」

鞭打ち。

ふいに体が疼いた。

ハッとツキは俺を見て、心から詫びるかのように俯く。

「ごめん……アーティ」

「謝るな。今は俺なんかよりシャー口だ。それよりも休めツキ。明日はきつと、しんどい一日になるぞ」

ツキは強い。何より皆を護る「お母さん」として決して崩れてはいけない。そのためにも如何なる心労が来ようか負けるわけにはいかないのだ。

寢室へ戻る彼女に俺はかねてからの疑問を投げかけた。全ての発端となったそれを。

「あいつを恨んでないか？ ツキ」

振り返って微笑んだその顔は聖母のように美しい。

「私達の家族であり子供だぞ。子供のやんちゃを見るのが大人の役目よ」

「親父」の言葉に従っているのは俺だけで、ツキにはその義務は無いというのに。それでもツキは気高く強く在った。

いい女だよ、お前は。

適温になった湯飲みを飲み干すと、俺もツキの後を追った。

それはどこか遠い国の神殿を思わせた。どのような建築様式なのかは知るべくもない。コンクリートで綺麗に模った丸い石柱が、その上に被さるお城のテラスのようなアートチックな屋根を支える。正面入り口と思える建物は、神を思わせる荘厳な彫り物が壁にびっしりと散りばめられ、天へ挑戦するが如く上へ上へと増築させられていた。そしてその天辺、まさしく神と一番近い位置に、身長は何メートルあるのか、フードと法衣で己を纏い、自愛に満ちた微笑みの銀の女神像が眼科を見下ろすかのように佇んでいる。

これがベレスにおける、神の名の下に作られた一番大きな裁判所だ。周りには芝生が敷き詰められ、それを水色の作業着を着た男達が手際よく機械で刈っていた。草を刈るだけでお金を貰えるのなら、是非ともそんな仕事は俺に回してほしい。そこらの奴の三倍は早くやってやる。

「私達には関係ないけど、税金つてこういう場所に消えていくのね」ツキの呟きに俺は内心頷く。こんなご立派な建物を建てる、そしてそれを維持するのに果たして一日換算いくらのお金が必要なのだろうか。お高く振舞うにも程がある。ここの奴等が貧困街に突き落とされたら三日と持たないに違いない。

ボロボロの服を着て裁判所の周りをウロつく俺とツキは否応無しに注目を集めていた。仕方なく適当なベンチを見つけ腰を下ろす。行きたい、とダダをこねた子供達を残してきたのはやはり正解だった。九人でゾロゾロしていたら強制的にどこかへ退去されかねない。一応場所が場所なのだ。

アーベストさんは既に中に入って行った。入り口で警備員に身分証の提示をされていたようだが、彼が一言二言何かを口にするのと、慌てて警備員達が頭を下げて中へと通すのが見えた。あの人の情報網は計り知れない。何せあの貧困街を相手にしているのだ。

探偵が俺達に残した携帯電話を手取る。使い方は教えてもらった。法廷内で携帯電話の使用は禁止されているらしく、アーベストさんはリアルタイムとはいかないが、時々室内から外に出て電話で逐一報告をしてくれるとの事だ。

「アーベストさん。ありがたいけど探偵の仕事はいいんですか？」
「スケジュールがギッシリ埋まっている有能探偵なんていないだろう？」

最後に聞いたその答えは、要は暇だという事だ。比べていいのか分からないが、俺が小説や漫画で読んだ探偵達も、基本的には仕事でいっぱいはいっぱい、などと言う事は無かったのを思い出した。

時間が近づくにつれ俺もツキも無言になる。

別にここに来てもしャーロに会えるわけではない。でも来ずにはいられなかった。ちなみに被告人が逃げ出したり逃亡の手助けを外からされないよう、いつどこからシャーロが裁判所に入ったのかは秘密になっているしアーベストさんでも掴みきれなかったらしい。本当なら、俺とツキの顔だけでも何とかしてシャーロに見せてやり

たかったのだが。

どこかで鐘が鳴った。重い重いその調べは俺の心に暗雲たる不吉な何かを連想させた。

午前九時。裁判の始まりの合図だった。

——俺達にできる事は何も無い。散々不条理な扱いを受けて生きてきた俺達は神へ祈る高尚さなど持ち合わせていない。ただ目の前の携帯電話が鳴るのを待つて、息の詰まるような時間を待つしかないのだ。

あの二人はもう対面したのだろうか。シャーロはもしかしたらホツとしたかもしれない。こんな場所で、初めて自分を知る人間と出会えたのだ。だがカグヤの事だ。あいつは中立、きつと例外は許さないだろう。無罪……を期待するのは浅はかだろうか。アマネも言うていたではないか、たとえ相手が肉親だろうが知己だろうが彼女は罰を下すと。

中の様子が知りたい。シャーロの顔を見たい。だが裁判というものはやたらと時間がかかるらしい。そうすぐには判決などでないのだろう。

だからこそ開始十五分で携帯電話が鳴った時は俺達は少なからず驚いた。

一体どうしたのだろうか？

「アーベストさん？」

「クソッ！ 一体何なんだ！！ 本当にどうなっているんだこの裁判は！！」

狼狽。あのアーベストさんがここまで取り乱すなんて俺には初めてだ。良い知らせのわけがない。

「どうしたんです！ シャーロは無事なんですか！？」

横から切羽詰った顔でツキが電話越しにアーベストさんに詰め寄る。普段は、何故かツキに大して敬語を使うアーベストさんもこの時ばかりは声をあらわに吐き捨てるように俺達に告げる。

「始まって十五分足らず。なのに……なのにもう判決が出ようとし

ている！」

「何を言っているんです！？ そんなの物理的にありえないでしょう！」

珍しくツキが色めいた。

「最初に検察側の陳述として、被害者家の家主が出てきて盗まれた物を列挙していった。次に警備員の証言だ、昨日巡回中に家から走り出るシャーロを捕まえて取り押さえた様子。その際に服を調べたら出てきた金品の数々……」

「シャーロは！？ シャーロにだって弁護士は付いているでしょう！」

「貧困街側の弁護士なんてたかが知れているとは聞いてはいたがね。正直じかに見て愕然とした。はつきり言って弁護する気ゼロだ。反論もせずただ一言こう言ったよ。『弁護士は司法取引を望みます』とね。二人で打ち合わせを事前に行っていた様子も無い。シャーロはポカンとしてた」

「司法取引？」

「この場合は、要は罪を認める代わりにその罪状を少しでも軽くしてもらっ、て事だ」

俺達貧困民に対し、まともな裁判など最初から期待はしていなかった。でもこれは――

「以上をダラダラやって十五分だ。休憩を五分間挟んで判決が出るらしい！ 笑わせるだろ！？ こっちはわざわざ早起きしてここまで来たって言うのによ！！ 学校のご丁寧な授業だつてもっとキツチリやるさ！？」

何かを力任せに叩く音。アーベストさんの歯軋りの音が聞こえてきそうだ。

そこから先は俺でも知っている。以上全てを聞き、そして全ての結論を出すのはたった一人に委ねられるのだ。ここから先は誰も立ち入れない。白き天秤の乙女、ただ一人の空間となる。

でも一体どうして？ シャーロは誰かに恨まれるような事をした

のか！？ 俺の元から駆けて行ったあの後何があった！？ 明らかにこの裁判の内容はおかしすぎる！ そして何より腹立たしいのは、おそらくこの展開に誰一人として法廷内にいる人間が疑問を持っていないであろう事だ！

ランバルドの言葉が頭に木霊した。あの時の言葉の数々の意味がようやく頭に浸透し始める。

「全てを決めているのは……カグヤなのか？」

驚くくらい自分でも冷めた声。だが二人は俺の一言に剣呑さを感じ取ったらしい。

「駄目だアーティ。行ったら駄目だぞ」

「あいつはこの茶番劇の全てを知っているのか」

役割がまるで見えない。誰がシャー口を疎んじ、何故ここまで、笑わせるくらいの法廷三文ドラマを演じなくてはならないのか。とにかく分かつている事実の一つだけ。

「結論をカグヤが出すのは五分後か！」

ツキの制止を振り切り、俺は居ても立ってもいられずその場から駆け出した！ お上品に育っていればもっと別のやり方があったかもしれない。だがあいにく俺が育ったのはあの貧困街だ、昔から何かあると自分自身の力で決着をつけてきた。この手で、足で、口で。ああ、頭では分かっている、俺が行ってカグヤに文句言っただけ、それで判定が覆ってみろ、裁判あがったりだ。でもそんなのは関係ない。ここで行動しなければ、俺はもう一生シャー口のために何か出来ない気がした。

「おい、止まれ！ 止まらんか！！」

馬鹿正直に正面入口から突入する俺の前に、当然警備員が立ちただかる。だがその動きと肉体を見てせせら笑う。緊急時に対する心構えが出来ていないのは明白だ。この街の警備員など所詮こんなものか。

俺は唸りと共に先制を仕掛けるべく――

「アーティ様、どうぞ。遅かったですね、もう裁判は終わってしまった

いますよ」

目の前の仰々しい木製の扉が開かれたかと思うと、そこには会釈をしつつ腕を奥へ伸ばすメイドが立っていた。

「ア、アマネ様」

戸惑う警備員達にアマネは春風が似合いそうな爽やかな笑みを浮かべた。

「こちらはアーティ様、あちらからいらっしゃるのはツキ様。私が招待した方達です。ご心配なく」

いくら心構えが出来ていないとは言え、その言葉を鵜呑みに出来るほど警備員達も阿呆ではない。戸惑う声と俺達への敵語があがる。だがそれは予想の範疇だったのだろう、アマネはただ一言彼等に冷たく言い放つ。

「カグヤ様の唯一無二、側近第一侍女である私の言葉が信用できないのですか？」

縦社会は上からの命令には逆らえないと聞いた事がある。まだ少女とも言える黒髪のメイドに、恭しく頭を下げる警備員達。口を揃えて非難を詫びる姿は笑いすら誘える。

「何の気まぐれだ。カグヤに近づくつもりはないが、あんたが俺達を招き入れる理由も無いだろ」

「勘違いなさないで下さいアーティ様。ここで騒ぎを起こされては裁判に支障がきたすかもしれません。でしたら素直に通した方が私達もアーティ様達もお互いが満足されます。僭越ながら、私が貴方を止めるという手もあるのですが、カグヤ様がお世話になられた以上、それは無礼というもの」

最後の一言で俺のこめかみが反応する。コイツの言葉を俺達流に翻訳してさしあげよう。要は、お前なんて軽く倒せるけど恩があるから見逃してあげるよ、だ。

「アーティ、行くよ！ アマネさん、ありがとうございます」

言い争っている暇は無い。五分、というのはアーベストさんが法廷を出る前のタイムだ。実際電話で話してここまで俺達が駆けて

来た時点で消化されてしまう程度の時間のはず。

「突き当たりを左に、その奥にある大扉の奥で現在裁判が行われております」

「クソッ!!」

時間が惜しい。アマネを振り返りもせずには俺はツキと共に駆け抜ける。ああ、そう言えば結局ツキも来たんだな。当たり前か、「お母さん」と「お父さん」が子供を迎えに来るなんて当然だ。

言われるままに全速力で角を曲がる。一体何の意味があるのか、高価そうなシルクの赤い絨毯が通路に向かって伸びている。それを無作法に蹴って行くと小金色に縁取られたベージュの悪趣味な扉がその突き当たりに見えた。丁度最後の一人が遅刻気味に中に戻ろうとしていたのか、僅かに扉が半開きになっており今まさに外の二人の警備員によりそれが閉ざされようとしていた。僅かな隙間、そこから漏れ出してきたのは耳に残る銀色の鈴の音色。

「判決——」

扉が閉ざされた。同時に外で番をしている二人の警備員が荒々しい足音と共に突進してくる俺達に気づく。即座に腰に入れた警棒に手をかける所を見ると、迎え撃つ気満々らしい。アマネめ、こつちの警備員にも話くらい通しておきやがれ！

殺す気だった。

邪魔立てをするのなら俺は容赦なく二人をこの手でぶちのめす気でいた。あの扉を隔てた向こう側にシャー口が居るのだ。そして

……カゲヤも！

獣のような咆哮は俺の喉から発せられたものだ。日々怠慢に生きている連中と、日々死に物狂いで生きている俺達との、生への差がここで如実に現れた。俺の声に何を感じたのか、警備員達の双眸が降伏、と呟いたのが見て取れた。その瞬間、二人の人間は二本の障害物と化す。だが俺の勢いは止まらない。お上手に手を使って扉を開くのならこうした方が百倍早い。

跳躍は飛翔へ、そして破壊は開放へ。その先に待っていたのは――

「戸籍登録無し、名称シャー口。背に鞭打ち五十、顔に鞭打ち三十、両足に鞭打ち五十の後に右腕を斬手。神の教えに背いたその罪、罰を持つて贖いなさい」

神の無慈悲なる宣告が下されたところだった。

勢い良く開かれた扉だ。およそ二百人くらいか、傍聴席に居る人間の多くが何事かと俺達に視線を向ける。身なりからして多くは裕福層でも更に上流階級の連中なのだろう、いかにも暇潰しで見学に来た、という感じの人間ばかりだ。中には社会勉強のつもりか子供連れもいる。下った判決を聞いてもヘラヘラ笑いながらこそこそ隣同士で話したり、中央に位置する被告を指したりしていた。

そして指の先に居た。見知った後姿。あれだけ元気の良かった子が、今ではありありと分かるくらいに小さくなっている。その対面には七人。六人の脇役老人と、その中心に位置し、立ち上がって書類をたった今読み上げたばかりの銀の少女。

あんなに会いたがっていたのに——！ シャー口はどんな気持ちだろう。やっと会えたと思ったその人物が自分にどんな仕打ちをしたのか——！！

「シャー口オオオオオオ！！！」

弾かれたように振り返るシャー口。その瞳は涙で濡れていた。肩が震え嗚咽を漏らし、あの天真爛漫とも言える子の面影がまるで見えない。

「アーティイイ！！ 俺、俺やってないよ！ 濡れ衣だ、無実だよ！！ だが、カグヤがこの建物に入っていくのが見えたんだ。俺せめて挨拶だけでもしようと思って追いかけて——！」

鞭打ちを背に五十、顔に三十、両足に五十、更に右腕切断！？

この子が、この子がそれだけの大罪を犯したというのか！

「これにて閉廷。連れて行きなさい」

白き天秤の乙女は感情の無い抑制した声で淡々と事務的に告げる。俺の声くらい聞こえているだろうに、こちらを見ようともしない。被告であるシャー口を見つめ、やがてそれにすら興味を失ったかの

ように手元の書類を整理し始めた。あくまでその姿は凜としており、一切の迷いも躊躇いもみられない。シャーロの事が分からないはずないだろうに。

それが俺を狂わせる。

「シャーロはお前にただ会いたかっただけなんだぞ！？」

解けない謎に頭を悩ませていたシャーロ。横から何気なく口を出して正解を言い当てたカグヤを、シャーロは目を輝かせながら見ていた。

「その答えがこれかよ！ 中立様はそこまで偉いのか！！ 恩を売るつもりはない。でも、俺達と過ごした日々の答えが、鞭打ちと斬手なのか！！」

さすがにここまで来ると周りの連中が黙っていなかった。見るからに貧困民と分かる格好、そして公共の場で白き天秤の乙女に暴言を吐く俺を警備員達が束になって取り押さえにかかる。

「貴様あ！ 神の使いである白き天秤の乙女を侮辱するか！！」

「どこから入り込んだ、コイツ等！！」

束になられては俺も適わない。即座に取り押さえられ、それでも俺は頑なに顔だけは正面を維持し続けた。いつの間にかカグヤもこちらを見ていた。無表情に、無愛想に。その顔はこう言っている。

「いつもの事だ」「もう何百人と見てきた光景だ」

吼えずにはいられなかった。

「俺とシャーロをそんな目で見るな！ シャーロはシャーロだ、その他大勢のカテゴリーで括って見ているんじゃないやねエ！！」

警棒が俺の腕や足、頭に容赦なく降り注がれる。上流階級の連中が汚いものでも見るかのように俺を見ている。だが決して慌てていない。視界の端に、脇役の六人の老人達がのんびりと退出するのも見て取れた。

ああ、そうかよ。つまりあんた達からすれば、ここで誰かが叫んだり喚いたりするのはよくある程度、の事なんだな。カグヤもつまらなさそうに俺達を見るわけだ！

ついには完全に四肢の自由を奪われ地べたに取り押さえられる。
俺を呼ぶシャーロの声、ツキの声、アーベストさんの声もどこから
聞こえた。それでも……

それでもカグヤは身じろぎせずに俺を見つめていた。

何が面白いんだよ。いつもの事なんだろう？

そして目の前に影が現れる。見上げるとそこには威風堂々とした
佇まいのメイド。

「よお」

「お気は済みましたか？ 判決を終えたとは言え法廷は静寂を好ま
れます。ご無礼をお許し下さいアーティ様。……失礼します」

項に軽い手刀が一撃。まるでアクション映画の主人公だ。優しい
その刀で俺の意識をバツサリと切り捨てた。抗いようのない無が俺
の意識を突如支配する。落ちる。残った意識の底でそれを認識した。
遠くからはシャーロの叫び声。俺の身を案じている場合じゃないだ
ろうに。眠りに落ちる最後の最後、俺が頭に思い浮かべたのは銀の
お姫様だった。確信は無いしもはや確かめる術も無い。でもきつと
この落ちる瞬間までも向こうは俺を見ている。そんな気がした。

喋れよお姫様。口に出さず見ているだけじゃ、何を言いたいのか
分からないぞ。

線が切れた。

第六話

4

救わなくてはならない。

そこは光が一切届かない暗闇の中だった。俺は其中で自分の存在さえあやふやなまま走っている。一歩二歩と足を踏み出す事に思い出していく。まず自分の輪郭が浮かび、次いで両手両足がはつきりと視覚できるようになり、最後に戻ったのは記憶だ。

きつとこれは夢の中だ。ならば早く覚めないといけない。だから俺は走り続ける、この闇の世界の出口を求めて。

光が無いにも関わらず、男の子が俺の先に突如として現れたのを視覚できた。思わず足を止める。目指していた目的そのものだったからだ。シャーロだ。だがそれは十二歳のものではない。虚ろな目と怯えた体。そう、俺達の家に来る子供達は最初はそんな状態が多い。目の前のシャーロは、ツキが連れてきた当時のものだ。言葉も発さず、飯だつてツキや俺が促してようやくおそろおそろ口にしたのを覚えている。やがてあいつは探偵の道を歩み始める。教科書は俺が拾ってきた推理小説だ。アーベストさんと初めて出会ったシャーロは、本物の探偵が目の前に居る事に興奮を隠せず弟子入りを申し出た。現在でもそれは果たせていない。

「アーティ」

気づいたら目の前のシャーロは、俺がよく知る今のシャーロになっていた。微笑んで、格好つけてパイプを咥えている。

「待ってるシャーロ、今すぐ助け出してやるからな！」

「ツキとキスはしたの？」

こんな時にそんな低俗な質問か。コイツは今の状況を本当に分かっているのだろうか。

「お前を助け出した後に答えてやる。それまで保留だ、分かったな」

小さな笑い。そして何故かシャーロは寂しげな目を揺らした。嫌な予感めいたものが俺の胸を駆け抜ける。

「ありがとうアーティ。僕、アーティとツキと家族になれて本当に楽しかったよ。探偵にはなれなかったけど……でもすっごく楽しかった！」

「何言っているんだお前……」

「それからアーティ。カグヤはきっと、悪い人じゃないよ。僕、泣き喚いちゃったけど……」

闇に光が満ち始めた。シャーロの姿がそのまま白く溶けていく。温かい光、俺はこの光を知っている。一日の始まりを告げるお日様の眩しい輝きだ。ゆつくりと意識が浮上していくのが分かる。シャーロがこの場所から消えてしまう。そう思ったら俺の口はいつもの二倍の速度で動いていた。

「別れの言葉みたいな事言っているな！ いいか、そこ動くなよ？俺が行くまで——」

言い終わる事は叶わなかった。気づけば周りにあった一片の闇さえも消えて無くなっている。どこからか声が聞こえ、自分の体が横になっているのも分かってきた。現実と夢の境目に俺は居た。そしてその国境を越える最中、最後のシャーロの声が頭に届く。

さよなら。

妙な夢のおかげで寝ぼけるといふ事はなかった。現実に戻ってきたと同時に意識が覚醒する。だからこそ、周りを見渡して自分の布団で眠っていたと理解した時は少なからず驚いた。裁判所であそこまで立ち回りを演じたのだ。どうして留置所でなく自宅で目覚めているのだ？

「お目覚めかいアーティ」

不気味なほど静かに声をかけたのはアーベストさんだ。頬はやつれ、心なしか目に生気が無い。らしくもなく壁に寄りかかって座っている。

「俺は……どうしてここに？」

「アマネお嬢さんの計らいだ。彼女と面識があるとは驚いたよ。理由はよく分からんが、君達二人は自分が招いた客だから文句があるなら言え、と。何とも強引だがね。白き天秤の乙女、側近中の側近だ。そこらの適当な大臣よりよほど位が高い彼女がそこまで言えば、誰もアーティを留置所に入れようと意見するチャレンジャーはいなかったよ」

あのメイドも今一つよく分からない。こうして俺を助けてくれたのも、カグヤを助けてもらった事への恩義のうちなのだろうか？

——それにしてもやけに静かだ。耳にする音言えば、どこから一定感覚で聞こえてくる、くぐもった鶏の鳴き声だけ。

「どのくらい寝てた」

「七時間程度だね」

「何!？」

慌てて時計を確認すると、すでにその短針は四を指していた。裁判は確か午前九時から始まったはずだ。

「何度揺すってもアーティは目を覚まさなかったのよ。アマネお嬢さん、見事すぎるね本当。起きたら君がどのような行動に出るか分かっていたからこそ、自らの手で君の意識を奪ったわけだ。事が終わるまで寝ていてほしかったんだろっね」

何を言っているのかよく分からない。だが俺は夢で見た大切な事を思い出す。

「シャーロだ! シャーロをすぐ助けに行かないと!」

「だから今言っただろう? アマネお嬢さんはそれを予期していたから君を眠らせたんだ」

愕然とした。

確かに異例（彼等からすれば当たり前なのか？）のスピードで裁判は進んだ。開廷、即判決、閉廷。でも、まさか……

「アーベストさん!! まさかもう刑は執行されたのか!?!？」

鞭打ちの総数は百を超える。それに——斬手。

「幼いシャー口に、耐えられるわけない！！ あんなふざけた判決を本当に——」

「まだ分らないのか！？ どうしてここにツキさんが居ないのか分らないのか！！ 聞こえないのかよお前には、ええ、アーティ！？」

溜め込んでいたであろう怒りは、一人事態を把握せずに呑気に眠っていた俺に爆発した。鬼気迫るその表情、全ての仮面をかなぐり捨てたアーベストさんがそこに居た。

黙りきったこの空間に相変わらず聞こえてくるのは、鶏のしぼんだ空気音のような断続的な鳴き声。

——待て。我が家に鶏なんていない。そもそも、外ではなく家の中から聞こえてくるのではないか。これは何だ。これは——人の声？「泣き声？」

阿呆の頭がようやく声の主を理解した。

走る。風を切る。声の元へ吸い込まれるようにして体が飛ぶ。そこは居間をかねたこの工場のメインルーム。昨夜俺がどっかり座り茶を啜っていた部屋だ。七人の子供達は、泣いている子もいれば、状況がよく分からないのだろう、呆けたような顔をしている子もいる。そして少し離れた所にツキだ。何をするでもない、こちらからは後姿しか見えないがただ呆然と両膝について座り込んでいる。彼女の手を抱えられているのは白いシートで包まれた「何か」だ。

「ツキ？」

身じろぎ一つせず、まるで魂でも抜け落ちたかのようなツキはおよそ彼女らしくない。俺は不安を隠さずもう一度ツキ、と静かに口にする。震えていた——俺の唇が。

「アーティ」

掠れた声。生命の通っていない声。彼女は首だけで俺を振り返り、虚ろな瞳で呼びなれた単語を口にした。それは俺の名前を呼んだのではなく、俺という単語を発したに過ぎない。

彼女の僅かな動きの中で、白いシートに包まれていた「何か」か

ら、木製でこげ茶色の、安っぽい装飾を施した笛に似た物体が床に落ちて転がった。

パイプだった。

有無を言わず俺は「何か」に詰め寄る。息が荒く、恐怖で目が強張っているのが自分でも分かる。反射的にツキが「何か」を強く握り俺から遠ざけるかのように身を振った。

「見せる、ツキ」

「駄目、駄目駄目駄目」

「見せるんだ!!」

嫌がる彼女の腕から強引にソレを奪い取る。叫び、引つ掻き、半分ヒステリーのような状態になりながらもツキは俺から奪い返そうとする。だがその前にシーツの膨らみの先端、最も丸みを帯びてソレがソレであるために自己主張しているように見えた部分を剥ぎ取る！

眠るシャー口の横顔は、かつて咲き誇った生命を労わるかのように安らぎに満ちていた。

そして俺は理解してしまった。

俺達の子、シャー口はもうこの世に居ない事に。

「あ……ああああああ……ああッッッッッ!!!!!!」

叫んだのはツキの方だ。

彼女はその時「お母さん」をやめた。俺に寄りかかり一人の女として、絶え間なく流れる涙を拭う事もせずに泣きじゃくった。

子供達の前で——しかも俺が無様に眠っていたのだ——我慢して、感情に流されないよう必死で心を塞ぎ止めていたに違いない。赤子のように泣きじゃくる彼女に、俺はかけるべき言葉を持たない。きつと最後まで必死だったのだろう。妙な眠りに陥った俺の横で、孤独に頑張ったに違いない。寝てた方はどれだけ気楽だった事か。

シャー口の顔にはみみず腫れなどという言葉では表せない筋跡が何本も付いていた。暴力的に、相手を壊すためだけに振るわれたのだろう。唇は裂け、瞼は潰れ、愛くるしいあの顔は見るも無残に暴

虐の限りを尽くされていた。

——ツキが必死に俺に見せまいとしたのも頷ける。こんな無残な姿になった俺達の子を相手に見られたくはないだろう。そつとシーツを戻して、冷たく軽くなったシャーロの胸に顔を埋めた。遠慮するかのように背後からアーベストさんが近づいてくる。足音で分かる、先程の爆発とは打って変わった表情をしているのだろう。そして俺にだけ聞こえるようにそつと真実を教えてくれた。俺の肩で泣いていたツキには聞こえたのだろうか。

「事前に取り決められていたかのような手際で、閉廷後に刑が執行された。幼いシャーロがあのような刑罰に耐えられるはずもない。傷跡を見ると、背中と顔に鞭打ちを受け、そこで力尽きたのだろう。死人にそれ以上行うのはさすがに気が引けたのか、刑はそこで終わっている。本来なら罪人行きのお墓に埋まる予定だったらしいけど、僕とツキさんで必死にお願いして遺体だけ引き取らせてもらった」

「そして……二人が走っている間、俺は一人で馬鹿面して眠っていったんですね。……すいません、アーベストさん。それから、説明なんて辛い役割を押し付けました」

「いや、こつちもすまない。法廷での君を見ていながら、僕はただ傍観していたというのにね」

何も無い静寂に泣き声だけが木霊する。誰も何も言えない。何も出来ない。これからどう歩けばいいのか見当もつかない。

家族が命を失うのは初めてではない。だがこんな……理不尽で、残酷で、暴力的な死は初めてだ。シャーロは最期どんな思いだったのだろう。

静かにアーベストさんが立ち上がった。

「少し——一人になるよ」

「ええ。アーベストさん、本当にどうもありがとうございました。

俺、助けられてばかりです」

だが見上げた時、そんな言葉は耳に入っていないかのように彼は前を見つめていた。いつも適当感を全開にし、だらしなさをアピー

ルしているアーベストという男は、獣の目をして拳を握っていたのだ。思わずその真の姿に息を飲む。

「一体何があったのか未だ細部は分かっていない。僕は僕のやり方で真実を見つけ出す」

その声には何者にも屈しない鋼鉄の意志と力が宿っていた。

「たった一人の可愛い弟子がここまでやられたんだ。師匠として僕は絶対に許さない」

——シャーロはその言葉を天国で聞いているだろうか。

おい、どうやらお前、念願かなって探偵助手になれたみたいだぞ。「アーティ。僕がこの儲からず危険と隣り合わせな街で探偵をやっているのはね、死にたかったからなんだ」

突然の告白。それが冗談なのか事実なのか分からない俺に反応はできなかった。

「元々僕は裕福層でドラッグ事件を得意とする弁護士をしていたんだけどね。ある時、弁護していたヤク中の男が暴走して妻と娘を殺されちゃったんだ。その後抜け殻となった僕は、早死にできるだろうとの理由だけで貧困街で探偵業を掲げてみたんだけど——」

今こうして生きている。それどころか、俺達の間で知らない人間は居ない程の人物となっている。

「気づけば、また大切なものが沢山手の中に存在していた」

「アーベストさん」

自分よりずっと多くのものを見てきたこの人に俺ごときが意見なんて出来ない。目の前の探偵は大人であり男であり、その何て事ない背中がとても大きく見えた。だから当たり前な事を言っただけで「死ぬ気じゃないですよ。そんなの許さないっす」

「まさか。僕のような小心者に死ぬ勇気なんてあるはずないじゃない」

ヨレヨレのコートは気だるそうに首を一回転させながら工場の入り口「玄関」へ向かう。そして俺達が見送りできそうにないと分かっていたのか、さっさとそのまま外に出て行ってしまった。鉄製の

厚い玄関が閉じられる。しばらくすると誰かが外で盛大に転ぶ音がした。多分わざとだ。

シート越しに、シャーロの亡骸に視線を落とす。今ならあの夢の意味が分かる。

「本当に死にやがって……。大体、探偵は死ぬモンじゃないだろうが。名探偵なら尚更だ」

ポツリと呟いた言葉は涙の代わりに俺の手元に落ちた。

墓を掘った。見晴らしの良い丘の上だ。夜明けと共に一番に朝日が差し込み、小汚いこの街を見下ろせる場所。探偵は事件が起きたら現場に召還される。だが残念ながらもうシャーロが呼ばれる事はない。だからせめて……。この場所から街をずっと見ていてほしかった。どこで事件が起きても分かるように。

その夜ツキは子供だった。思い出したように泣いては俺に顔を埋める。それが収まった頃にはまた涙が溢れ出てくる。夕飯もツキの代わりに俺が作ったし、彼女と同じ布団で寝ざるをえなかった。こんな時だと言うのに、それともこんな時だからか、彼女が強く俺を求めてきているのが分かった。あの勝気な顔は今俺の胸の中に埋まっている。静かな夜だ。その静寂を乱すような事はしなかったし、それが彼女の問いへの答えだ。拒絶ではない、受け入れたいからこそ半端な真似は出来ない。

「どうしようアーティ。私、私このままだと、カグヤさんのこと――」

何も言えなかった。俺達は家族を失った。死んでも守れ、その親父の言葉を俺は守れなかったのだ。そして他ならぬその無慈悲な判決を下したのもまた家族であった。

「教育の…… 賜物か」

もはやそれだけでカグヤを放置できるほど、俺も心穏やかではないられない。ツキが今日取り乱してくれたおかげで俺は冷静でいられたのかもしれない。彼女が真の意味で頼れるのは俺だけだし、その

逆もしかりだ。

直接聞くしかない。強くそう思った。たとえ神を陵辱してでも俺には失われた一人の家族の方が大切なからだから。

ロクに眠れないまま夜が明けた。夜中ずっとお互いの顔を見ていた気がする。先に寝息を立てたのは、やはり泣き疲れていたのだろうツキの方だった。

誤解されるといけないので、俺は簡単なメモ書きをツキの横に残すところり家を出た。本当ならここから数日間はずっと彼女の傍にいてやりたい。だがそれと同じくらい、俺はシャーロのために何かをせずにはいられなかったのだ。足早に歩く。乾いた風が俺の目を眩ませた。大人な俺は周りに誰もいないのを確認してから、手近にあった瓦礫の山を思い切り蹴飛ばす。やっと何かに八つ当たりができた。息が乱れるまで何度も何度も蹴った。腐りかけの木材が砕け、砂と泥が舞い吹き込んだ。

そして大きな溜息をつくとき、俺はそのまま目的地へと向かう。

彼等には昼も夜も大して関係ない。これから屑拾いにでもいくのだろう、既にその「街」は目覚め人々は活動していた。住処を失った所までは俺と同じ。だが「陥没した所有者不明の建物」に居座る争奪戦にも敗れた人間達が落ち着く場所だ。コンクリートや木造建築の壁、瓦や鉄筋の屋根とは程遠い、ビニールシートのテントを我が家として暮らす人達。老人や女子供が若干多い。毎朝合わせる顔ぶれはある程度決まっているのだろう、朝の挨拶を掛け合っているのが耳に否応なしに入ってくる。だから関係ない俺が遠慮なくこの河川敷のテリトリーに踏み込むと、彼等は警戒の色を浮かべた。俺の態度から新顔の線はすぐに消したのだろう。残ったのは厄介事の線。何人かはあからさまに俺を避けるようにテントの中に姿を消していく。それでも話しかけられたのは、そこまで殺伐とした空気を纏っていないからだろう。

「どうした？ 兄ちゃん。誰か探してるのか」

こちらに敵意が無い事が分かれば向こうも同じ態度を取る。そも

そもこの人間達は、弱い者同士で助け合って生きている。だから……貧困街では珍しい事だが、基本的に「いい人」がちらほら居る。当然皆が皆、ではないが。

垢と煤で汚れた顔が突き出た。白髪頭の老人だ。どこで拾ってきたのか、焼け焦げて腰回りの部分が不恰好に千切れているグレーのダウンジャケットを羽織っている。それでもジャケットなどここでは上物だ。

「新入りってわけでもなさそうだな」

さて、どうしたものか。とりあえず俺は奴の身体的特徴をあげた。「ここ一週間くらいで入った新入りを探している。男で年齢は四十前後だと思う。背が高く、筋肉質で恐ろしく強い。最後に見た時はグレーのワイシャツと、ダブルスーツの真っ黒なズボンだった」

反応は合った。老人はそれだけでおそらく誰の事が分かったのだろう。だがすぐに俺に答えようとしなのは、奴を俺に売ってもいいのか悩んでいるに違いない。

「大丈夫だトビさん。そいつ、ガラの所でたまに働いている奴だよ。何度か見た事ある。あのヤクザが可愛がっている坊主だ、教えてやりな」

テントから首だけ出した、フケだらけの黒髪の老人がこちらを見て笑顔を浮かべる。どうやらここは思った以上に住み心地がいいのかもしれない。候補地の一つとして覚えておくとしよう。

「やはり来たか。どうやら私の予想が当たってしまったらしいな」
前とは違い、今度はゆっくりと振り返る。その声には若干の愉悦と、同じくらいの憐憫が見て取れた。

ランバルド。俺の目的は目の前の巨人だった。

「十日前に俺達が出会っていれば、喜んでお前をスカウトしたんだがな。……いい目になったじゃないか。あの家を襲撃した私達のよくな濁った目だ」

そこまで言うと、ランバルドは周りに笑顔を向け気さくに手を上げる。心配無い事を老人達に伝えると俺の肩を気安く叩きながらテ

ントの街の外へと案内した。

「何か食うか？ あいにくロクな物は無いがな」

「いない」

川沿いに歩き、手入れされない草木が延々と伸び放題になっている人気の無い場所まで来ると、その中の大木に体重を預けてランバルドは口を開いた。

「具体的に、何があつた」

「家族を殺された」

「そうか。当然……白き天秤の乙女絡み、か？」

「そうだ」

腕を組んだランバルドは低く、怨念じみた声で俺の意思を確かめる。

「私の所に来たという事は、あの少女を殺したいという事だな？」

「——違う。少なくとも今は」

返答がおきに召さなかったのか、巨人の眉が不機嫌そうに動いた。たったそれだけでも、この男が行うと威圧感と迫力が滲み出る。

「会って話をする。何が何だか分からないうちに、あつという間にシャー口は殺されたんだ。その理由と背景をまずは……」

「皆そうだ。私も、死んだ仲間達も同じだ。お前と同じように唐突に失った。あの少女に聞けば、俺達の分まで一人一人ご丁寧に説明を返してくれるのか？ 有り得んな。あれは一ミリの感情も外に出さない人形だ。造形物に口を開く道理は無い。……あれも馬鹿ではないだろう、自分がやっている事くらい理解している。ならばその報復がいつ来てもおかしくない事くらい気づいている」

内ポケットに手を入れると、俺が警戒しない程度にゆっくりとそれを引き出した。相手の手に握られていたのはブッシュ式の銀ナイフ。刃は小さい。

「だったらこつちで話した方が手っ取り早い」

それを受け取る事はしなかった。ランバルドもその意図に気づくと不服そうに仕舞う。

「ランバルド。俺が彼女の『声』を聞いた事がある、と言ったら意外か？」

「……何だと」

さも意外そうだが。一ミリも感情を出さない。人形。おそらくそれを言う時点でそのような反応が返ってくると思った。

「カグヤは喋れるし口も聞ける。とことん無愛想で無表情で無口なのはその通りだ。殺す前に腹割って話し合った方がお互いスッキリするだろ」

唸る。どうやら本当に俺の言葉は予想だになかった事らしい。そして当然の疑問を俺の頭に投げかけた。

「お前、一体何しにここへ来た」

「本題に入ろう。ランバルド、彼女のお家へどうやって入れればいいか教えてくれ」

ストリートな問いかけは先程と異なりランバルドを唸らせるには至らなかった。真剣な目で俺を値踏みする。これから先、一言でも間違えたらあの夜の再現が始まる、そんな妄想さえ頭に浮かぶほど空気が変わったのを肌で感じる。全身の毛が逆立った。

「殺す気の無い奴には何も言う事は無い。帰れ」

「殺られたら殺り返すのか。時代錯誤も甚だしいぜ」

そして俺はあえてその一言を間違えた。やはり俺達は紅茶片手で談笑するより、この手の方が話しやすい。

俺の胸倉を掴もうと伸びた手を打ち払う。奴のもう片方の手が俺の首を絞めたのと、俺が銃口を胸倉に突きつけたのは同時だった。喋れない。そもそも息が吸えない。それでもいつでも引き金を引けるように残った意識を総動員して目の前の男を睨みつける。苦しいのは俺の方だ。このまま銃を放ってやったらどれだけスッキリするだろう。相手はへし折らんとばかりに首を締め付けてくる。

最後は目対目だ。口で喋れないなら目で語るしかない。眼球二つで物を言っちゃった。

突然新鮮な空気が喉に流れ込み、俺の肺は待ちかねたようにそれ

を掻き集める。そしてすぐに咳き込む。過剰な量の酸素が今度は逆に痰と共に口から吐き出される。鼻を鳴らしさも不快そうにランバルドは腕を組んで再び大木に寄りかかった。

「お前は殺意が湧かないのか？ 一度迎えて守り、情でも持ったか馬鹿め」

「親父に口を酸っぱくして言われてな。家族を絶対に守れ、て」
「守れなかったのだろう」

「ああ。本当なら自分の頭を吹き飛ばしたいくらいだ」

銃を仕舞う。この銃口が次に火を噴く矛先は果たしてどこだろうか。

「でもよ、後付けのダサイ理由かもしれないけど、死者の名誉ならまだかるうじて守る機会が残されている」

「……どういう事だ」

「ここで俺がカグヤを殺してしまつたら、まるでシャーロが最期にそう願つたみたいに見えてしまうだろ。あいつはそんな事思つてもないのに。残された遺族は代弁者だ。その行動で死者の無念を晴らし、その利けなくなった口の代わりにものを言わなければならぬ。俺のこれからの行動が、シャーロの行動そのままになる。なら、あいつの名誉のためにも早まつた事はできない」

風が流れた。心地良い春風だ。しじまが空間を支配し、無粋なる人と取つて代わる。

押し黙つたのは相手に言葉を染み渡らせるため。もつともその隙間があればの話だが。そして自然が寂しげに奏でる静寂は、やはり人の手によつて碎かれる。

「お前は本当に家族を愛していたのか？ そんな不必要な冷静さ……。今私達に必要なのは火を爆弾に変える起爆剤だ」

「その方が楽だろうな。そして自分を正当化しやすい。でも同時に目が曇りやすいだろ」

「私が間違つていと言うのか」

「そうは言わない。あんたが愛する人を失つたのなら、その人の死

後の物語はあんたが紡ぐしかない。俺の家族は当然俺が。お互いやり方は違うが、自分の信じるやり方でやればいいだろ」

今度の俺達の沈黙に風は通らなかった。それよりも前にランバルドが声を発したからだ。

「お前という、せつかく仲間になれそうな男を失うのは痛いな。だが確かに、お前にはお前の復讐が、私には私のやり方がある。そして目的は異なれど近い」

「お仲間にはなれそうにない。そのうえで協力をお願いするのだから、まあ……悪い」

「失う、というのは別の意味だ。行ったら生きて帰ってこれないぞ。そもそもあのような事件が起こって日が浅い、白き天秤の乙女の家は警察で埋め尽くされている。最初私達には仲間が沢山居たからな。数で攻めた。皆死ぬ覚悟だ。百人以上で攻めればその中の誰か一人は奴の首を取る。何とも頭の悪い作戦だったがな」

「でも失敗したのか」

「分かつてはいたが、奴の護衛を兼ねた側近が一番脅威となった。

アマネという侍女だ。結果……奴は父親に連れられ逃げ出し、あとは分かるだろ」

近隣の住民も戸口を開かなかったのだろう。正解かもしれない。もしそんな事をしたら暴徒に家ごと火をつけられたに違いない。そして逃げて逃げて……あの廃墟へたどり着いたのだ。

「大丈夫。アマネとは仲がいいんだ。生きて返してくれるさ」

嘘だった。彼女は良い人間だ。それは分かる。だがシャールが死んだ今、俺を見つけたら今度こそ容赦なくねじ伏せようとするだろう。カグヤへの危険分子として。今まで寛大すぎる情けをかけてもらっている事くらい俺にも分かっていて。

ランバルドは溜息混じりに首を横に振る。

「まあ、いいだろう。どうせ俺には着られない不要な物だからな、お前にやる」

「何の話だ？」

「せつかく同士が尋ねてきたのだ。饒別に警察官の服くらいはお前にくれてやろう。それをどう使うかはお前の自由だ。もつとも、そんな物を使ってもあつさりバレルだろうがな」

心から俺へ賛同してくれるわけではないらしい。だがそれでも協力の一環を担ってくれている辺り、僅かながら俺を応援してくれているのだろう（多分）。踵を返したランバルドに付いて行き、どこで入手したのか知らないが、裕福街で俺も何度も見かけた事のある警察官のユニフォームを一式もらう。布とシルクを織り交ぜて作った甘栗色のベストとズボン。上は胸元に三つの金ボタンが縦に並んでおり、右肩には銀糸で編まれた女神のエンブレムが刺繍されている。下は特に変わらない、色も生地もベストに倣う。帽子もある。色は統一感のために他と同じ色で落ちて着いている。日差し対策のために、おでこに当たる部分から外に半円状のつばが伸びている。そこだけ素材が橙色のプラスチックで出来ており、叩くと無骨な音がした。そして帽子の中心には銀の女神のシンボル。こっちは安物の天然石で彫られ組み込まれている。

これでとりあえず取っ掛かりは得る事が出来た。おそらくランバルドも独自で何か計画を練っているだろう、まだあの不敵な瞳は死んではない。ならば尚更急がなくてはならぬ、本当にカゲヤが殺されてしまったら、死人に口無しとなってしまう。

さて俺にはまだ最後の課題がある。それをクリアすべく、道中知り合いを訪ねて必要な物を揃えると、すっかり登ったお日様に目を細めて帰路に着いたのだった。

第七話（前書き）

少し短いです^^；

これ以上文を載せると長くなりすぎてしまうので……
申し訳ありません。何卒ご容赦下さいませ。

第七話

そうするであろう事は分かっていたのだろう。ツキはそれを聞く
と妙に納得した顔をした後、俺を神妙な面持ちで眺めた。一晚眠っ
て落ち着いたのか、昨日ほどの取り乱しは見えない。だがそれでも
いつものツキを知っているだけに、元氣と笑顔がいかに彼女に不足
しているかが分かる。生命溢れるくらいに行動していたあの頃に早
く戻ってほしい。

「行つてほしくない。でも、どうせ言うと思つてたぞ」

「最後までやれる事はやらせてくれ。いくら上の連中が暇人揃いで
も、無意味にシャーロを殺すなんて事まではしない。何かあったは
ずなんだ」

法廷でシャーロは言っていた。自分はカグヤが裁判所に入ってい
くのを見てただ追いかけただけ、であると。

「中立であるカグヤさんに堂々と接してきたシャーロを見せしめの
ために、て事も考えられるわ」

確かにそれは十分有り得る。一見馬鹿げているように見えるが、
だからこそあの「馬鹿げている裁判」に成り得るのだ。今更だが、
カグヤは本当に神の使いとして崇められている存在だという事を知
った。あの法廷の中で、老人に囲まれながらも凜としていたカグヤ
がいかに特別な人間に見えたか。何十年と生きた老人達が、明らか
に彼女より格下である事を隠そうともしないあの席順もそうだ。つ
まりそれがまかり通った事実なのだ。それを思うと、ツキの言葉は
俄然と信憑性を増してくる。

「どのみち、俺はあいつの口から聞きたいんだ。何を考え、どう思
つて行動しているのか。最近の子供は自分の思っている事を相手に
伝えようとしらない、てのは本当だな」

「……プランはあるの？」

「安心しろ、ヤバそうだったら逃げるさ。俺だって、お前と子供達

を残したまま逝くなんてゴメンだ」

つまり、無いという事だ。

彼女が疲弊している今だからこそ俺一人で行動できるという算段もあった。普段のツキだったら付いてくる、とも言いかねない。だが今度は裁判を傍聴するのは違う。俺はカグヤの家に忍び込みに行くのだ。重罪も重罪。それがどの程度の罰になるのか、もはやいちいち説明は不要だろう。

ツキは今、儚い存在だ。本当に消えてしまうかもしれない危うさもある。自惚れではないが、俺がもしいなくなってしまったら——正直、想像したくない。子供達の事は実はそれほど心配していない。アーベストさんが何とかしてくれると勝手に半ば信じ込んでいる。問題はツキなのだ。

「すいません、失礼します」

その時、礼儀正しい声が、我が家に飛び込んできた。控えめな、こちらの様子を伺うような声。

「はい」

この声の主は知っている。会話は中途半端に切り上げざるを得なかった。俺は走って行って鉄製の玄関を開ける。そこには恐縮した面持ちで俺と目が合ったタイラさんが立っていた。

「アーティさん、ツキさん、ご無沙汰しております。そして——」

どう表情を作っていいというのか分からないといった感じた。それを察した時、タイラさんが尋ねてきた理由が分かった。

「お悔やみ——申し上げます」

深いお辞儀。誰に対してかは問うまでもない。俺達二人も静かに頭を下げた。その体から、やりきれなさがにじみ出していた。きっとここに来るのにとっても勇気が必要だったのではないか。変な目で見るともりはないが、タイラさんはシャー口を殺した「あちら側」の人間なのだ。そして本人もそれが分かっているからこそ見るからに小さくなってしまっている。

「一人で来たんですか？」

カグヤの事を聞いたわけではない。白き天秤の乙女の父親と言ふべきほどの要人が、こんな治安の悪い場所に一人で来た事を質問したのだ。だが彼は視線を外に向けてその問いに答えた。なるほど、そこには私設警備員だろう、見るからに恰幅の良い男達が十人近く待機している。来れる所まで車で来て、あとはそこから徒歩で来たに違いない。どうして俺の引越し先が分かったのかは、彼の地位からすれば容易い調べものだっただろう。ちなみに当然カグヤの姿は無い。

「すぐに帰らなくてはならないのですが、どうしても一言お悔やみを」

自分の娘が死刑宣告同然でシャーロを殺したのだ。もしかしたらあの裁判を見ていたのかもしれない。ならば俺やツキの心境も十分過ぎるほど分かっているのだろう。

菓子類だろうか、濃紺な包装紙に包まれた小箱らしき物を取り出して俺に渡す。あまり人から上等な物を貰った事がない俺は間の抜けた返事をしてそれを受け取った。そしてもう一つ、真剣な目でツキを見ると、タイラさんは平紐付きの柄が無いこげ茶色の紙袋を手渡した。それはあえて俺でなくツキに渡された物。それを理解したツキは、おそろおそろ紙袋に手を伸ばす。

「処分される所でしたが、私の権限で引き取りました。出来る事と言えばこんな事程度です。恨んで下さい、私共を」

紙袋の中に目を落としたツキは、無意識的にだろう片手で鼻と口を覆った。あやうく中身が床に散らばりそうになる。泣きそうなツキの視線が見入るのは、虫眼鏡や伸縮自在の子供用ステッキ、三色ボールペンに壊れた無線機など、一見してガラクタの数々。

「シャーロさんの……持っていた物です。留置所に入る時に一度取り上げられたそうです。そして……申し上げにくいのですが刑が決まり、執行される数時間前、拘束され泣きじゃくるシャーロさんに同情したのでしょう、規則違反ではありますが職員が彼の持ち物を返してあげたとか。だからと言って何になるわけでもないのですが、

皆熟練の者達ですから子供があのような罰を受ければどうなるのか……分かっていたみたいです」

「あいつ、こんなに沢山どうやってポケットに入れてやがったんだ……」

探偵七つ道具とやらは必需品らしい。必死になって色々なガラクタを集めていたのを思い出す。

「せめてそれだけでも。——こんな事しか出来ず不甲斐ありませんが」

ネチネチとタイラさんを問い詰めるような事はしなかった。この人の持つ痛みは、十分に俺達に伝わってきている。背後の男達の一人在何度も腕時計に視線を落としている、すぐに立ち去らなくてはならないというのは本当なのだろう。

「私も今回の裁判には大きく疑問を感じております。いえ、本当ならあまり大きな声ではいえないのですが」

向こう側、に位置するタイラさんからの予期せぬ言葉。公の場で口にしたら何たら侮辱罪とか名を付けられて拘留されてしまうような発言だ。初めて会った時同様、その誠実そうな顔は狼狽が浮かんでいる。恐る恐る、背後に声が届かないようにそつと彼は口にした。「私も、前々から裁判のあり方に疑問は感じていました。神の名と前置きをし、常軌を逸した罰が下る件が本当に多い。今回のシャー口さんの裁判もそうです。こんな事になった今、信じてはもらえないかもしれませんが、カグヤの判決の裏の意図を何度か探ってみました。しかし、さすが」

首を振る。相手が父親だろうと彼女はその神々しい考えをご披露下さらないらしい。それ以前に立場上、タイラさんは面舞台から堂々と調べ物などできないに違いない。

「アーティさん。シャー口さんから何かお聞きになっておりませんか？ 何かを見た、聞いた。密会を目撃した、賄賂を受け取っていた」

「いえ、それが俺にもさっぱりで……」

そうですか、と呟くその顔は苦悶に満ちている。果たしてどのくらいの期間、彼はその謎を追い続けているのだろうか。やがて今がどんな時なのかを思い出したのか、慌てて顔を上げると再度頭を下げる。

「すいません、こんな時に。ご心境を考えずに一方的に。手短な挨拶で本当に恐縮ですが、失礼させていただきます」

来た時同様、深い一礼を最後に残してタイラさんは後にした。忙しないその背中を見つめ、きっとあの人も苦勞しているんだな、とぼんやり思う。同時に上から目線で物を考えた自分を呪った。

「さ、入ろっぜ」

未だ探偵道具を一つ一つ手にとってぼんやりしているツキの肩を軽く叩く。泣き崩れる事こそなかったにしろ、その瞳は溢れんばかりに輝く滴が集結しているのが見て取れた。

お互い夫婦のように連れ添って十年は経つだろうか。自分の考えている事が見透かされているのは何とも嫌なものだが、相手からすればそれも同じだ。俺は分かっていた。「俺」という男が真に自分の道を決めて進むとき、ツキは最後には絶対に折れる事をだ。これまでに何度同じような事で口論し、時には酷い喧嘩をしただろうか。俺達が二十二となった今、もはやツキの引き止めも過去に比べれば相当柔らかくなったと言えるだろう。色々あったのだ。説明？ そんな野暮な事が聞かないでほしい。「色々」で曖昧にすませてくれ。ズルイ大人がよく使う言葉だ。

そんな色々の一環もあって、あれから何度か話し合いを重ねた結果、今夜俺はカグヤに会いに行く事の許可を得る事が出来た。現在時刻は二十二時。だが――思う。よしんば会えたとして、果たして俺はどうするのだろうか？ 彼女の頭を撃ち抜きたい衝動にきつと駆られるだろう。カグヤは俺の家族だ。だが……

「アーティ、質問するぞ。家族さんの手で家族君が失われたら、その家族さんに対し、親である私達はどう接すればいい？」

難しい質問だった。そして日頃のツキならばそんな嫌らしい質問はまずしなかっただろう。

「家族さんと家族君の、納得いく答えを出して間を取り持つてやるしかないだろ。そういう時こそ大黒柱の登場だ」

出立前、今度は俺からツキを抱きしめた。ただそれだけだ。俺はこれから死に行くつもりはない。でも……殺されるかもしれない。アマネが快く出迎えて、そして俺を返してくれるとは到底思えない。「アマネに怒られるだろうな。既に牽制されているのに」

片割れとも言える女性を抱きしめながらも、俺は別の女性の話をする。悪い、ツキ。

「カグヤに近づくな」わざわざこんな辺鄙な所まで来て警告を残していったのだ。あのカグヤの一番の側近とも言える人物（それは後から知ったが）が、である。

「鈍感なアーティは想像もしてないかもしれないけど……」

失礼な前置きを残し、俺の耳元で彼女は囁いた。

「きっとアマネさん、私達の事は嫌っていないし牽制もしてない」

「おいツキ——」

「カグヤさんもそう。彼女はシャーロの事が憎かったはずないし、私達の事、アーティが思ってるよりずっと関心を持っていたぞ」

相手の心なんて分かるはずないのにツキはそう言い切った。だが現実を思い返せば、それはありえない。こんなに暖かな温もりなのに、どうして口からは冷たい嘘が出る。

「思い出せ。アマネ直々に言われただろうが。二度と関わらないで下さい、で。忙しいだろうに、わざわざそれを言いに来たんだぞ」

「アーティはもっと言葉の持つ別の意味を考える。額縁通りに全部受けていたら、いつまで経っても女性をものに出来ないぞ。台詞なんて表現の一つでしかないじゃない」

「いや、意味が分からん」

溜息。でもツキはどことなく嬉しそうだった。お前も意味が分からん。

「アマネさんはここに来て言った。『カグヤさんに二度と関わるな』。でもあの時点では、私達はカグヤさんに既に接点は無く、今後関わる事は無かった。そうだぞ、きつとアマネさんは忙しい。本当ならば主の傍を離れてはいけないのかもしれない。でもここまで来た。わざわざそれを言いに。念を押さなくても私達とカグヤさんはどうせ会う理由も約束も無いのに」

誤解しないでほしいが決して俺は鈍感ではない。その証拠にツキが言わんとすべき事が少しずつ分かってきた——かもしれない。でもそれは壮大な勘違いかもしれないので遠慮がちに聞いてみる。

「え？ まさかとは思うけど、『関わらないでくれ』は『関わってくれ』て意味だったのか？ いや、違う……よな？」

「多分そうよ。アマネさんは敵対心は無かったし、あるのだったらもつと原始的に私達の心にその楔を打ち込んだはずだぞ。それに裁判所でも結局は助けてもらっている。彼女は仕事を忠実にこなしつつ、自分の手が届くギリギリの範囲で私達と触れ合っている」

「何のためにだよ」

「従者が望む事は一つしかないぞ」

しばし考える。俺達がカグヤを助けたからアマネも俺達を可能な限りフォローしてくれたと思っていたが。でも確かに彼女は従者だ。それもド偉い。本気で俺達が迷惑なら主のためにそれこそ容赦の欠片無しにやってきそうな気がする。いや、そうでなくては務まらない。

「考えても仕方ない」

名残惜しいが暖かな安らぎから手を離す。絶対に内緒だが胸の辺りに感じた、ツキの二つの柔らかい乳房に少し心臓が跳ね気味だったのはおくびにも顔に出さない。

「何かプランはあるの？」

「安心しろ、無茶はしない。ヤバくなったら帰って来るさ」

コスプレ衣装を麻布に詰め込んで俺は明るくつとめる。残念ながら衣装だけで手錠も銃も無いらしい。拳銃だけは自前で持って行く

事にする。

これでもう本当にあとは何も無い。出て行っただけだ。この見つめ合う沈黙が重く苦しい。このまま夜明けを迎えても俺としては構わない。それくらいツキの顔は綺麗でずっと視線に入れていたい。

「あ」

呟きは背中から。俺は不自然なくらい大袈裟に振り返ってツキに背を向ける。気づけば唇が乾いていた。玄関を開くと夜風が気持ちよく肌を突き抜けていく。

「じゃ、ちよつと行つて来る。子供達と留守番宜しくな」

「行つてらっしゃい」

普段からこれくらいいしおらしければ、もつと可愛いのに。

手のかかるお姫様に面談をすべく俺はゆっくりと歩き始めた。場合によってはお尻をペンペンしなくてはならない。いや、そうしたい。こんな黒光りのゴツイ物は教育には決して向かない。

第七話（後書き）

物語内の5〜6章で終わらせます、と最初に明記したのですが……
この話で大体半分程です。
嘔吐きでゴメンナサイ；

第八話

5

カグヤの住所はすでに昼間調べてあった。この街に住み着いて長い俺には、アーベストさん以外にもそれなりに使えるコネがある。貸し借りも多いので頼みやすい。彼女の新居（襲撃されてから一度引っ越したらしい）は昨日俺達が押しかけたあの裁判所から歩いて十分足らずの場所にあった。意外にも普通らしさが醸し出ている家で驚く。あからさまな豪邸を想像していたのだが、砂岩で組まれた白い外壁と茜色のスレート屋根というのはこちら側でもごく一般的な作りのはずだ。三階建て。敷地は――俺は学校でお勉強してないので今一つ算数の単位が分からないが――四人家族の一軒家が隙間無く四軒並んだくらい。そして二階と三階はテラスになっているが当然無人である。現在時刻は午前零時。だがカーテン越しに明かりが付いている所を見るとまだ誰かが起きていているらしい。大きい家ではあるが、物語のお姫様が住むような無駄に広く、庭園がどこまでも続いている――ような非現実的なものではない。施設にあるような黒槍を連想させる進入を拒む柵も無い。

「こんなのでいいのかよ。神様が住んでいるんだろ」

拍子抜けと言えば拍子抜けだ。だが狭いという事は進入ルートも限られているという事になる。そしてやはり都の要人の家と言うだけあって、警察官が一定距離を保ちながら不動の佇まいを見せている。さぞ退屈で腑抜けているのかと思えばそうではない。一人一人が油断なく辺りへ神経を尖らせており、カグヤの特別さが伝わってくる。きつと交代の時間が来た時、彼等は腹の底から、張り詰めていた息を吐き出すのだろう。

情報は至ってシンプルだ。玄関はカードによるオートロック式。鍵と警報システムは集約され、一つのキーでまかなえる。裏口も同

様。進入できそうな窓ガラス関係はロケット弾を打ち込んでやつと罫が入る代物。家内に居るのはカグヤとタイラさん、そして従者が数人だ（余談だが既にカグヤの母親は亡くなっているらしい）。彫像のように立ち尽くす警察官の皆様は、驚く事に二時間おきの交代になっている。理由は一つ。集中力だ。一人で七時間も八時間も同じ所を真の意味で警備する事など出来やしない。結果、非効率なのは承知の上で、あそこに立っている彼等は短針がきっかり二つ進むごとに顔ぶれが入れ替わるのである。その代わりその二時間は鬼のように張り詰める。トイレ休憩を願い出た者がその瞬間クビになったという話も入ってきている。

それでも甘い。ランバルド達に襲撃されるわけだ。俺は既に着替えており、元の服（今日はポケットが合計七つあるベージュのカーゴパンツだ）が入っている麻布も適当にゴミ捨て場に投げてきた。あとで回収する予定だ。そして適当な物陰に入ると派手に足音を何度か鳴らした後、自分の体を思い切り地面に投げ出す。僅かな空気の流れにさえ敏感になっている警察官達にはさぞかし大きく響いているであろう。俺は喉から痰を吐き出しながら叫んだ。

「おい、何だ貴様！　ここで一体何を……うごっ！？」

続くのは俺の絶叫。小手先だけのお芝居だが、最後の括りとして懐に入れてあった薬瓶の蓋を開き、中身に閉じ込めてあった液体を腹の辺りにそつと垂らす。それは見事な赤。みるみるうちに、我がコスプレ衣装の腹部が血の色に滲み出した。

駆け付けた警察官達が見たのは、真っ赤になった甘栗色の制服の、丁度第三ボタンが重なる位置を手で押さえ込みながらのたうち回る俺の姿だった。

「おいどうした！　一体何があったー！」

「背の高い……長身の男。指名手配の……あいつかも……しれない。ウロウロしてたので呼びかけたら……ゴホッ！　クソッ、急に襲い掛かって……！」

「分かった、もう喋るな！」

それを聞いて直ぐに何人かが辺りへと散って行く。そして他の何人かはカグヤの家へと駆けて行った。俺の傍に残ったのは二人の警察官だけ。俺は大した傷ではない事をアピールするためにフラつきながらも立ち上がったみせた。

「おい、立つなって！」

「大丈夫です……思ったより傷は浅い。動けないほどじゃない。寝てたら……クビになっちまう。家族が大勢いまして、養わなくちゃ……」

クビという言葉は思った以上に効力があつたらしい。彼等にも家族がいるのか複雑そうに顔をしかめる。

「頼みますよ。俺の身にも……なって下さい。犯人を取り逃した上に……何も出来なかつたら……本当に役立たずだ。俺はまだ動けるだから……」

これだけ喋れるという事は少なくとも体に危険が無いという事が分かったか、それとも俺の熱意に押されたのか、彼等は嘆息した。「分かった、分かったよ。お前の気持ちも分かる。仕方ない、こんな深夜に無礼は承知だが、白き天秤の乙女の家のを鳴らして、せめて消毒して包帯だけでも巻いてもらってこい。使用人の誰かはまだ起きているはずだ」

「ああ、そう言えば知ってるか？ 以前貧血を起こして倒れた奴もあの家に担ぎ込まれたって話だぜ。そいつはクビになったそうだが、お前なら大丈夫だろ。荣誉ある傷だ」

一人が俺に肩を貸してくれた。夕焼けを連想させるような琥珀色の瞳の男だ。年齢は三十を越えているのだろう、顔に浮かんだ人生経験の浮き彫りは俺より確実に上だ。相棒（仮）の肩を頼りゆつくり歩き出す。オートロックの正面玄関が見えてくる。辺りでより一層緊張して警備する頼もしき同僚達の視線が俺の腹部に集中した。既に何があつたのか聞いているのだろう。

ブザーを鳴らし、インターホン越しに会話する親切な相棒をよそに、俺は安堵の息を漏らした。実は……この家の二つの入り口に通

すべくカードを俺は既に入手していた。先程の騒ぎでこの家の通常の警戒網は若干の乱れが生じている。俺の話した架空の男を追うためだ。あとは単純にその隙を付いて裏口に忍び込んでカードを通して中に入る。たったそれだけの計画だったのだ。

そう言えばツテの一人である、きな臭いハツカーは唾を吐きながら驚いていた。

「何だこりゃ。そこらのお家の警備と全く同じモン使ってるじゃねえか!？」

あの白き天秤の乙女の家だ、どんな警備システムになっているのかと思いきや……

ありふれた大手警備会社のシステム。素っ頓狂な声をあげていたのを思い出す。おかげでカードも一分待たされただけで手に入れた事が出来た。あまりに単純な物らしい。

結果的にはそれを使わずに済みそうだ。銀の女神には泣かされるが、俺には幸運の女神がついているらしい。

「そつえばよ」

使用人との対話を終えた相棒が俺に話しかけてきた。

「お前、どこから派遣されたの？俺はタダラのマルハチ対策から来たんだけどさ。見た感じまだ若いよな？」

戦慄が走る。自分のプロフィールを何も考えていない事に気づいた。ここに集う警察官達は言ってみれば皆エリートだ。様々な場所から来るのでほとんどお互い初顔合わせの場合が多い。

「こつ見えても二十七です」

どうする、次に何を言う。適当な事を言っただけに不審がられたら終わりだ。

「お、そうか？でもまだまだ若いなあ！いいねえ！」

年齢以上の苦勞は顔にきっかり現れているので、いくらでも俺は老けた歳で誤魔化す事は出来る。だが問題は次だ。ほら、向こうは俺の言葉を待っているぞ。これ以上の沈黙はまずい！脂汗がどつと全身から吹き出る。

「貧困街……」

「ん？」

「貧困街に署があるのってご存知……です？」

もはや傷を負って喋り辛いという演技だけではなかった。自分の言葉に自信が持てず、一つ一つを噛み締めながら亀のように口を動かす。

「何？ そんなの初耳だぞ、本当かよ！」

俺だって初耳だ。クソッ。

「あの一帯の内部情報を探るための、もぐりのようなものです。本当はあまり話しちゃいけないんですけど……少数でモグラのようにお天道様の下を這い続けてます」

「……」

相棒は何も言わずにこちらを見つめてくる。猜疑心？ 興味？

その綺麗な夕焼けのような瞳からは何も読み取れない。

「アーベストって探偵が居まして、その探偵のバックアップもあつて――」

段々と説明臭くなってきた事に辟易する。長く喋れば喋る分、嘘臭く聞こえるに違いない。だが相棒は思わぬ所で驚きの声をあげた。
「知ってる！ アーベストさんか！ たまに署でも見かけるよ。あの警察関係だけでなく色々な所にコネがあるんだよな。今日も、どこかの政治家だかお偉いさんだかと話してるのを見たぜ」

今度は俺が驚く番だ。それは素の表情となつて顔に貼りついているに違いない。しかし、お偉いさんとは？ もっと聞いてみたい。シャーロクの調査のためなのだろうか？ だが今はボロが出ないように口を閉じていた方が得策だ。とにかく固有名詞が、それも知り合いの者が出た事もあり俺のヨタ話の真実味は急上昇した。

ようやく目の前の玄関が開かれた。出迎えてくれたのはアマネと全く同じ服装で身を包んだ四、五十代と見られるのふくよかな恰幅の女性だ。彼女は俺を見ると慌てて中に上がるように促す。相棒はたった今外で起きた出来事を簡単に説明した。そして大きな手で肩

を二度叩くと、氣遣いの言葉を残して仕事に戻って行く。

何はともあれ、これでカグヤの家へ堂々と侵入できた事になる。

俺は腹の底から、張り詰めていた息を吐き出した。きつと外の頼もしき同僚達も、もう少ししたら俺の行動をなぞるに違いない。

タイル貼りの床と、高級感溢れる純白布クロスの壁が奥へと延びている。若干赤みがかった腰壁の上には金箔付きの木製額縁に飾られた絵画が点々と掛けられていた。だが外観の印象通り、あからさまな自己主張はない。これが高級住宅で、喉から手を伸ばしても俺には届かない事は分かるが、かと言って無意味に金を撒き散らすような内装ではなく、シックな雰囲気は親しみを感じられた。タイラさんの趣味なのだろうか。

「どうしたんだい？ 刺されたのかい。でも大したもんだよ、顔色もしつかりしているし一人で歩けるんだろ。ちよつと待つておいで。今ベッドを作るから」

客間に通され、三人掛けのベージュのソファに横になるように指示される。何と驚いた事に、俺の目の前でソファがてきぱきと折られ、畳まれ、あれよあれよと言ううちに簡易ベッドに早代わりしてしまつたのである。啞然。

「あの、やはり一言タイラ様にご挨拶の方が宜しいでしょうか。

こんな夜分にベルまで鳴らして」

当然この場合は「さん」は適さない。そのくらいは俺だつて知っている。

「ん？ ああ、旦那様は今日も帰れないって連絡があつたよ。カグヤ様には、私からアマネさんを通じて連絡するように伝えておくさ。それからベルの事は安心しておくれ。夜番つてのが使用人に居てね。そこで待機している人間にしかこの時間は届かないようになってるのさ。旦那様のお仕事関係で、たまに深夜お客様がいらす事があつてね。夜のベル対応には慣れているよ」

横たわつた俺に天使の温もりが与えられる。この世のものとは思

えない弾力だ。

おいおい……何だよこれ。疲れている時に横になつたら意識がトんでしまう事請け合いだな。

「そう言えば……何故アマネ様がカグヤ様の一番の側近であられるのですか？ あ、いえ、別に不満があるわけではないのですが、年齢的に考えると――」

治療用具を探しているのだろう、黄みがかつた木材で出来たクラシック調の三段チェストの棚を探しながらおばさんは答える。猫の象嵌細工がとても洒落な一品だ。

「何だい知らないのかい？ あまり大きな声じゃ言えないけど、カグヤ様の一番のご親友であり気をおけるのがアマネさんなんだよ。私のように無駄に歳だけ食っているおばさんは、もうお呼びじゃないのかもねえ」

「アマネ様も今日はいらつしやるわけですか」

「何言っているんだい、当たり前だろう。あの子はいつだってカグヤ様のお傍にいるよ。それは使用人やボディガードとしてだけでなく、大切な人の近くに居たいという想いだろうね」

カグヤとアマネ。どうやら二人は俺が思っている以上に近い者同士だったらしい。アマネにとって、カグヤは主であると同時に親友なのか。二人の結びつきの理由は知らないが、どうやらこの様子だと周知の事実らしい。

「本当にお騒がせして申し訳ありません。まだ皆さん、起きていらつしやるのですか？」

「カグヤ様はまだ起きているんじゃないかねえ。あの方は朝が早いのに夜更かしが好きなんだ。あとは皆が寝静まった後にこっそり葡萄の発酵具合を楽しもうとした夜番くらいさ」

そして彼女は救急箱らしきものを引っ張り出すと俺の方へと振り返る。

「さ、お待たせしたね。まず服を脱いで――」

「ごめんなさい！ ただ眠るだけですから！」

おばさんの口と鼻に無理やり押し当てたのは、ガーゼに塗布したハバロイドとか言う薬品だ。一般的な使用用途としては病院で麻酔と併用して使う事が多い。効果は見ての通り。

十秒も経たないうちに、名も知らない親切なおばさん（本当にごめんなさい）の全身が弛緩し、力が風船のように抜けていく。即座にガーゼから手を離し、倒れようとするおばさんを両手でしっかりと支えなければならなかった。既に意識は無い。良い夢を見ている事を祈る。耳を澄ませても特に他の部屋から物音は聞こえてこない。俺は急いで彼女の体を目に付きにくい部屋の隅まで引っ張っていき横にする。

行動開始だ。

何とかと煙は高い所が好き、と聞いた事がある。となると、おそらくカグヤの寝室は二階だ。……他に理由として、一軒家というのは大抵の場合、個人の部屋は一階でなく二階にある場合が多い。それに外から見たらまだ電気が灯っている部屋があった。あれがカグヤか、この親切おばさんかどちらのものは分からないが。

五感は全開だ。物音無し。気配無し。泥棒の類は慣れている。俺は足音を立てないように廊下に出ると、すぐに見つけた階段をゆっくりと慎重に上っていく。時間はそんなに無い。怪我をした警察官Aの存在が一階に居ない事はすぐに気づかれてしまうだろう。今更ながらに思う。何と呆れた無謀な計画だろう。でも、それでも――俺はシャーロの死の真相が知りたい。

元気で笑顔が似合うあの少年が何故死ななくてはならなかったのか、それを知りたいのだ。

返答次第では――やるかもしれない。
懐の無骨な黒塊に手を添える。

階段を上りきる。二階の廊下には明かりは無かった。だが窓から差し込む光で俺の目は十分だ。幸い強化ガラスと言えど、月と星からの輝きが差し込むのは防げないらしい。

さて、あのお姫様はどこにいる？

目を瞑り、獣の如く勘を働かせる。日頃から磨いている武器は決して鈍る事は無い。生き残るために身に着けたそれは、俺にとって手足の存在と同じくらい確かなものとなっている。

微かに物音が動く気配が一つ。

それはこの通路の一番奥からだ。どの部屋で誰が眠っているのか分からない。息を殺し、抜き足で廊下を横断して行く。心臓の音がやけにうるさい。やがて徐々に徐々に大きく映る目的のドア。近づくにつれ、木目柄に添えるように付いている丸い金色のドアノブがよく見えてくる。神様の寝室へ無作法に忍び込もうとしている今の俺は背後から撃たれても文句は言えない。注意すべくは前方のドアだが視線以外の全ては背後に置く。ノブの下に鍵穴があった。泥棒必須のキーツールを取り出す。様々な形状のいわゆる「偽鍵」が、細い銀の輪に連なつてぶら下がっている。ジャラジャラ言わないよう取り扱いに注意。どれも正規の鍵ではない。だが一本の偽鍵で十く二十パターンの鍵穴に対応できるようになっている。三本目に差し込んだ偽鍵がヒットした。軽く回すと、中のロックが動く手ごたえが感じられる。

手を差し込んだまま俺は目を閉じて一呼吸ついた。

ようやく——来た。

時間が無い。行こう。

心地良い音がしてドアのロックが外れる。室内の気配が動くのが分かった。

気づいたのだ。自室の部屋の鍵が外から外された事に。

ドアノブに手をかける。回す。そして押す。ゆっくりと境界は開かれ、中から眩しい光が差し込んできた。

そして俺は目にした。

ドレスを着たお姫様が安楽椅子にちょこんと腰をかけこちらを見つめているのを。

艶やかな銀色の髪とエメラルドグリーンの瞳。彼女は目を大きくして、開いたドアの奥に幽鬼のように立ち尽くしている侵入者に首

を向けている。フリルの付いた薄ピンクのネグリジェを纏い、手には読みかけの本を持っていた。

呆けそうになる自分に喝を入れる。俺は決意で目を滾らせ、太い声を出そうと腹の底から搾り出す。

「力——」

首根っこを掴まれ、なす術も無く後ろに引つ張られた。息が止まり宙に体が浮く。俺は薄暗い光が差し込む廊下に投げ出され床に尻をつく。

目の前でカグヤの部屋のドアがそつと閉められた。そこに立っていたのは——

「……よう」

「こんにちは、アーティ様」

差し込む光よりも遥かに薄暗く、冷たく、刃のような切れ味を連想させる瞳で俺を見下ろすメイドが仁王像の如く佇んでいた。

「何だよ、アマネも夜番か。ご苦労様」

「こんな時間にカグヤ様のお部屋に御用ですか？ 無作法にも程があるかと思えます」

研ぎ澄ませていたはずの俺のセンサーに、アマネはまるで引つ掛からなかった。驚きを通り越して恐怖が俺の心に忍び込む。

ツキさんよ。目の前のお方はどう鼻屑目に見ても「カグヤに関わってほしい」と思っている素振りには微塵も無いみたいだが。

「別の時間帯だったら会えたのかよ」

「いいえ。よほどの理由で無い限り私が却下しております」

「よほどの理由だ」

「まず私がお伺いします」

アマネの奥のドアノブがゆっくりと回された。小動物のようにカグヤが顔を覗かせる。

「俺の家族を殺した理由を教えろ！」

大声を出さずに、それでも怒気と覇気を込めてマグマを吐き出すというのは思ったより難しかった。心の奥から響いた俺の祈りに似

たその思いは、恫喝のように大気を震わせて廊下を突き抜けた。

「正当なる判決です。証拠は既に出揃っていました。残念です」

ややあつて、事務的にアマネが答える。

「お前には聞いてない。後ろの主様に聞いているんだよ」

「お静かに。他の使用人が目を覚まします」

カグヤの顔に、僅かに揺らぎが見えたと思つたのは俺の都合の良い見間違えだろうか。改めて目を凝らしてもそこに見えるのは能面だけだ。

そしてそれが俺の導火線に火を点した。

「シャー口は、お前に会いたかっただけなんだぞ!!」

地を蹴った俺の前に白のエプロンが翻る。雷のようだ。視覚した時には終わっている。掌底が打ち込まれたのと同時に俺の肋骨は悲鳴をあげた。肺に溜まった息が吐き出され、今度は背中を床に痛いくらいに擦り付けられる。あつさりやられた俺はすぐに起き上がり、眉を寄せてあらん限りの力で前方の二人を睨みつける。精一杯の強がりを口にした。

「手荒な真似をしに来たわけじゃない。俺はただ理由を知りたいんだ」

「私も手荒な真似はしたくありません。ですがそのように怒りに満ちた双眸でカグヤ様に向かうのでしたら容赦はしません」

アマネは余裕にも俺に背を向けて振り返ると、親しげにカグヤに告げた。

「部屋に入って」

長い髪をフルフルと振って否定するカグヤは子供そのものだ。

無防備な背中に迫ろうとする俺の顔面に、刈り取るような回し蹴りが空気の唸りを添えて飛び交った。何か仕掛けてくるのは予測していた。なのに防げなかった。まともに入ったそれは脳を揺さぶり平衡感覚を失わせる。不恰好に錐揉み状に吹っ飛んだ俺は、適当に伸ばした手で何とか地面に倒れるのだけは防ぐ。アマネは積極的に追っては来ない。あくまで不動に佇むだけだ。

「僭越ながら、このような事をなさつてもシャー口様はお喜びにならないでは？」

「マニユアル通りの言葉だな。メイドはそんな言葉もお勉強するのか」

憎まれ口を返すのが精一杯な事に気づき愕然とする。弱い者ほどよく吠える、と自分を皮肉りたい気持ちでいっぱいだ。

アマネの強さは尋常ではない。カグヤほどでないにしろ幼さが残るあの顔立ち。それに反し、一体どれほど武術の下積みを得て今ここに居るのだろうか。

「一時的にとは言え、カグヤ様もご家族に加えて頂いたはずです。

……やはり、そのカグヤ様に危害を加えてでもシャー口様の無念を晴らしたい、と」

「馬鹿言え。一度同じ釜の飯を食ったカグヤだぞ。血の繋がりなんぞよりもっと厚い糸で俺達は結ばれている。だからなおの事許せないんだよ。家族が家族を傷つける。おら、黙ってちゃ分からないだろうがカグヤ。何とか言えよ」

ギリギリだった。カグヤへの気持ちは嘘ではない。だがそれと同時に俺は銃口に全てを任せてしまいたい欲求に襲われる。ランバルドみたいになれたらどんなに楽か。でも俺は知っているのだ。

「楽しそうにしてたじゃねえかよ。無愛想で笑わず、なかなか気を許さなかったけど、それでも俺達と一緒に食卓囲んでいただろうがだから——分からないんだよ、どうしてお前が、シャー口にあんな無慈悲な宣告を下したのか！」

沈黙の少女は俺から目を逸らし床に視線を落とす。叱られた子供のように。だが再び顔を上げたその顔に後悔の色は無い。代わりにただ一言呟いた。

「お前も、死刑にするぞ」

「お前それ言えば何でも通ると思ってるのか。色々な子を俺とツキは見てきた。だから、自慢じゃないが短い間でも一緒にいれば、誰がどんな考え持っているのかある程度分かるんだよ。お前の無表情

は……仮面だ」

その言葉に反応したのはアマネだった。今まで動く事無かったその場から俊足で間合いを詰める。先程の掌底が今度は腹部に打ち込まれた。胃液が逆流して戻しそうになる。くの字に折れた俺の上から鋭利な言葉が降りる。

「カグヤ様への侮辱は許しません。その歯を何本かへし折って差し上げましょうか？」

息が出来ない。だから俺に出来るのは先程言った通り吠えるだけだ。幸いカグヤも居るのでとことん口だけ達者に動かす。

「アマネさんよ、あんたカグヤと相当長いんだってな。あいつの素顔見た事あるか？ 俺は一度だけ見れたぜ……」

追撃が無いのは余裕か。いや、俺の言葉に興味を持ったからだと都合良く解釈して話を進める。

「死ぬ瞬間だ。青竜刀が振り下ろされてな。あいつは死を覚悟して目を閉じた。震えてはいなかった。代わりに……どんな面をあの能面に宿らせたと思う？」

「……」

あの地下道で見せたカグヤの素顔を思い出す。

「聖母のようにな。静かに微笑んで、達観しきった顔だ。もつとも実際はそんな上等なものじゃない。俺にはカグヤのその顔は、死ぬ事を喜んでいるように見えたぜ。……いるんだよ、たまに。死を望む奴。死んで楽になりたい、と思う子供」

またしてもアマネは俺の事はそっこのけで堂々と振り返った。アマネと目が合ったカグヤは気まずそうに視線を逸らす。

「カグヤ様、あなた……」

「ごめん、アマネ」

二人に流れる空気を割って、アマネに攻撃しようとは思わなかった。どうせしても無理だろうが。代わりに無様に呼吸を整えつつ立ち上がる。

しかしあのカグヤが本当に普通に話している。彼女にとってアマ

ネは真に大切な人なのだろう。

「どうしてここまでするのですか。家族のために命を賭けられるのですかアーティ様は」

「親父がよく言ってるな。家族は大切にしろ。……一応俺、お父さん役なんだね。ツキ以外の連中は皆俺の子供だ」

沈着冷静なアマネに逡巡が生じた。偽善臭漂う俺の理由はどう受け止められたらだろうか。でも本当の事だから仕方ない。いかに俺が単純な行動原理に基づいているか思い知っただろう。

「お父上はよほど立派な方だったんですね」

「最高なんじゃないか？」

一息付くと、彼女は自らの膝丈までのスカートに手を入れる。その行動に驚く俺の目の前に現れたのは一振りの短刀、一般的にダガーと呼ばれる代物だ。抜き身のまま眼前に突きつけられる。

「カグヤ様、アーティ様を殺す許可を頂戴」

物騒な事を口走るメイドの背後で、息を飲む音が聞こえた。

「何を言っても引いてもらえないのなら、体の機能を停止させるしかない。所詮賊は賊。殺した所でカグヤ様が責められる謂れはないわ」

本気だ。

彼女は容赦なく俺の命を絶つ気だ。刃物を持ち出してきたという事は、いよいよ俺の存在が邪魔になったか。実力の差は歴然だ。それでも俺はまだ何もやり遂げてない。カグヤの口から何も引き出せてない。

開始のゴングはまだ鳴らない。小さな鈴の音の如き旋律を、彼女はまだ奏でない。まさか迷っているのか？ あれだけ人に対して死刑刑言っておきながら何を躊躇うのか。

「お許しを」

誰に対してか。アマネはカグヤの許可が下りないまま俺へと襲い掛かる。半ば出鱈目に体を動かして初撃の突を逸らす。それでもダガーは容赦なく俺のコスプレ衣装ごと肩を切り裂いた。掠った程度

だ。明らかに肉を持っていかれたが気にしない事にする。反撃しようとする俺よりも早く、対の腕が俺の眼前に飛び込んできた。その狙いに戦慄する。武器は人差し指と中指の二本のみ。狙いは両目と分かった瞬間、俺は愚かにも反射的に目を閉じてやり過ごそうとしてしまった。アマネの超人的なスピードを考えての事でもあったが、それが裏目に出る。否、彼女の思惑通りに俺は術中に嵌っていた。目を開けた時には既にダガーは瞬間移動を済ませた後だ。先程まで肩を喰らっていたそれは、俺の心臓まで数センチの所まで接近していた。咄嗟に身を振るが脇腹を刃が貫いていく。

「っあ！！」

気にしない事にしたかったが、今度の痛覚は誤魔化せなかった。口から悲鳴が漏れかける。

突き抜けたダガーごと彼女の腕を脇で挟み込む。すぐに脱出されるだろうが、その前に俺は一步踏み出すと初めてアマネに攻撃のターンを得た。間近に迫った顔に頭突きを食らわせるべく更に踏み込む！顎に突き抜ける衝撃。ほとんど隙間の無い僅かな空間から、彼女はアップパーカットを俺に打ち放ったのだ。まるで予期していなかったその攻撃は、一切の防御が無かった俺に見事に突き刺さる。彼女を縛っていた脇による鎖も解け、輝く凶器が解き放たれた。顔を揺さぶられ呆けている俺は未だ意識が混濁していた。視界が渦巻いている。

そんな無防備な隙を逃すような相手ではない。

ぼやけた視界の中、銀の刃が綺麗な宝石のように映った。それは一切の慈悲を捨てて無情にも俺の心臓へと吸い込まれて行く――「待った」

早口でしかも小声。開始のゴングが鳴らない試合に審判がストツプをかけた。

意識が回復する。目の前には一切の情を塗り潰し、戦士として敵を仕留めるアマネの漆黒の瞳があった。その手に握られているあの世への切符は、俺の心臓の手前で静止画のように止まっている。

息が吸えない。動けない。俺もアマネも女神様の声に縛られる。もしここで彼女が「殺せ」と言ったら、アマネは躊躇無くこのまま俺の心臓を貫くだろう。彫像のように固まる俺と、死刑執行人のアマネ。動けない理由はお互い違うが、いずれにせよ、この止まった時を動かせるのは一人だけだ。

「入って。少し話をする。……アマネが無礼を働いた事、許して。私の身を案じての事だから」

神様は気まぐれだ。

ダガーが静かに俺の元から離れるとアマネは深く一礼した。銀刃に付着した血糊を取り出したタオルでふき取ると、恥じらいもなくスカートの中に手を入れて太腿（へ）に引つ掛けていると予測する）に仕舞う。未だ呼吸を忘れて立ち尽くす俺をよそに、アマネは歩いて行くと半開きになっているドアを開いた。

「どうぞ、アーティ様。それから、お怪我の程は大丈夫ですか？」

もう少しで死ぬ所でした。

カグヤの姿は既に無い。自室の中へ入って行ってしまった。ドアを潜る寸前にアマネと目が合う。相変わらず春風のような笑顔。歳相応の可愛い笑みだ。

「ご無事で何よりです。本当ですよ？」

流石あのカグヤの親友だ。ぶっ飛びすぎている。

「お前の彼氏になる男は、絶対に浮気できないな」

部屋に足を踏み入れた後、背後でボタンとドアが閉じられる。

さて、俺はこの部屋から生きて出る事ができるのだろうか。

第九話

高級住宅でありながらも自己主張は無い。外観、内装と見てそう判断した俺だが、それはカグヤの部屋にも同じ事が言えた。だがこの部屋に限って言えば、部屋主の趣味が前面に押し出されている事を追記しなくてはならない。ブラウン色のオーク材で出来た、スライドガラス貼りの本棚が所狭しと部屋の隅を埋め尽くしている。その高さは明らかに部屋主の身長をも越えていた。よく見ると脚立が部屋の脇にかけられているのが何とも微笑ましい。いちいち確かめる気にもならないが、ガラスの中は大小様々な背表紙が無差別に並んでいる。窓際には高さ一メートル程の布張りベッド。三つ葉のクローバーを思わせる施工の上に、清潔な白いシャツが主人の到着を待っている。他にはクラシック調の洋服ダンスと俺の身長以上の化粧鏡。ちなみに化粧品類はまるで見当たらない（子供め）。そして天下のカグヤ様が腰を掛けていらっしゃるのは、最初俺が部屋から覗いた時に座っていた安楽椅子だった。小さな円形の白テーブルの上には分厚い本が乗っている。

「アマネ。さっきの物音を聞きつけて誰かが来たら誤魔化しておいて」

「分かったよ、カグヤ様。でも見るからにアーティ様は不法に進入している。きっとすぐに騒がしくなるからね」

「うん」

「……お前、やっぱりまともに口利けるじゃねえか。」

仲良く話す女学生を思わせる二人に、俺は内心溜息をつく。どうしてカグヤはまともに口を利かないのだ。中立云々の話なのだろうけど……何となく勿体無く思う。

「教えてもらうぞ。……どうしてシャーロに冤罪を被せて殺した」

立ち尽くしたまま俺は勝手に話を始めさせてもらう。アマネは俺の背後。カグヤは椅子に座ったままで対話する。

「罪には罰が必要。この街で窃盗など言語道断だから」

「お前が……罪人の罰を全て一人で決めているんだろ。肌で感じたはずだぞ、あの裁判はおかしい！ お前だって、あんな適当な流れで真実が語られたとは思っていないだろ！？」

「シャーロが窃盗に入ったと証言する人間がいる。弁護士は司法取引を望む。ならば罪は、ほぼ確定する」

「じゃあ、シャーロ以外のこれまでの裁判はどうなるんだよ！ 明らかに状況証拠が無罪を指しているのに有罪にした件も沢山あったんだろ！？」

ランバルドから聞いた事を半ば当てずっぽうで言う。俺はその件に関して何も知っているわけではない。だが今ならあの時間いた事が真実であるとほぼ確信していた。そして……発端となったあの暴徒達の襲撃の理由も理解し始めている。

これだけ怒り任せに話せばアマネが俺を止めに入るかと思ったが、意外にも彼女は動かなかった。カグヤは沈黙を保ち俺への返答を避ける。やがて口を開き全く違う事柄を述べた。

「私を助けた事、後悔している？」

即答はできなかった。そう言えばいつか「どうして私を助ける？」と聞かれたのを思い出す。明らかに話を逸らされたが、問いに答えないと俺の質問にも答えてくれそうにない。

「あの時お前を見捨てていたらもつと後悔していたさ。だから……俺もツキも、もう一度同じ事があってもお前を守るだろうな」

「お父さんの言葉か？」

「まあな。それも大きい」

繰り返し質問される「助ける」「助けない」。そして決定的なのは青竜刀が振り下ろされた時のあの顔。俺の中でそれ等が繋がり確信へと変わる。十分な沈黙を挟んで俺は言葉をぶつけた。

「死にたいのか？ カグヤ」

ストレートな物言いに背後のアマネが驚いたのが空気で分かる。それでも彼女は動かない。カグヤからの返答も——無い。整った鼻

と小さな口、真っ直ぐな瞳。……無表情で俺を見つめている。

ぼんやりと回答を得た気がした。でもほんの少しだ。小さな小さな塊だ。だが俺は何かを掴んだ手ごたえがあった。今まで何も見えなかった空間にようやく確かな物が形作られていく。

「カグヤ。何に縛られている？　それがシャークを殺したのか」

このお姫様は助けに来る騎士など待つていなかった。望んでいたのは――

「誰かが裁かないといけない。私は白き天秤の乙女。私にしか罪を裁く事ができないのなら、それは私がやらなくてはならないのよ」
毅然とした独白。後悔の念は無い。だが彼女が一体何を言っているのか分らない。

「この銀の髪は私を永遠にあの場所に縫い止める。変態でもない限り、好き好んで人を殺すものか。でも私はやらなければならない。この髪を持つて生まれたから。この世に生を受けた瞬間から勝手に神に祭り上げられた。今更その任を降りる事などできない」

呆氣にとられる。

カグヤの発言はそれこそ自らを否定し、神に背く言葉そのものだ。誰かに聞かれたら大事になりかねないほどの告白。

同時に俺の心に何かが音を立てて落ちてきた。それは言うならば――納得。

どうして考えもしなかったのだろう。今カグヤが言った事は人として当たり前だ。人を殺して楽しいわけじゃない。でも皆が囁し立てるからそれに応えなくてはならない。ああ、説明通りじゃないか。考えればパズルのように当てはまるピース達。単純馬鹿と蔑まされるかもしれないが、俺の中にあつた怒りの半分が消えるのを感じる。だがそれでも、まだ冤罪の問いには答えてもらっていないのは忘れてない。

「良かった良かった」

零れ落ちた俺の台詞に、カグヤは表情は変えずとも不思議そうな目を向ける。

「いつつつも無表情で無口で、何考えているのか不明。でも……俺もシャー口も、あのなぞなぞの答えを不機嫌そうにも応えるお前を見て推測はしていたんだ。悪い奴じゃないんだろう、て。半分は希望だったけど、どうやらそれは間違えではなかったらしいな。――ただ、どうしてそれを話してくれる気になった？」

「それは――分からない」

あつさりと答えが返ってきた。だが分からないでは俺も分からない。しかしカグヤに誤魔化しているような様子は無く、真っ直ぐな瞳で俺を射抜く。タイラさんも、あれだけカグヤが中立であるように気をつけていたし、カグヤ自身もそれを貫くために無闇に人との関わりを持とうとしなかった。

何と言葉を返せば分からず視線をふらつかせる俺に、先程も視界に入ったカグヤの隣に置かれた分厚い本が目止まる。何故か視線をそこから逸らす事ができず、でもその理由にも思い当たらず心の中で首を傾げた。

「あ」

悩ましげに送る俺の視線の先に気づいたのだろう。カグヤの、ネグリジエを纏った腕が慌てたように本へと手が延びる。そして視線から隠すかのように腕に抱いて本を覆った。だが既にその本のタイトルは俺の目に飛び込んでしまったし、それが引き金となって記憶が爆ぜた。

「賛美なる時計千選」

ほんのり頬を赤らめてこちらを睨むカグヤをよそに、俺は「あー、あー！」と意味を成さない、動物の鳴き声のような声を漏らした。それは間違いなく俺があの日カグヤに送ったプレゼントだ。そう言えばアマネもいつか言っていた気がする。カグヤがそれを愛読している。

カグヤの読書スピードは相当なものだ。分厚いと本は言え、その彼女が未だにそれを読み続けているのは中の時計類がよほどお気に召したから――と推測するほど今の俺はおめでたくない。

あの日カグヤが家に駆け込んで来てから一緒に過ごした時間、ほとんど言葉も交わさない僅かな時間だった。だがその中で彼女が触れた「外」の世界は自分自身に何かしらの優しい棘となって刺さっていたに違いない。思えばあの時、少しだけカグヤの扱い方が分かって俺も得意気になっていた。という事は、俺にしてやられたカグヤの方にも僅かでも心に何かが入り込んでいたのだろう。よく思い返してみれば意味もなくカグヤはこちらをジッと見ている事があった気がする。

全ては推測だ。だがそれでも、目の前の光景を見る限り間違っていないと思ひ込みたい。

中立。それは彼女の通り名に表されているように「白」でもあったのだ。染めた、などと大言するつもりはない。だがあの日々でその白の中に何らかの色が入り込んだ。結局それは、何者にも染まらない白色に塗りつぶされてしまったのだろうが、それでも表面上の無色の中で見えなくなっても脈動し続けている。

「分からない」。その答え通りだ。きっとカグヤは何故俺に重大な秘密とも言える事を暴露したのか自分でも分かっていない。カグヤにはタイラさんもアマネさんもいる。だがそれでも、あの大家族の中で過ごした時間に何らかの感情を覚えたのだ。だから読むのだろう。「賛美なる時計千選」を。内容のためではない。自惚れた物言いになるが、あの本はあの日のあの時間に繋がっているからだ。

「カグ——ッ!？」

瞬間脇腹に走った電流は体内を駆け巡る。今更ながらに思い出す。アマネに受けた傷の数々は確実に俺の体から活力を吸い取り続けていたのだ。

「申し訳ありません。アーティ様。ただ今、手当てをしますの——」

苦痛は声になって表れてしまった。気づいたアマネの声が近づいてくる。

顔だけ振り返って俺は掌を向けた。やんわりと拒否させてもらう。

包帯など巻いてほしくないし、今はそれよりもカグヤと話をしたい。
「駄目よ。……アマネ、やって」

まずい。主の命令は絶対だ。カグヤにやれと言われたらアマネにとつてそれは世界で一番優先すべき事柄と化すのだろう。メイド服のどこから取り出したのか（本当にどこからだ？）包帯と消毒液を持ったアマネが俺の横に立つ。

「服をお脱ぎ下さい」

「結構だ。ありがたいが、大丈夫だ」

「駄目です。お脱ぎ下さい。上半身だけ」

「いや、本当大丈夫だから……」

廊下での戦闘を思い出させる程の手さばきで制服の金ボタンを外される。こうなったからには俺も本気で抵抗するが、アマネの手際の良さの前にはなす術も無い。意固地になって服を抑えようとしたら半分本気程度の手刀を食らってよろめく。警察服の上着が剥ぎ取られ、中にインナーとして着込んでいた汚れた白地のロングシャツが姿を現す。血を吸い取った痕が所々に見られ、色合い的にそれが酷く目立つ。

「バンザイをして下さい、アーティ様」

「やめる。人をレイプして楽しいのかお前」

本当にやめてほしい。だがカグヤの命を受けたアマネは止まらない。腹の部分から一気にシャツを捲り上げられ――

そこで彼女の動きが止まった。同時にカグヤも椅子の上から若干身を引いて、驚きの眼差しで俺のシャツの下に見入る。驚きだけではない。そこには恐怖や嫌悪も付随しているのが表情薄い彼女の顔からも見て取れた。それくらいの衝撃だったのだろうか。

「……申し訳ございません」

シャツから手を離れたアマネが頭を九十度下げる。カグヤが気まぐすそうに目を逸らし、それでも彼女は椅子から立ち上がると俺の前に来て頭を下げた。

「許せ。知らぬ事とは言え、私はアーティを辱めた」

気づいているのだろうか。お姫様はたった今、初めて俺の名前を呼んだのだ。後悔と罪悪感に苛まれた代わりか。ならば俺の最悪な隠し芸も無駄にはならなかったと言える。彼女は再び安楽椅子に戻ったが、その座り心地は悪そうだ。

「いいよ」

一度でも見られたのならもはや隠す意味は無い。俺は自らシャツを脱ぎ、ツキ以外の人間に見せた事のないそれを輝く電灯の下に晒した。

痣。擦り傷。打撲。裂傷に火傷。抉れ、剥かれ、叩かれ、擦られ、暴力という名の愛撫の痕が胸糞悪い芸術として俺の体には刻まれている。胸や背中だけでなく、両腕の限りまでそれは行き渡り、まるで体を蝕む病のようだ。白黒の境界線は手首、そして首だ。悪意は綺麗に日陰のみに行き渡るように造られている。

「……貧困街、にやられたのか？」

遠慮がちにカグヤが尋ねる。漠然とした問い掛け。あの街に住んでいるうちに出来た傷か、という事だろう。だがこれ等の傷の大半は「俺が貧困街に住む前」のものだ。

「いや、親父だよ」

もういいだろう。俺は部分部分血糊が固まったシャツに袖を通す。こんな見ても楽しくないものはさっさと隠すに限る。血だろうが何だろうが、人の視界にボカシを入られるのなら構わない。

「何を言っている……？ あれだけ、親父、親父、と……」

訝しげに形良い銀の眉を潜めるカグヤはもはや無表情とは程遠い。中立にまた新たな色が垂らされる。

「俺、実はお坊ちゃんだね。昔は良い所に住んでいたんだぜ？ 親父がご覧の通りの趣味だったけどな」

そんな俺が何故貧困街で暮らしているのか。今は関係無いし面倒なので説明はいらないだろう。想像してくれ。ああ、一つだけ言っておくと今親父が居るのは土の中だ。

「ちなみにツキにはこんなの無いから安心しろ。あいつとは貧困街

で出会った。死にそんな面してたから俺が拾った。最初は、懐かない猫みたいに散々暴れたけどな。それで落ち着いたと思ったら、今度はあいつがひよいひよい子供を家に連れてきやがる」

拾った、などと言ったらツキに蹴飛ばされるに違いない。でも当初は…… 比喻でなくそのままの

意味だ。倒れていたから担ぎ上げて家へ連れたのを思い出す。

「もう一度聞くぞ。何故私を助けた」

「家族は死んでも守れ。親父の言葉でね。——俺が、こう在りたいと願う、理想の親父像さ。実の親父は屑同然だった。だから俺は親父つてものを知らない。きつと大黒柱ならこんな事を言う。一家の主たる父親ならこのように行動する。俺はその目標に向けて走るだけだ。俺が『父親』にならないと、子供達はあの街で生きていけない」

制服のボタンをきつちり三つとも締めて俺は事も無げに言う。

「ここまで話したんだ。今度はそっちの番だぜ」

別に頼まれてもないのにベラベラ喋ったのは俺だが。借りを作った風に装って俺は反撃する。この古傷が彼女等に罪悪感を植え付ける事に成功したのなら、偶然とは言え良い方向に転んだものだ。カグヤは目線を伏せ、自分に語りかけるかのように言った。

「強いよね。自分の道を自分で切り開ける」

「生きている人間は皆そうだ。もっとも、それでも不条理に死んでしまふ人間もいるがな」

カグヤに対する怒りはほとんど静まりつつあった。彼女の言葉が自分自身の内面を教えてくれたからだ。それは決して汚く歪んでいないものではなかった、と現時点では思っている。

それでも——

俺は警察服の懷に仕舞っていた銃を取り出すと、深緑なる宝石を思わせる双眸に黒穴を向ける。

「アーティ——」

「シャー口は二度と戻ってこない。この責任、どう取ってくれるん

だ？ カグヤ」

「待った、アマネ」

得物を叩き落とそうとしたアマネを止めたのは他ならぬカグヤだった。動きが見えていたのではなく、メイドが俺を攻撃しようとするのを予測したのだろう。そしてそれは当たっていた。アマネは振り上げた足を下ろす。だが視線は俺の拳銃へ置かれたままだ。俺の指が引き金を引くのとアマネが俺に一撃を打ち込むのは、どちらが早いのだろうか。

いつかのような感情任せではない。それが伝わったからだろう、四つの目が真剣に俺の行動を吟味し目測している。

「カグヤ様をお許しになられたのかと思っていましたが？ 話をすすめるうちにアーティ様の殺意が少しずつ薄れていくのを感じていました」

久しぶりに口を開いたアマネが横から疑問を投げかける。その声に嫌味は無い。

「それはそれ、これはこれだ。シャーロへ仕出かした責任をどう取るのか是非教えてもらいたい」

即ち、いい加減真相を教えろ、という事だ。

「カグヤ様に罪を押し付けるのはやめて下さい。罰の宣告は誰かがやらなくてはならないものです。それにあの内容はカグヤ様がご自身で出したものでは——！」

「やめてアマネ」

身を弁えずでしゃばったメイドに珍しく咎めるような口調。おそらく今の一言は、メイドというより親友としての言葉だったのだろう。

「おい今の爆弾発言は何だ？ 鞭打ちと斬手の刑はお前が胸張って宣告してたよな。両方の言い分を聞いて、五分休憩の合間に結論付けて、それでお前が出した答えなんだろう！？」

「そうよ」

「他の、今までの適当な判決が出た裁判も全部お前が決めて、判決

を出したんだよな！」

「その通り」

カグヤの瞳は揺るがない。先程までの人間らしさはどこに、彼女は再び鋼の鱗で自分を覆い始めている気がする。アマネはカグヤの親友として大きなヒントを出してくれた。今ようやくアマネが遠回しに俺をここまで連れてきたのが分かった気がした。何故俺にカグヤに関わりを持ってほしかったのか。アマネはカグヤの境遇に満足していない。何かを我慢している。そしてそれは決して良いものではない。

その時下の階から、騒がしい複数の人声が大気を震わせてここまですぐ飛び込んできた。

タイムリミットだ。

「誰だ。お前じゃないなら、一体誰がシャーロックに死刑を下した！！」
「私だ。白き天秤の乙女以外の誰が人を裁ける」

再び能面を被ってしまった少女。

いつかのランバルドの言葉が蘇る。白き天秤の乙女は金でも貰っているのではないか、との噂。だがここまで話した中で俺はそれは在り得ないと勝手に断言する。証拠？ そんなのは無い。だが今は自分の直感に従って行動しなければならない時だ。

自分がやった、などの発言は古来より本の中に登場するお決まりの台詞だ。そして使われる意図は大抵決まっている。

誰かを庇っている？

だがカグヤが庇いたいと思う相手なんてアマネくらいなものだろう。仮にそれが真実だとしたら、アマネの事だ、先程の爆弾発言を投げるよりも早く、自分が悪いんですと言った趣旨の核爆弾発言をこの場に落としているに違いない。

「まさか」

一人居た。

だが即座にその考えを捨てる。だってあの人は今朝も来てくれたではないか。忙しい中わざわざ俺達のために。それも自分の力を行

使してまでシャーロの大切な物を持つてきてくれたのだ。

ありえないだろ。――でも、ありえない根拠は？ いやいや、ありえる根拠は？

足音が無遠慮に階段を上がってくる。直接見るまでも無い。賊を即座に射殺すべく彼等は真っ直ぐにこの部屋を目指す様子が喧しい音から伝わってくる。

「アーティ様！」

最初に動いたのは意外にもアマネだった。

無数に並ぶ本棚の一つに駆け寄ると、その手を本棚と壁の間に存在する指一本からうじて入れる程度の隙間に差し入れた。軽快な音何らかのスイッチを弾いたような音がそこから鳴る。有無を言わさぬ力で俺の腕を取ると、彼女は足早にそのまま何も無い無地の白壁の前に案内した。直前まで銃を握っていた俺は勢いに流されるままカグヤからその矛先を下ろす事になる。アマネが壁に掌を置き押すように力を込めると、縦は二メートル、横は一メートル程の幅だけ切り取られたように周りの壁から独立し、軋みをあげて奥へと吸い込まれるかのように回る。先には天上から煌々と照らされた明かりに連なつて、下る階段がどこまでも続いているのが見えた。緊急用避難路だ。

「急いで下さい」

何故俺を助けようとするのか。それを聞きたくて口を開きかけた。カグヤに銃口を突きつけただけで俺は死罪に値する。だがもしかしたらアマネにも上手く答えられないのかもしれない。彼女にも立場があり、そしてカグヤの親友と言う深い絆もある。その狭間で揺れるのは俺が思っている以上にもどかしくて辛いに違いない。

「アーティ」

顔を白で塗りつぶしたはずの少女が俺を引き止めるとは意外だった。カグヤは俺の胸元までしかないような背丈で、それでも凜としている。だがそれに反し次に出た言葉は謝罪だった。

「シャーロの事は、すまなかつた」

幾人に死の宣告を与えてきたのか分からない。だがカグヤはそれを省みた。複雑な心境なのはアマネだけではなかったみたいだ。

そのようなカグヤになら俺もあの言葉を伝えておこうと思う。

「名探偵の遺言——というか気持ち——だ。シャー口はお前を恨んではいなかった。逆に氣遣っていた。その小さい胸に、折り畳んでよく仕舞っておけ」

カグヤがそれを受けてどんな顔をしたのかは分からない。変化は無かったかもしれない。それを確認している余裕はもはや無かった。これ以上はもう留まらない。俺は振り返る事なく、目の前に続く階段を一目散に駆け下りて行く。あの二人が苦悩し、葛藤している事は理解できた。無慈悲で残酷な人間でなかった、と分かっただけでも来た甲斐はあったかもしれない。

カグヤとアマネは、踏み込んできた警察官達に何と云うのだろう。俺を逃がしてくれたという事は、アマネはシラを切り通してくれるかもしれない。だが主であるカグヤは？ 彼女は果たして賊の侵入を何と説明するのだろうか。

そして舌打ちをする。一つ、カグヤに聞き損ねていた事があったではないか。

カグヤお前、デスメタルとラップ、どっちが好きなんだ？

第十話

6

夜はまだ続く。墨を垂らしたようなあの空が白むまでまだ二時間程はあるだろうか。

緊急用の避難路は、カグヤの家からおよそ一キロほど離れた廃家へと繋がっていた。結局俺の背後から追っ手が来る事は無かった。だが外に出ると夜の風に熱気が含まれているのを肌で感じる。あちこちからサイレンが鳴りパトカーが唸りを上げて一箇所に急行している。祭りの炎はカグヤの家を中心として徐々にその火種を広げていくのだろう。俺は十分に辺りに気を配りつつ、来る途中に捨ててきた麻布の所まで戻り、カーゴパンツを回収して着替えると代わりに制服を詰める。証拠隠滅のためにも、貧困街に着いたらこの血染めの制服はどこかに捨ててしまおう。

こんな深夜に一人でフラフラして職務質問でもされたら適わない。俺は喧騒から逃げるように路地を通って貧困街へと戻った。

依然としてお天道様は眠り続けている。我が家の頑丈なる玄関へ辿り着いてもそれは変わらない。鍵を差し込むまでもなく、重々しい（実際重いのだが）音と共に内側から扉はスライドして開かれた。ツキだ。俺の足音を機敏にも察知して目を覚ましたのだろう。都合のいい想像をするなら今日は眠らずに俺を待っていてくれたのかもしれない。

「アーティ！」

潤んだその瞳は温かさで満たされている。改めて俺はここが我が家である事を実感した。今日も綺麗なお母さんの頭を撫でながら口端を持ち上げて笑顔を作った。

「ただいまツキ」

「うん……うん」

お天道様は眠っても俺の太陽は眠らずに笑顔で明るく心を照らしてくれた。……若干雨も混じっていたが。何はともあれ無事に生還を果たした俺は、ツキに自分の負った傷を素直に見せる事にする。巨大なオフセット印刷機に囲まれた居間で今夜の出来事を話しながら治療を受けた。ここまで無事に歩いてこれたし、さほど傷は深いものではない。脇腹の裂傷に包帯を巻いたツキは、手当てを終えろと俺の傷に拳を放った。

「いつツツ!!？」

「こんな無茶して、もしアーティが死んだら私達はどうすればいい！少しは考えてほしいぞ！」

やはりご立腹のようだった。安心したら怒りが湧いてきたのだろう。反論できない俺は話題をすり返る。

「悪かった！でもその甲斐あって、絡み合っていた系が大部分ほどけてきたんだ。理由は分からないが、カグヤはおそらく傀儡人形をやらされている。——あいつは生まれ付いての天才児で知識も異常な速さで身に付けていったのは知っている。おまけにあの髪だ。周リから神様の子と驚嘆されたのも分かる。でも考えてみれば分かる事だったんだ。カグヤは……まだ子供だぞ」

思い出す。からかうと顔がすぐ赤くなっし、俺はカグヤの扱いのコツをすぐに掴めた。シャー口と俺が謎解きで騒いでいた時、カグヤはさも答えを言いたそうに俺達を見ていた。

——あの無の仮面にすっかり騙されていたが、よくよく考えればカグヤの素顔の欠片は至る所に転がっていたのだ。

「どれだけ知識があっても、子供が大人を裁く事なんて出来るものか！新聞を読んでニュースを見て、沢山の年月を歩んだ人生経験豊富な人間だからこそ、かろうじて罰の内容を決められるんだ。カグヤは判決を出していない。出したのは別の誰か。あいつが庇っている誰かだ！」

「その誰かがまだ特定できないのでしょ？」

——推測でこれ以上ツキに話をしてもいいものか。あの部屋で俺

はたった一人、その誰かを思い浮かべる事ができたつもりでいたが、それも証拠があるわけでない。カグヤの交友範囲など俺の知る由も無いし、もしかしたら俺の全く知らない誰かの可能性だって十分あるのだ。

「タイラさん、かもしれない」

それでも俺は口にしてしまった。今一番可能性の高い人物の名を。予想通りツキは虚を付かれた顔で押し黙る。そして次にその信憑性を確かめるかのように視線を向けてきた。

「タイラさんはカグヤの父親だ。それだけでも理由に値すると思う」
「別に証拠があるわけじゃないのね？」

ツキの懸念ももつともだ。闇雲に人を咎めるなど言語道断。理由として弱いのは自分でも分かっている。失礼この上ないが、そもそもカグヤは父親を慕っているのかも疑問だ。この家に来た時も親子らしい会話など一度も見れずに終わっているのだ。それでも他に可能性は思い当たらなかった。弱い線だ。無理やり取ってつけた線。タイラさんの誠実な顔が浮かんだ。

「俺は最低の事を言っているかもしれない。クソッ、疲れているのかもな。誰かを犯人に仕立てあげて満足したいだけなのか俺は？」

「今日は休んだ方がいい。私もアーティも精神的ダメージが大きいもの。今考えて下手に結論を出すより、明日考えた結論の方が私は信じられるぞ」

「正直あまり時間かけたくないんだよ。無事逃げてこれたけど、いつこの家に警察が踏み込んでくるか分からないからな。早く元凶見つけて、そいつを縛り上げて、本当の事を吐かせたい。でないといつまで経ってもシャーロが浮かばれないぜ」

「駄目だぞ、もう寝るアーティ。傷だつて回復させないと」
やけに疲れた声。

——そこまできてようやく、愚かな俺はツキの方がずっと辛い思いをしている事に気がついた。俺は肝心な時に眠っていて、ついさっきまでカグヤの家に忍び込んでいて——。一方の彼女はシャーロ

に刑が下されている時も一人で、今夜だつてきつと俺の事が心配でロクに眠れていない。待たされている方が堪える事くらい俺だつて分かつている。気づくのが遅すぎる。俺が休まないとツキが休めないのだ。もしかしたら俺は鈍感なのかもしれない。加え、気が利かないと言うか……

「やつぱりもう寝よう。……あぁ、その前に何か飲み物くれ」

最後の一言は別にいらなかった。急に心変わりした事を恥じた俺は、照れ隠しにどうでもいい事を付け加えてしまったのだ。ツキは吹き出すかのように笑った。やはり見抜かれているのか。

彼女が俺のために奥へと消えて行った途端、やる事の無くなった俺に疲労が襲い始めた。仕事を終えた体は明らかに休息を欲していたのだ。だがツキが戻ってくるまで眠るわけにもいかず、俺は改めてこの無駄に広い空間に視線を這わせる。すると奥のテーブルに見慣れたガラクタが乗っているのが目に入った。近づいて行きそれを手に取る。

シャーロが常に携帯していた道具だった。今朝、わざわざタイラさんが届けてくれたものだ。それを思うと急に先程タイラさんを疑っていた自分が恥ずかしくなってきた。ツキが戻ってくるまで暇潰しで適当にいじってみる事にする。

「こんな伸びるステッキなんて、探偵はどこで使ったんだ」

遺留品は全て価値も実用性も無いものばかりだ。そこそこ値の入った物だつたら間違いなくここには戻ってこなかっただろう。悪徳職員はどこにでもいるものだ。

見覚えのある黄のリングメモ帳。確かカグヤに渡していたはずだが……どうやらあれはストックのうちの一つだったらしい。だがそれを何気なく開いて俺は何らかの違和感を覚えた。

「……何だこりゃ？」

それはただのらくがき帳と化していた。メートル四方のページに、最初は星の絵が紙全体を覆うように書かれている。捲る。次のページには目覚まし時計の絵。その次のページは車の絵……

意味が分からない。パラパラと捲ると、そのような感じでひたすらシャー口が描いたと思われるらくがきが続いていた。いや、意味など元から無いのだろう。単に暇潰しで描いたに違いない絵の数々だが違和感の正体がどうにも分からない。最初ページを見て脳裏に何かが引つ掛かったのだ。何だ？ このメモ帳の何がおかしい？ 疲労蝕む俺の脳味噌が何かを訴えている。思い出せ。思い出せ。何を見て「おかしい」と感じた？

「お待たせ、アーティ」

「あー！」

ツキが姿を現したのと、それが記憶となつて弾けたのは同時だ。

「そうだ。最初のページにあれが無いんだ！」

「何、どうしたの？」

「このメモ帳。シャー口が暗号文を作った、とかで最後にカグヤに贈った物だ。あの時ちらつと中を見た。その時、確か最初のページに暗号を解読するための一覧表みたいなのが付いていたはずなんだ」

この記号が「あ」、この記号が「い」……。

得意気に喋っていた生意気な顔が蘇ってくる。そう、あれは表紙を捲った一ページ目に描かれていた。途端に俺はこのメモ帳の重要性を理解し、疲労がどこかへ吹っ飛ぶのを感じた。

「あ。私も覚えてる。でもそれが……どうかしたの？」

鋭いはずのツキが、今一つ飲み込めていないようだ。やはり俺以上には疲れているな。

「最初このメモ帳には付いていたはずだ。だがあいつは意図的にそれを捨てたに違いない。それ以外にここに存在しない理由が無い」そしてこのメモ帳に残ったのは、誰が見ても意味不明な下手糞な絵の羅列。最初の一覧表があればこの絵が何を意味するのか理解できる。でも無ければ誰も注意を払わない。こんな物をわざわざ拾って持って帰ろうとする者もいない。

だがそれがシャー口の狙いだっただ。暗号とは人から暗号と思われてはいけない。

「確かシャーロに刑が執行される数時間前に、これは手元に戻されただよな」

「タイラさんはそう言っていたぞ」

「裁判所でシャーロは言っていた。自分はただカグヤを追いかけていただけだ。でも閉廷後で、きつと何かを思い出したんだ！ 裁判所で俺に残した何かを。そしてあいつは……最後の最後で俺にそれを伝えようとこれを記した。これはシャーロの真の遺言だ！」
そこまで告げるとツキの顔からも疲れが消えていくのが見て取れた。目が開かれる。俺達が今手にしている物はもはや子供の落書きではない。

「留置所内で泣き喚くシャーロを気の毒に思い、職員が持ち物だけ返してあげた。考えれば、その話すらも出来すぎている。もしかしたらシャーロは最後にメモ帳とペンを手にしたくて留置所で一芝居うったのかも。あいつは鋭い。自分の……未来だって分かっていたのかもしれない」

とんだ名探偵が居たものだ。アーベストさんが聞いたなら何と云うだろう。既に弟子は一人前になりその活躍で事件を掘り進めていたのだ。ともあれ、絵の一覧表が無いと何も分からない。

「確かシャーロから同じ物を、アーティも貰っていたはずだぞ。どこに仕舞った!？」

「分かっている。いや、実は……俺も先から思い出そうとしているんだ。でも捨ててはいない、絶対」

「馬鹿者！」

叩かれた頭を総動員して記憶を辿る。暗号解読の一覧表が付いた黄のリングメモ帳。いらない、と言い張る俺は結局シャーロに強引に押し切られ手渡されたのだ。そしてどこかに仕舞った。どこだ？

ああ、そうだ!!

「俺の服置き場だ！ ちょっと待っててくれ、取ってくる！」

「何でそんな所に……」

「引越しの際に適当に袋に詰めて、それっきり解くのを忘れてた。

すまん」

呆れたように溜息を吐くツキを背に、俺は慌てて（でも眠っている子供達を起こさないように）階段を上がり、手帳を探し当てて、また慌てて階段を駆け下りる。その間僅か三分。何気なく窓から外を見上げると、既に空の彼方から少しずつ脱色が始まっていた。

「ん？」

外の闇が動いた……気がした。我が家の庭には腐った木のパレット、B1サイズの茶包装紙、ダンボール、印刷インキの缶箱などなど、要は印刷関係のゴミが縦横無尽に放置されている。だがそのゴミ山の中で影が踊ったように見えたのだ。

心の中で遅すぎた警報が鳴り響く。

俺は浮かれていた。シャローの暗号文を解く事に興奮して警戒を怠っていたのだ。大きく舌打ち。俺もツキも、やはり精神的に少し参っていたのかもしれない。ここまで敵に侵入され気づかないとは培った五感が完全に機能していなかったのだ。居間へと走る途中に人数を数えて愕然とする。

「大変だぞ、アーティ！」

事態を察したツキが切羽詰った声をあげる。光に群がる羽虫のように、それは不愉快な音を立てて我が家の外を包围し始めた。

「この足音は数時間前まで嫌という程聞いた。警察だな。——すまない、ツキ。嗅ぎ付けられた！」

「私は子供達を起こして避難させて来——」

言葉が止まった。訝しげに見ると、ツキの顔に絶望が浮かんでいる。同時に戸惑いも。視線はあらぬ方向を見つめ、うわ言のように彼女は口にした。

「そんな……どうして？ どうしてそこから入ってきているの!？」

「どうした、何の事だツキ！」

肩を掴んで乱暴に揺さぶる。彼女は泣きそうな顔でようやく俺に視線を合わせた。

「『非常口』の存在が警察にバレているぞ！ どうして!？ あそ

こは私達しか知らないはずなのに」

「ッ!？」

言われた事を確認するように即座に意識を飛ばす。未使用の地下道。出口に梯子が掛かっており、最終的には底をくり貫いたドラム缶の中に通じていたはずだ。そこは腐臭漂うスクラップ場。もはや目ぼしい物は全て持っていかれた無人の地。ここから数百メートルの場所だ。さすがに「出口」までは遠すぎて俺も意識が届かない。だが言われると、その地下道を通ってこちらへ向かう気配を四つ察知する。

どうしてだ？ 何故!？

この家の存在は当の俺達以外誰も知るはずがないのだ！俺とツキと子供達。入り口だけは一応子供達にも教えてあるが実際にはまだ一度も入れていない。そして出口のドラム缶は俺とツキだけしか知らない。他に知っている人間なんて――

「嘘だ……」

「アーティ、まさか……違うよね？あの人がそんな事をするはずないよね？」

同じ結論。そもそも俺達は誰の紹介でこの家を手に入れた？自分に言い聞かせるために、ツキに言い聞かせるために、一度大きくその名を叫ぶ。

「アーベストさんがそんな事をするはずがない!」

次の一手を考える気力が一瞬にして蒸発する。一体何が起こっている？せつかくこの事件の力ラクリが見えてきたと思ったのに、どうしてまた後手に回ってしまうのだ。

「ツキ、ペンを取ってくれ!」

弾かれたようにビクンと身を震わせたツキは、シャーロの三色ボールペンを手に取る。

とにかく今出来ること、今確かなものはシャーロの残した言葉だけだ！俺はたった今取ってきた手帳の表紙を開いて暗号解読のための一覧表を出す。そして次にシャーロの遺した手帳を開き、出て

くる絵の下に、ルビのように言葉を一文字ずつ振っていった。

ふ、た、り、で、は、な、し、て、い、る、へ、や、で、わ、ら、
っ、て、い、る。

「二人で話している。部屋で笑っている。――何の事だシャーロ」
暗号絵はまだ半分近く残っている。俺は急いで解読を進める事にした。

既に羽音は窓という窓に群がっている。わざわざ鉄製の正面玄関から入る必要は無いという事か。いつかのランバルド達の突入より遙かに統制がとれているし人数も多い。今度は喧嘩にさえならない。一方的な制圧だ。

た、く、さ、ん、の、お、か、ね、を、う、け、と、っ、て、お、
わ、っ、た。

「沢山のお金を受け取って終わった」

いくら大人と言えど、現金を直に受け渡すなんて事は滅多に無い事くらい俺だって分かる。子供のシャーロでさえこの場面を見て違和感を感じたに違いない。「沢山のお金」がどの程度の規模かは分からないが、それなら尚更だ。金額が大きければ大きいほどキナ臭くなる。

残る暗号絵は十数ページ分。

元々上手ではない絵だが、輪をかけて汚くなってきている。もしかして、これを描き始めた時は既に刑まで時間が残り少なかったのだろうか。ならばこのような箇条書きのような書き方にも納得だ。

最後の方は特に慌てていたのが絵から分かる。マイクの絵が棒付き飴に見えた。

外の連中から窓ガラス越しに我が家を覗きこまれた。俺とツキの姿を見て取ると、外がより一層騒がしくなったのが嫌でも耳に響く。構わずペンを走らせる。

そして遂に、最後の文が明らかになった。

た、い、ら、さ、ん、た、の、し、そ、う、だ、っ、た。

「タイラさん楽しそうだった」

一斉に窓ガラスが砕けた。強烈な破砕音は呟いた最後の俺の台詞を消し去る。踏み砕いたガラスと共に茶色の制服の連中がバラバラと落ちてくる。法の番人達は我が家に不法侵入すると、お揃いの墨色の口徑を俺とツキに向けた。誰かがお決まりの言葉を叫んだ。

「動くな！ 手を上げろ！！」

もはや動く必要は無かった。解説は全て終えたのだ。黒幕はやはりタイラさんだったのだ。考えたくは無いが、アーベストさんも繋がっているのだろうか。

言われた通りに俺達は身じろぎ一つせず立ち尽くす。警官の一人が玄関へ走って行き錠を外した。スライド式の鉄扉を両手で押して開いて行く。その奥から登場した人物に俺は殺意の籠った眼差しを向けた。何人かの警官に付き添われてその中央を歩く男こそ、今俺が一番殴りたい人間だった。

「タイラ」

「おや、さんづけは無くなってしまったのですか。アーティさん」
ホワイト基調のスリーピーススーツで登場したのはタイラ本人だ。周りの警官達が拳銃を突きつける中、悠然と歩いてこちらへ近づいてくるその姿はまさに黒幕そのもの。実際この連中の親役なのだろう。

「カグヤを殺そうと、我が家へ忍び込んだらしいですね」

「指一本触れてねえ」

「言ったではありませんか。あの子は中立でなくてはならないのです。いつか助けて頂いた事には大変感謝しておりますが、闇雲に近づかないで下さい」

シャーロはこの男が金を貰っているのを見た。そして——きっと見つかってしまったのだろう。

ジグゾーパズルの絵が完成に近づいてきた。

「ようやく分かった。カグヤが裁判所に入って行くのを見たシャーロは追いかけようとした。だが当然、見るからに貧困街の小汚い子供など入り口で止められる」

「何の話ですか？　アーティさん」

構わず俺は続ける。丁度いい、この場でぶちまけてどう反応するか見てやるうじゃないか。

「シャーロはきつとそれでも諦めきれない。だからあいつは……裁判所に忍び込めそうな入り口を見つけようとしたはずだ。裏口か窓か。そこは人が居ないので誰にも見つかる心配の無い場所。そしてあいつは見てしまったんだな、あんたを」

朗らかな顔から表情が消えた。それはカグヤのような無ではない。浮かんできた感情を無理やり底に静めたような、不気味な出来損ないの能面。

「賄賂を受け取る白き天秤の乙女の父親。妙な判決が多い、てのはあんたが絡んでいたわけだ。金を貰って刑を重く、時には軽くする。あんたがシャーロに気づいたのか、別の誰かが気づいたのか分からないが、あいつは捕まった。そしてシャーロの口から外に情報が漏れる事のないよう急速に裁判を進めて、処刑まで持つて行ったわけだ」

周りの警官達が息を飲むのが伝わってくる。明らかに露骨に視線をタイラに向ける者も居た。それでも銃口は俺達から向けて放さない。縦社会バンザイだ。

だがそんな中、タイラは顔に似つかわしくない笑いで喉を鳴らすと、さも愉快そうに俺を真っ向から見つめた。驚愕や戸惑いの表情を期待していた俺は、身を引き締める。そして心の中で舌打ちをした。

こいつは悪だ。それもこの手の場面に慣れている。

「何ですその話は？　どこからそんなお話が出たのか是非教えて下さいアーティさん。虚言も罪に値しますからね」

この男がシャーロの遺品を持ってきたのも、あれは言わば俺達から情報を引き出すための土産だったのだろう。シャーロから自分の事を何か聞いていないか、それを確かめに来ていたのだ。当然、この手帳やら他の道具やらも調べ尽くしたに違いない。

「ああ、なるほど。それでしたか……」

俺達は何を言うまでもなく、タイラは床に転がった（手を上げろ、と言われた時に落ちた）黄のリングメモ帳に冷たい目を落とす。勘は働くらしい。どこから俺が真相を知ったのか理解したのだろう。そしてそれ以上はもはや口にしなかった。

「カグヤに対する殺害未遂で追ってきましたが、加えて妄言で私を侮辱した罪も付け加えておきます。本来ならこの場で射殺されて当然の罪状ですが、やはりカグヤ自身に後顧の憂いを絶ってもらいましょう。最近あの子は少し様子がおかしい。私が買ってきた本そっちのけで、いつも同じ本ばかり読んでいる。薄汚い、まるでどこかのゴミ捨て場から拾ってきたかのような本をね」

睨めるような視線。タイラも気づいていたのだろう、カグヤの僅かな変化に。そしてその原因が何であるかも分かっているみたいだ。「中立なる白に他の色が交われれば、もはやそれは中立でなくなります。神の子を汚す要因を自らで切り、あの子にはより羽ばたいてもらわないと」

「建前はな。本音は違うだろ？ カグヤに接する事で、あんたは自分の裏の情報が誰かに漏れてしまわないかを心配していたんだ。だから必要以上に他人をあの子に近づけなかった。同時にそうする事で永遠に手綱を握っていたかったわけだ。素晴らしい父親だな、クソツタレ」

カグヤは頑なにタイラの名を出すのを拒んだ。それはつまり、父親が法を破っている事を知っていたからに違いない。タイラが判決を下し、カグヤがさもそれを自分の考えのように読み上げる。唯一分からないのは、何故カグヤはこのような下劣な父親を庇うのか。彼女の体に俺のような痣が無いと信じたい。

「もうお話は終わりにしましょう。これから死刑——失礼、裁判の準備をしなくてはなりません。速やかにご同行お願いしますよ」

片手を挙げると、それを合図に何人かが飛び出して俺達を無理やり床とキスさせた。太い腕で万力のように全身を締め付けられ、背

中に両腕を回され手錠をはめられる。顔を上げると、よく磨かれたなめし革の茶色い革靴が見えた。腿が上がり、それが勢いをつけて振り下ろされる。

「がッ！！？」

後頭部への衝撃。床へ更に熱烈なキス。ついでに鼻もおしつけて、ツキにもした事の無い愛の限りを強制させられる。

「借りがありましたからね。返させてもらいました」

「……根に持つ野郎だな。あんなボディ、事故たる事故」

痛み以上に屈辱の方が大きい。俺にできるのは、痛くないフリをして軽口を叩く事だけだ。

「本当に貴方達には感謝していただきますよ？ そちらが何もしなければ、私の方も干渉するつもりはなかったのに」

「そりゃ困るな。まだ謝礼を頂いてない」

ああ、と驚き顔のタイラ。ぞんざいな呟きでない所を見ると、どうやら払うつもりはあったらしい。だが俺の問いに答える事なく、身を翻して背を向けると玄関へと歩き始めた。

「連れて行って下さい。それから皆さん、まさかとは思いますが神の子殺害を企てた連中の言葉を真に受けるような事はありませんね。先程私に視線を向けた方、顔は覚えましたので」

警官達は弾かれたようにタイラから顔を逸らす。代わりに俺達へ憤怒の表情を向け、お仕事をいかに必死に行っているかをアピールした。

「待てよ。この住所はともかく『非常口』は誰から教えてもらった！ あの入り口が存在なんて調べようがないはずだぞ！」

白スーツの歩みは止まらない。僅かに沈黙した後に、こちらを振り返る事もせず周りの制服達に再度一声かけた。

「変更します。男の方は黙らせた後に連れて行って下さい」

必死さのアピール第二段は靴底、それから警棒で表された。もはや四肢を動かす事さえ不可能な俺に容赦なく暴力が振り下ろされる。それはただのリンチ。我先にと俺の頭を、背中を、腕を、脛を警官

達は親の仇でも取るかのように徹底的に踏み碎き、蹴り上げ、強打する。警棒が左手中指に当たり骨が碎ける感触がした。苦悶の表情を作ったら今度は鼻っ柱に靴の爪先が飛んでき血が吹き出る。脛に激しい痛み。海老のように体が反り返る。身を擦ったら脇腹に複数の足が突き刺さった。

俺は芋虫のように踊らされた。跳ねて、もがいて、転がって――蹂躪の限りを尽くされる。全身の痛覚が悲鳴をあげ、それは俺の喉元まであがり口から零れ落ちた。皮膚が潰される度に頭に電撃が走る。流れ出た鮮血で顔が化粧されていく。痛みには慣れている。過去の記憶が呼び覚まされる。苦痛は物心付く前から俺と友達だった。どこかでツキの悲痛な叫びが聞こえた気がした。だが既に俺には耳に入らない。昔学んだ苦痛を柔らげる方法が本能的に作動していた。心を無くし人形となる。他人事のようにこの暴行を受け止めていればいい。そのうち相手は疲れて俺と言う名のサンドバッグに飽きる。無だ。無になれ。何も考えなければいい。

やがて意識が朦朧とし、切れかけの電球のように点いたり消えたりを繰り返す。

この感覚もよく知っている。世界が消える前触れ。ああ、そう言えばこの間アマネに手刀をもらって味わったばかりだ。でも違いは大きい。彼女は慈愛に満ちた女神。今回は嘲笑する悪魔達。

既に体の感覚は無かった。攻撃が止んでいるのか続いているのかも分からない。

シャー口、すまない。せつかくお前を陥れた奴を突き止めたのに。瞼が落ちる。視界の裏で泣き出しそんなシャー口の顔が見えた。

声をかけようとして――
意識はそこで途切れた。

第十一話

7

体が揺さぶられる。何度か繰り返される。誰かの声が飛び交っているが、何を言っているのかまでは分からない。五感が働かない。人と言う名の抜け殻みたいだ。やがて俺の脇腹が小突かれる。リンチの続きか？ 頭でなく体がそう訴える。しかしあの時ほど悪意に満ちた力ではない。腹に刺激を受ける事により、俺は今自分の体が横たわっているのを初めて理解した。次に気づいたのは体勢がうつ伏せである事。そこまで知覚できたらあとは徐々に徐々に、体の各器官が稼動して霧が晴れるかのように外界の情報を吸収していく。目を開く。俺はフローリングの冷たい床に転がっていた。手を動かそうとする。激しい痛みが走って顔をしかめた。そして声が耳に届いた。

「やっと起きたか」

情報が飛び込んできても、それを理解できるかどうかは別の話だったらしい。俺は目の前の男にまず第一声を浴びせた。

「何でお前がここに居るんだ？」

「寝ぼけていられるとは余裕だなアーティ。周りを見る」

先から俺を呼び小突いていた相手は何とランバルドだった。どうしてコイツが俺と一緒にいる？ 俺は家で意識を失ったはず——と考えて、思い直す。ここが家であるわけがない。

痛む体をよそに無理やり上体だけ起こす。まず目に飛び込んできたのは高さ二メートル以上の赤茶色の柱だ。横幅は十五センチほど。鉄製だろうか、それが僅かな隙間を持って等間隔に横に数十個と並んでいる。ああ、簡単に言おう。

「牢屋か？」

「裁判所の被告人待機室らしい」

「何だつて？」

——裁判所。意識を持っていかれる前の記憶がようやく蘇ってきた。タイラは俺をあえて射殺しなかった。正当に裁判をかけるとか何とかで……

「おい、俺だけか！？ ツレの姿はなかったか？ ああ、それとお前、何でいるんだよ？」

「うるさい奴だ。ツレが居たのか？ 私がここから見たのは、ボロ雑巾のようにされたお前が警官共にこの部屋に投げ込まれた姿だけだ。他は知らん。それより——」

空気が一変した。ランバルドの体から怒気以上の、怨念じみた強い何かが溢れ出す錯覚を覚えた。思わず身を引く。

「お前、私の事を喋ったのか？」

低音による恫喝は、無意味に怒鳴りつけるそれに比べより迫力を増す。しかし何の事か分からない俺は答えようが無い。黙っているとランバルドは更に説明を付け足した。

「あと少しで準備が整ったと言うのに！ どうやって突き止めたか知らんが、俺の住処に警察官共が夜明けに雪崩れ込んできた！ コツコツと貯めた武器は勿論、もうすぐ完成するはずだった爆弾の類も全部回収された！」

よく見ると、グレーのワイシャツは所々が擦り切れており、ズボンにも黒ずんだ染みがこびり付いて固まっている。ランバルドも捕まる際にある程度の歓迎を受けたのだろう。

しかし爆弾とは……何て物を作っている。武術も出来て爆弾の知識もあるとは……。この男の持つ能力に戦慄を覚える。だからこそあの暴徒達のリーダーを務めていたのだと納得した。

「居場所は教えてない。本当だ。でも——俺がカグヤの家に忍び込む時に、作り話に信憑性を持たせるためにあんたの特徴そっくりの男に襲われた、と話したな。怪我をした風を装って家に入れてもらった」

「……それでか。おそらく二度も襲撃を受けた事により、お上は面

子を潰されたんだ。警察連中はあの夜全員叩き起こされた事だろう。あとは分かる。皆血眼で自分の持つ情報源を洗ったに違いない。今まで良好な関係を気づいていた裏情報屋の類にも脅しをかけた事だろう。信頼が命の裏情報屋連中は簡単に口を割らない。だが銃口を突きつけられれば――。全ての関係をご破算にしてまで俺を突き止めたんだな」

脱力して壁に背中を落とすランバルド。黒い霧は霧散していた。しばらく沈黙が続く。耳障りな金属音は手元から。未だ俺は手錠をはめられているし、見るとランバルドもそうだ。ここは裁判所らしいが粹な被告人待機室もあつたものだ。まだ有罪か無罪かも確定していないのにこの檻と手錠は何だ。それに一部屋に二人。あまりに適當すぎる。人権とかその辺りの事は考えてくれないみたいだ。ツキもどこかに押し込められているのだろうか。子供達は？結婚しているわけでも血の繋がりがあるわけでもないが、それでも俺の「家族」として処罰を受けるはめになるのだろうか？ 考えると気が狂いそうになる。腹が煮えくり返る。

檻を隔てた向こう側の扉横には太った若い警備員が直立不動で立っており、怖いのか時折こちらに不安げな視線を寄せていた。会話も聞かれてしまうのだろうか、もはや別に構わないだろう。

「ランバルド。全ての黒幕はカグヤの父親、タイラだったんだ。あいつは金を貰っていた。あんたやお仲間が受けた罪は、多分裏であの男が操作していた。自分にとって不利益な者、もしくは高官連中が罪に問われた場合、賄賂次第でその罰を無効にしていた」

虚空に視線を彷徨わせていたランバルドの視線が突如俺へと固定される。

「何だと？」

「残念ながら証拠は無い。だから……あの野郎を裁きにはかけられない。カグヤはおそらくタイラの命令を受けて判決を読み上げているだけなのだと思う。だからランバルド、せめて恨むなら親父の方を恨んでやってくれ」

「関係無い」

啞然とした。吐き捨てるように、他の意見の存在さえ許さないような響き。

「実際に死の宣告を行ったのはあの少女だ。私はあいつを許さない。

——ああ、ならこうしようか。親父も娘も殺す」

「おい——」

痛む体を完全に起こして詰め寄ろうとした間際で、扉の開く間延び音が俺達の間割り込むかのように鳴った。思わず視線をそちらに向ける。訪問を知らされていなかったのか、慌てて敬礼をする肥満警備員の隣にある扉から二人の人物が姿をのぞかせた。

メイド服が一番に。続くのは女神を思わせる銀の衣。アマネとカグヤだ。白き天秤の乙女の正装なのだろう、銀一色のチュニツクドレス。教会の神官が身に付ける法衣のように、肘の辺りには少しのだばつきがある。アクセサリーの類やコサージュ等はない。生地もおそらくただの布。主張する色とは裏腹に地味な、無に近い、飾りの無い服。そしてそれに相応しき表情の着衣主。

意外な事に二人を見てもランバルドは静かに、体勢を崩す事無く腰を下ろしたままだ。だがその目は雄弁に意思を語っていた。その内容は——先程まで話していた事そのものだろう。

最初に口を開いたのは、一番寡黙であるはずのカグヤだ。

「さよならだ」

「そうみたいだな」

「私はお前を死刑にする」

「何も、本当にする事ないだろうに」

散々宣告されていた事だ。それがいよいよ現実になろうとしている。昨夜忍び込む前から既に覚悟は出来ていたので、今更慌てふためいたりはいしない。

会話が終わった。

俺も何も言わなかった。

コイツは一体何しに来たんだ？ それを問おうとして思い立つ。

きつとこう返ってくるだろう。「分からない」と。ああ、本当に俺、カグヤの扱い方だけでなく考えも分かるようになってきたんだな。「タイラなんだろ。全てを仕組んでいたのは。どうして庇う？」

背後で立つアマネの肩が僅かに震えた。――やはり知っていたのだ。しかし、対照的にカグヤは無反応だ。そこまで親子の仲が良いわけでもない。となると、脅されているか、忌々しい想像だが暴力を受けているのか――

「分からない」

少女は何の感情も込める事無く呟いた。

――だから分からないでは俺も分からない。ともあれ、カグヤはタイラの不正を止める事は無いのだろう。それは、今後一生このような茶番劇が続いていく事を意味する。そう思うと胸が熱くなった。俺は吼える。

「いつまで繰り返すつもりなんだ！ こんな事をずっとこれからもやっていくのか！？」 お前それで本当に――」

「私はずっとこうだった」

怒りに似た強い感情。カグヤの言葉にそれが込められている。俺の言葉を遮って発言した彼女に内包されているのは、小波のように静かながらも全てを飲み込む津波のような巨大な力。

「言ったはずよ。誰かがやらなくてはならない仕事。そして私はこの髪を持って生まれてきた。ならばこれは私が――」

「親父の不正を暴く件と、お前の髪の色是件は関係無いだろうが！」
その美しい目を睨みつけながら俺は思った。やりたくもない天稗仕事を半強制的にやらされていたカグヤ。周りの期待もある。やめられなかった。もしかしたら、幼き頃からそのような人生を送ったせいで、諦念の心が染みついてしまったのかもしれない。それとも――人を処刑台に送り続けて、何かが麻痺し、壊れてしまったのか
もしれない。

「だったら丸坊主にでもしちまえ。何なら墨持ってきて真っ黒に染めてやるのか？」

結局俺の口から出たのは面白くも無い皮肉だけだ。彼女は怯みもしなかった。それでも俺の焦燥感に似た思いが伝わったのか、静かに、まるで滴る水滴のように小さな声で呟く。

「……お父さんだから」

吐露した。カグヤは心の奥に仕舞ってあったそれをようやく外に押し出したのだ。口にしてみれば何て事は無いただの理由。俺は口を開きかけ――

再度ドアが開く。警備員は再び慌てて敬礼しようとして――眉をひそめた。訪問は知らされていなかったのだろっし、そもそも目の前の男が誰か分からないのだろう。俺はその姿を見て更なる乱入者に胸がざわついた。

「や、アーティ。久しぶりだね」

全員の視線を余す所なく飄々と受け止めて、はにかむように微笑む。カグヤもアマネも一言も発しない。アマネの方は頭を下げた。ランバルドは値踏みするようにその男を睨んだ。そして俺は――

「アーベスト」

鉄格子を思い切り蹴り飛ばした。その笑いを受けて、今まで嫌な想像でしかなかったアーベストの立ち位置を知ったからだ。俺の行動に少し驚いたのか、カグヤが後ずさりアマネがその細い肩を受け止める。探偵は恐れもせず檻に近づくと顔を伸ばす。

「裁判、僕も傍聴席で見学させてもらっよ。友人であるアーティの最後の舞台だものね」

スーツから覗くワイシャツを胸倉を掴みあげた。ボタンが千切れて飛んだ。警備員が止めに入ろうとするがそれでも俺の指はアーベストから離れない。激しい痛みが手を襲う。どこかの指の骨が折れているのを思い出したが、それよりも怒りが勝った。

「シャー口は、お前を尊敬して、ずっと追いかけていたんだぞ
……！」

「あの世で後悔しているんじゃないかな？ 僕がこんな人間で」
どうしてこんな事をした、とは聞かなかった。アーベストの右手

には、貧乏人にとって嫌味なくらいの輝きを放つ金の指輪が二本。身なりも変わっている。いつものくたびれたスーツでなく新品の、嗅いだらお金の臭いでも漂ってきそうな、およそこの男らしからぬ物を着ていたからだ。

手を離れた。よろめいたアーベストは着衣の乱れを直すところらに向かい合う。

「嘘だったのかよ……。一緒にシャーロの死を悲しんでくれて、真相を見つけ出す、て！」

「貧乏は窮屈だね。心が膨れても腹が膨れなくては意味無いだろう？ 悪いとは思っているよアーティ」

悲しみが怒りを塗り替えていく。

信頼していた。何度も助けてもらった。気のいい、頼り甲斐のある人だと思っていた。なのに、どうしてお金などに負けてしまったのだろう！ 報酬を得たタレコミ内容は安易に浮かぶ。俺を追いかけているタイラに助言をしたのだろう。裏口の存在を教え、逃げ道を塞いだのだ。

「アーティ」

手のひらで檻を叩き俯く俺に上から声が振って来た。アーベストが俺を見下しているのだろう。

五月蠅い。

「アーティ、こっちを見る」

濁った目を上げると、そこには鉄格子の間から差し込まれる馴染み深い黒い塊が見えた。戸惑う。その物に対してではない。これを自分に渡そうとしているアーベストにだ。

間違はなく、そこにあつたのは俺の愛用していた拳銃だったのだ。「何をしているんです！！」

これにはさすがに警備員も声を荒げた。檻の中の危険人物に勝手に物を渡す。それも人を一撃で殺せる武器を。問答無用で取り上げようと足音を響かせてアーベストの手にある拳銃を奪おうとする。こんな時に冗談か？ そう思わせるほどアーベストの行動は常軌を

逸していた。俺は視線を拳銃から奴の目に向ける。

目と目がかち合った。

「カグヤさん」

警備員がその腕を押さえると、アーベストさんの口からカグヤの名が出た。語気に込められたその強い感情と、その人物の地位が警備員を怯ませた。

「弾は一発だけ込められています。勝手なのは承知ですがね、これ、アーティに渡したいんですよ。聡明で察しの良い貴方ならお分かりでしょう。この拳銃が何をするための物か。死よりも辛い罰は幾らでもある。ならそうなる前に、てね。堕ちた僕ですけども、アーティには感謝しているんです。最後のプレゼントがこんな物でセンス無いですけど」

あまりに馬鹿げた物言い。自殺用の道具。たとえ込められた弾が一発とは言え、その向けれる矛先は数知れない。そしてアーベストは牽制する。

「念のため言っておきます。もしアーティが法廷でそれを抜く事があつたら、僕は即座に彼を射殺する事にします。……そのような条件でどうでしょうか」

所持品チェックとか言うのがあつたはずだが、アーベストが上着を捲ると、そこにはグリップが茶、全体がシルバーの銃が一丁腰に掛かっている。タイラに取り入って持ち込みを許してもらったのか。

「いいわ」

「カグヤ様、駄目に決まっていますでしょう！」

他人事のようにサラリと首を縦に降ったカグヤにアマネが厳しい声で止めに入る。

「アマネさん、どうかお願いします。僕は彼を楽にしてやりたいのよ。自分自身で頭を撃ち抜くもよし、誰かに銃を向けてその瞬間僕に撃たれるのもよし。どうせもう、アーティが入る強制収容所の書類は出来ているのでしょうか？ だったら今ここで渡しておかないと裁判が終わったらもう会えない。規則を真正面から破っているのは

分かります。でもその上で、お願いしたい」

「私もアーティには世話になった。うん、許可する。でもややこしいから、皆誰にも言わないように」

突如として視線を向けられた肥満警備員は背筋を伸ばして敬礼する。きつとその胸中にはクエスチョンが渦巻いているだろうが、白き天秤の乙女の機嫌を損ねるわけにもいかないのだろう。分かりました、と元氣よく返事をした。

最後の餞別。信頼の対価が弾一つ。

泣けてくる。

「それなら特例を貰うわよカグヤ様。裁判の最中、私を傍に置いてでないとは納得しない」

言うまでもなく、俺が銃口をカグヤに向けるのを警戒しての事だった。今この瞬間でさえアマネは俺の四肢を油断無く見つめている。不穏な動きをしたら、俺が身を持って味わったあの神速で手を、足を打ち砕く事だろう。

「いいわ」

またしても返事一つ。カグヤは間を入れずアマネの言葉に返事を重ねた。

「おい。いいわけないだろうが」

辟易としつつ俺は反射的に声をあげる。裁判の最中、ずっとカグヤの隣にメイドが立ち尽くすと言うのか？ それは緊張と言うより滑稽だ。

「うん。それなら僕も安全だ。アーティにはその銃の使い方間違えてほしくないからね。白き天秤の乙女、そしてその第一側近。この二人に逆らえる人間なんて少なくとも法廷内には居ないから、誰も文句は言わないでしょうね」

そして、用件はこれで済んだとばかりにドアノブに手をかけるアーベスト。少なくとも俺に対する未練など、その背中を見る限り微塵も感じていないようだ。最後に一度だけ振り返って軽く手をあげる。そして、さも今思い出したかのように重大な事をさらりと述べる。

た。

「そうそう。ツキさんも君の裁判を見学するから。感謝してよ？」

僕がタイラさんに何度も頼んで特別に実現したんだからさ」

「何！？　おい、ツキはどうしているんだ！　子供達は――」

「じゃね」

壁と同化しているような錯覚さえ覚える白ドアを開けて、悠然とアーベストの奴は通り抜けた。俺の言葉は耳に届いているだろうに一顧だにしない。閉じられたドアの音が返事となって返ってくる。

「ツキとあなたの子供達は無事よ。傷一つ無いわ。裁判の順番は最初にアーティ、そしてツキ、その後に子供達一人一人に執り行う。最後はランバルド。家族は皆共犯と見なされる」

その言葉は引き金だ。無意識にカグヤに襲い掛かろうとした俺を引き止めたのは、咄嗟にカグヤと俺との間に割って入ったアマネの殺意。それでも俺の感情はドス黒い怒りに塗り潰されていく。

鈴の音が響いた。

「アーティ。すまない」

不意を付かれたのは俺もアマネもだ。その声は小さく早口でありながらも後悔の念があった。それだけで怒りの中に戸惑いを覚えてしまった俺は単純馬鹿だろうか。

「私はもう行かなくてはならない。ずっと気を失っていたようだから時間を教えておくが、今は朝の八時。あと一時間もしないうちに裁判が始まる。だから最後にお前に伝えておきたい」

それは白き天秤の乙女になる前の、カグヤとして送る別れの言葉か――

「お前の言った通りだ、私はいつ死んでも良いと思っていた。私の咎は重く耐え切れるものではない。家の警備を手薄にしているのも誰かに襲撃され殺されるのを半ば願ったの事。情けない私は自ら死ぬ勇氣も無い。仕事のためには心を無にし、事務的にこなしていかなくては気が狂ってしまう日々だった」

告白。饒舌なカグヤを、付き合いの長いアマネでさえ驚いた顔で

見つめている。誰にも言えない溜まったものを吐き出しているような、まるで懺悔をする罪人のような人間臭さがそこにはあった。

「お前は変な奴だった、アーティ。空虚である私の生活にお前は、お前達はズカズカと入り込んで来て勝手に乱して行く。お前と会話すると、埃被った戸棚から、自分でも忘れていたものが数多く溢れ出たものだ。もし——もう一度、またお前と出会えたなら——」

美しい絹糸を思わせる髪をゆつくりと垂れ流し、それきり彼女は顔を上げようとしなかった。表情は分からない。小さな声と早口癖で言葉も最後までではつきりと聞き取れない。

「私も——お前の——」

小さな沈黙。だが、それきり鈴が鳴る事はなかった。小さなカグヤ。その心の裡で果たしてどのような葛藤があったのだろう。しかし再び顔を上げた時、もはやカグヤはいつものカグヤだった。白き天秤の乙女となった彼女は、その顔に不遜なる魂を宿りつけ己の顔を押し殺す。

「ありがとう、そしてさようなら」

彼女はの凜とした佇まいは偉人の銅像のようだ。美しく翻った銀の髪へはもはや決して手は届かない。彼女は俺に罰を下すためにこの部屋を出る。慌てて警備員がドアを開き、頭を垂らした。俺はその後姿にかけるべき声が無い。沢山言いたい事があるのに口から言葉が出てこない。

「覚えておけ。死んでもお前は許さん。殺してやる、白き天秤の乙女」

地獄の底から響く怨念は、ずっと声を発さなかったランバルドから。だがカグヤは見向きもせずドアの奥へと吸い込まれて行った。舌打ちをする音が聞こえる。カグヤの心情を聞いていただろうに、巨躯の苛立ちは少しも癒される事はなかったようだ。

最後の一人となったアマネはカグヤを追いかけてようとして——はたと振り返り俺の目を射抜く。洗練された立ち仕草は相変わらずだ。特別な事はせず、ただその場に居るだけなのに彼女からは気品のよ

うなものが感じられた。

「ずっと私だけがカグヤ様の味方でした」

「いきなり何の話だ」

突然の言葉に思わず聞き返してしまう。だが真摯なその瞳に、俺はそれ以上口を挟むのをやめた。

「私の家は、過去栄光を誇り現代では既に没落した武家です。両親は、蜘蛛の巣が張られたトロフィーに輝きが戻るよう、幼い私に徹底して武道を叩き込みました。子供は女である私しかおらず、朽ち果てようとしている看板を一人で背負いました。才に恵まれたか、私は次々に対峙する男達を地に伏せ、気づけば周りに居た者より上に立っていました。そしてタイラ様に見込まれたのです」

ボディーガード。それも同性で年齢の近い人間だったらカグヤの傍に置くにはうってつけの人材。そう思った事だろう。タイラはカグヤに愛情を注いでいないわけではないのだ。

「生まれた時から勝手に人生を決定されている。自分の意思は関係ない。強制的にやらされる。そしてそれは重く、押し付ける側は押し付けられる側が潰れてしまう事など考えもしない。比重は違えど、私とカグヤ様は同じでした。歪んだ愛情を受けた私達はお互いの抱える空虚な想いを理解できる。私は生涯カグヤ様にお仕えし、永劫この拳を、脚を振るうでしょう」

「お前も……ずっとそうやって茶番を続けていくつもりなのか」

「アーティ様、今まで本当にありがとうございました」

憤りは誰にも届かない。カグヤもアマネも達観し俺に礼ばかり言ってくる。彼女のお辞儀は相変わらず腰を丁寧九十度曲げる正式なもの。慇懃さは無い。本音で礼を言っているのだろう。

それが頭にくる。

「カグヤ様に潤いを与えて下さり、心より感謝します。ここ最近はお当にあのご本ばかり読んでいらっしやいます。タイラ様が買い与えた本をよそに、ご自身で選んだ物を手に取る。小さな道とは言えど、それはカグヤ様が初めて自分で選んだ道」

「いいのかよ、こんな終わり方で！ カグヤの事、大事に思っているんだろ！？ お前それでも主の幸せを願うメイドかよ！」

「私もカグヤ様同様、アーティ様の事は本当にお好きでした。今だから言えますが昨夜の戦い、カグヤ様はアーティ様とお話する事に躊躇いがあるみたいでしたので、決断させるために無粋なダガーを持ち出しました。あの子、最後には止めたでしょう？」

爽やかな笑み。アマネは本当に春風が似合う。

解き放たれた鎖を蹴飛ばし、俺とツキとシャーク、カグヤとアマネで昼下がりのピクニックにでも出かけたらどれほど最高だろう。彼女の笑顔は濁った俺の心に幻想の春を運ぶくらい素敵なものだ。「それでは失礼します。また後ほど、法廷で」

最後の訪問者は足早に主の下へ駆けて行った。張り詰めたものが切れたのか、怪我を思い出した俺は疲労を覚えて床にしゃがみ込む。カグヤもアマネも縛られている。カグヤはタイラに、アマネはカグヤに。

あんな奴でも一応は父親だ。カグヤはタイラを裏切る事が出来ない。仮に出来たとしても髪がどうの、という笑ってしまうような理由である席に居座るだろう。下らない。どうして何の罪も無い子供がその未来を黒く塗りつぶされなくてはならない。古傷が痛む。

やる事も無くしばらく身じろぎせずに座る。結局俺は何もできないのだろうか。人を救うなんて大それた事は考えていない。ただ、一度家族となったあの少女を解き放ってやりたいだけなのだ。その後で不幸になっても……変な話、それはある種運命だ。父親が子供の未来を奪う。そんな事は決してあってはならない。親父がよく口にしていた言葉だ。

何気なくランバルドを見る。

そして気を抜いていた俺はその姿から戦慄を覚え、思わず身震いをしてしまった。

相変わらず壁に寄りかかって床に尻を付けている。だがその体は震えていたのだ。両の手で拳を作り肩を、膝を、痙攣する病人のよ

うに唸らせている。

恐怖の感情でないのは明白だ。床に視線を落とすその顔から表情は分らない。カグヤに直接会い、ランバルドの中に潜む何かが再び這い上がってきたのだろうか、何らかの激情が執念を燃やす巨人を支配しようとしている。

檻の中。もはやあとは死刑宣告を受ける身。

なのにあの男はまだ諦めていないのだろうか？ カグヤ殺害を。怒りの底が見えないランバルドを突き動かしているものも、それはかつて語った家族なのだろうか。

会話は無い。

時計が無いので時間が分からない。一時間が三時間にも感じる。唐突に白ドアのノブが回り、いずれも体格の良い三人の警備員が入ってきた。

「アーティ。出る。裁判を執り行う」

簡潔に告げると目の前の鉄格子の鍵が開かれた。連中は俺の手錠の具合を確認すると歩くように促す。
いよいよだ。

人生最後の大舞台へと俺は歩き出した。

第十二話

扉が開かれた。

以前シャ―口の法廷に乱入した時と違い今回の俺の頭は落ち着いている。三人の警備員に付き添われながらゆつくりと法廷への一步を踏み出し、そのまま奥まで進む。そして俺は改めてあの時のシャ―口の視点から辺りを見渡す事が出来た。俺に用意された椅子は無い。半円状の赤茶色の手すりがあるだけで、とりあえずその定位置に立つ。

目が合った。

俺の真正面。距離にして十メートル程だろうか、大部屋の奥に用意された赤茶色の机には薄黄色の、人の座高より一回り大きい椅子が七つ。中央に位置するのはカグヤ。既に入廷を済ませていたようだ。時間になった後からもったいぶって現れるかと思っていた。そしてそれぞれ左右に三人ずつ、シンプルな黒の法衣を纏った老人達。両肩に掛かる白絹基調の袈裟にはラッパを吹く幾人もの天使に混じって、やはり女神が大きく刺繍されている。

カグヤの瞳は揺るがない。無言で俺を見つめてくる。咎めるような感情も無ければ同情するような感情も混じっていない。彼女は赤の他人を無遠慮に査定するように睨めるつける。

俺から見て右斜め、左斜め前にはそれぞれ大きさ二人分程の古ぼけた机が置かれ、まず右斜めの机は一人のス―ツ姿の男が占領し何やら書類に書き物をしていた。パソコンも用意されている。あれか？ 法廷での記録を取ったりとか、そのような係か？ 左斜めの机には二人。敵意ある視線を受ける。きつと俺を責める役なのだろう。背後は一メートル程の段差があり、傍聴人席だ。軽く視線を向けると、金持ち精神丸出し格好の貴婦人方が楽しそうに歓談している。ス―ツ姿の紳士様達も多く、俺と目が合うとすかさずツレに何やら耳打ちしてこちらを指差す。記者とおぼしき人間達も見受けられ、

手帳を取り出して既にペンで書き込みをしていた。

「アーティ！」

緊張感の欠片も無い背後のざわめきの中、ツキの声が耳朵をふるう。悲痛な声。慌ててその方向に視線を向けると、右斜め前の記録係おその背後にあつた扉が開かれ、そこから三人の見知つた顔が姿を現した。

ツキ、タイラ、アーベスト。ついと言えば、ツキのためだろう警備員も三人ほど。彼女にはやはり俺と同じく手錠が掛かっている。その顔を見る限り乱暴された形跡は無いので胸を撫で下ろす。

俺は片手を上げる事さえ出来ないので、不敵な笑顔を向けてそれに応える。

三人は壁に寄りかかりこちらに視線を向ける。悲哀のツキ、愉悦のタイラ、爽快のアーベスト。各々が顔で声を語った。特等席のつもりか、あんな場所に陣取つて観覧とは。俺はこの裁判の異常さに戦慄さえ覚える。傍聴席でもない所に堂々と入り、あまつさえ手錠をかけた罪人まで連れる。

それが許されているのだ。

むかつく納得を覚えた。シャーロやランバルドの仲間達に行われたおざなり裁判。いつかの本で読んだ魔女裁判以上に酷い。これは人を裁く場では無い。右から左へと流すただの作業。

アーベストとタイラが楽しそうに話しているのが癪に障る。タイラは声をあげて笑っていた。

最後に……俺は最初から目に付いていたが、あえてずっと無視していた隣の男に敵意の視線を送る。その男はよくアイロンののかかったズボンに、どこにでもある紺の上着。安っぽそうな水色と青のストライプのネクタイ。上着に掛かっている金のピンバッジは知っている。弁護士証だ。

相手も俺と目を合わそうとしない。立ちっぱなしで電卓を忙しく叩き書類と睨めっこして頭を抱えている。呼んでもいないが一応弁護士はレンタルできるらしい。俺の視線に気づいたのか、縁の厚

い黒フレームの眼鏡がこちらを向いた。年齢は三十代後半といった所か。

「ああ。別に貴方は何も発言しなくて大丈夫です。私が全部やりますので。ご安心を、この手の裁判専門ですから慣れていきます」

既にこの裁判の適当さは知っている。そして目の前の眼鏡からその臭いが明らかに漂っていた。今睨めっこしている書類も、本当に俺に関する資料なのかさえ疑わしい。名前さえ名乗らないし、この場で弁護士と初顔合わせと言うのも素晴らしい。何とお仕事熱心な人なのだろう。

鐘が鳴った。

それまで好き勝手喋っていた傍聴人達は喧騒を一旦やめる。何故「一旦」か？ シャーロの裁判の時に俺は既に見ている。少し経てばまたヒソヒソと始めるのだろう。

カグヤが始まりの声をあげた。よく通る、洗練された美しい響き。「座ったままで結構です。まず最初に申し上げておきたい。私の命が狙われていると、信憑性の高い匿名の情報が入りました。よって本日のみ、私の側近を裁判中も傍に置く失礼を皆様、お許し下さい」カグヤと老人連中の背後の壁には巨大な女神の油絵が飾られ、法廷内を見下ろしている。その隣、両開きの木製扉が開かれ、全員の注視を受けながらもアマネが現れた。一礼。そして何ら臆することなく歩くその足取りは威風堂々。彼女はさも当たり前のように王座に着くカグヤの隣に立つ。

ざわめき。六人の老人も、タイラでさえその顔には狼狽の色が浮かんでいた。当然だ。匿名情報もさる事ながら、裁判長の隣にメイド服など冗談以外何ものでもない。

「何か意見がある者がおりましたら挙手を。無ければ裁判を始めます」

カグヤとアマネに意見できる人間などそうはいない。アーベストの言う通りだ。下手に質問して睨まれるよりも無関心を突き通す方が利口。神には誰も逆らえない。疑問だらけに違いないタイラも、

アマネの力を信用している為か、特に口を挟む事なく終わった。

「それでは始めます。 戸籍登録無し、名称アーティ。住居は貧困街の廃工場。……間違いありませんね？」

「ああ」

「結構です。 それでは検察側から始めて下さい」

左斜め前に座っていた二人の男のうち、一人が立ち上がった。ブラウン色の角刈りで歳は三十代前半くらいか。不敵に笑みを浮かべるその顔は、苛める事に快楽を覚えるサディスティックな変態に見える。変態はカグヤに向かって演説者のように両手を開いて声を張る。

「白き天秤の乙女殺害未遂、及び窃盗、強姦、暴行、家宅不法侵入以上の罪で検察側は被告人を起訴します。まず昨夜の被告人の非道の限りを立証してくれる証人達の召還を許可下さい」

——何だか非常に多くのものが省略されている気がする。頭が悪い俺はうる覚えだが、黙秘権云々の説明受けてないし、起訴状とか言うヤツも読まれていない気がする。おまけに、今の一言には思い切り主観的な言葉も含まれている。

カグヤの許可を得て登場したのは見た事もない女性だ。二十代、綺麗な顔立ち。だが彼女は始終俯きがちで表情は暗い。左頬には付いたばかりの痛々しい青痣があった。変態が訪ねる。貴方の職業は？ 女は答える。カグヤの家に仕えています。そして次の一言で爆弾を落としていく。

「昨夜、押し入った賊に——乱暴を受けました」

涙ながらに語るそれは、傍聴席からどよめきと同情の溜息を誘う。背中に先程までの十倍比で敵意の視線が突き刺さったのを感じた。厄介な五感だ。

彼女は語った。眠っていたがすぐ近くで人の気配を感じ目を覚まし、まず口を手で塞がれた。そして必死で暴れて助けを求めようとしたが殴られ、脅しをかけられ、最後には抵抗できなくなった所で乱暴されたと。

知るか。

「あそこにいる男をよく見てください。彼に間違いありませんか？」

——誘導尋問じゃないのか？　ちなみに俺の隣の弁護士は貝のように口を閉ざしている。女性は俯いた顔を上げ俺を見ると、やや間を置いて、やがて首を縦に振った。

「はい。間違いありません」

眠っていたという事は部屋は暗かったのではなからうか？　よく間違いなく」断定できるものだと感じする。

女性は足早に退場し、変態は聴衆に向けて更に熱弁をふるう。その様子から、大衆に自分の脚本を聞かせ、流れを支配する事を楽しんでいるのがよく分かる。しばらくすると、また新たな人物が扉を開けて入ってきた。今度は警官だった。帽子は意図的に取つてあるが、あの茶色い服は昨夜まで俺も馴染みのあった物だ。厳つい四角顔、口は一文字に結ばれている。不正とは間逆に位置する人間にか見えない。右腕には痛々しいほどに包帯が巻かれ、両肩から三角巾を吊つてくの字に固定してある。額にも巻かれており、ガーゼがプラスして左のこめかみにくっ付いていた。

病院行つて寝てろよ。

変態から職業を確認された後に、警官は話し出す。

「白き天秤の乙女の家を警備していたら突然背後から襲われました。茂みに連れ込まれ、ナイフのような物で私の右腕を何度も刺すと、『次は左だ』と。たまたま同僚がそれを目撃してそこで賊は逃げ去りましたが、もしそれが無かったら——私はきつと、暴虐の限りを尽くされた後に殺されていたでしょう」

事実だけを言え。お前の感想なんて誰も聞いてねエ。……いや、皆聞いているのか。

「愉悦の為だけに、手近に居た貴方を刺したというわけですか。いや、全く酷い話です。……あちらにいる人をよく見て下さい。それは彼に間違いありませんか？」

四角顔と目が合う。当然俺は初めて見る顔だ。

「はい。間違いありません」

「ありがとうございます」

改めて、シャーロの裁判がたったの十五分で終了したのを理解した。流れが既に出来上がっている。これはシナリオに沿ってただ進めていくだけの模擬裁判に過ぎないのだ。だが内容は子供達がふざけて行っお遊戯に等しい。

とりあえず、出てくる奴全員に「私は真実のみを話します」とか誰か宣誓させてやってくれ。

その後も何人かがカグヤの前に立ち、昨夜あつた虚実を俺に突きつけていく。俺は強姦魔であり、無意味に人間を刺し、拳銃を盗み、宝石類も大量に盗み、爆弾も所持し、汚す目的でカグヤの寝室へ忍び込もうとした所で警察に見つかり、慌てて逃走したらしい。ちなみに昨夜カグヤとアマネは一切俺を見なかった事になっていた。俺は黒いレッテルが貼られていくのを延々と、他人事のように聞いている。証人、そして証拠である武器の類が提示された所でようやく変態は一息ついた。

カグヤに促され俺達サイドへの発言が許された。眼鏡はさつさとこの裁判を終わらせようとするに違いない。検察側と争う気など更々無いのだろう、特に気負う事もなくカグヤへと視線を向けて――

「オイ、弁護士」

眼鏡にだけ聞こえるよう、俺は殊更低い声で呟く。貧困街で培った、滅多に使わないが相手を脅す時にのみ使う声色だ。電流に弾かれたかのように俺を向く弁護士。俺は目を細め、隣の気取ったスーツを睨みつける。

「お前邪魔だ。黙ってろ。一言口にしたらこれで殺す」

警備員が少し離れて経っているのが幸いした。俺は後ろで組まれた手錠付きの両手をもぞもぞと動かし、ロングシャツを少し捲って腰にさしてある拳銃を見せ付ける。

「ヒイツ!!!?」

男と思えない情けない声をあげる眼鏡。「この手の裁判専門」のわりには、荒事には全く慣れていないのが声による脅しを仕掛けた時点で分かった。

はたから見て気の毒になるくらいな体たらく。さすがにそれを見てカグヤが訝しがった。こちらで何かがあったのを悟ったのだろう、その隣でアマネが臨戦態勢を取るのが雰囲気伝わってくる。

「どうかしましたか？」

カグヤの問い。表情は変わらない。

「今こちらで相談しまして、弁護士……え……眼鏡さんに代わり、私が直々に弁護します」

俺の発言で一挙に背後が騒がしくなる。だがそれは前方にも同じ事が言えた。声が無くとも表情が心情を描写している。アマネも、検察側も、タイラもアーベストも、ツキも、六人の脇役老人も、カグヤを除き皆困惑に近い顔をする。おそらく脚本が崩れたのだろう、眼鏡が口を閉ざす事により、いつもの淀みない流れの川に柵が出来てしまったのだ。

「ふざけないで下さい。アーティさん、貴方は問われた時だけ口を開けばいい。弁護士？ さあ、早く進めて下さい」

俺から見てカグヤの左隣に座る脇役老人が苛立った声で告げる。俺は眼鏡の黒い革靴をスニーカーでグリグリと踏みつけて意図を告げる。耐え切れなかったのか、僅かに眼鏡が痛みを口にした。

「わ、私は、私は……アーティさんに……、ア、アーティさんに発言を、してもらいます。その、先程、二人で話し合いました——」
「カグヤ」

茶番は終わりだ。靴を眼鏡から離し、俺はこちらを凝視する緑の瞳に真っ向から対立した。周りのざわめきには耳を塞ぐ。

最初から自分を弁護するつもりなどない。それよりも言いたい事があった。

「ありがとう、さようなら、じゃないんだよ。……俺は説教は嫌いだ。押し付けがましいからな。でも言わせてくれ。だってお前も、

自分で自分の答えに納得してないんだろ？ 年齢幾つだ。十三か十四か？ そう言う時はもつと我俣になつていいんだと思うぞ。子供の特権だ」

言い終わる前から怒声が飛び交った。六人の老人達が不快をあらわにしながら俺を指して喚く。カグヤは何も言わない。だが俺から目を逸らさない。

「おい、もうそいつをつまみ出せ！」

「裁判が終わるまでどこかに入れておけ！！」

言葉の意味は分からずとも、俺がカグヤを軽視した発言をした事は理解できたのだらう。罵詈が老人達から浴びせられる。だが今の俺には耳に入らない、目にも入れない。この瞬間を逃したら、もう一生カグヤに物を言つてやる機会が無い事は分かつていた。どうせ俺は死ぬ。ならばその前に、少しでもカグヤの背負っている物を取つ払つてやりたかった。

お前は俺達の子供だ。思春期の子供には迷惑がられるのも親父の役目だ。

「頼れる大人が居なかったんだろ？ 普通だったら我俣を言つて親と衝突したりしてさ。お前はなまじ頭が良い分、自分の中で丸め込んでしまったんだらうな。もう少し早く出会つて、お前から相談を受けたかったよ」

有無を言わせぬ力で俺の腕が掴まれる。肩にも手を置かれ強引に体を引つ張ろうとする意図が読み取れた。

カグヤは何も言わずにそれを見ているのだらう。エメラルドグリーンの宝石は揺るがない。急展開を迎えたこの裁判でも彼女は変わらず冷静だった。それでも俺は信じている。

最初に出会った弁護士事務所。不貞腐れながらもシャー口になぞなぞの答えを教える。別れる時だって、分厚い本を渡され視線を鋭くして不機嫌を隠さず俺を睨んできた。久しぶりに昨夜再開した時はその心を不器用ながらも話してくれ、一時間前などはあのカグヤがお礼を言つてきた。

思い返すと表情豊かだった。あいつはきっと、自分の心を上手く外に出せない。「良い子」である事を続けるうちに、本当に自分が分からなくなってしまうたのではないかと思う。会ったのは数えられる程度だけど、その度に拙い素顔を少しだけ見せてくれていた。

居た堪れなくなつて、俺はその一言を口にしていた。

「ウチに来いよカグヤ。きっと楽しいぞ」

その一言にどんな意味があつたのか。所詮言葉など口から出た瞬間に消え行く運命だ。だがそれは消えなかった。何故なら熱を帯びた喧騒が宙を飛び交う中、決して大声とは言い難い俺の言葉はカグヤの中に入り込み別の何かに姿を変えた。確信できる。

だって、顔の無いカグヤを変えられるのは外からではない。いつだって裡の中にある何かを叩いて初めてあいつは素顔を出す。弾かれた琴線は綺麗な音色を奏でる。その美しい調べの中で人は無表情ではいられない。

カグヤは咄嗟に下を向いた。

それは何を隠したのだろうか。自意識過剰と誹られようが俺には答えが分かる気がした。

耳を開く。

既に喧騒は暴音と化していた。無論その向ける先は俺だ。野次が飛び、ゴミまで投げつけられる。既に出来上がってしまった俺の極悪人の人格に加え、カグヤを侮辱した言葉の数々。傍聴席から発せられる個々の非難は嵐と化し、俺を飲み込んでいた。警備員の手により一層の力がかかる。破壊するものが無くなれば嵐も自然消滅するのだ。ちらりとツキを見ると、泣きそうな顔でこちらを見つめている。そして襟首を無理に引っ張られて視界が天井を向いた時――「構いません。被告人はそのままで結構。……手を離してあげなさい」

カグヤの声はいかなる騒ぎの中でも鋭い針のように通るようだ。決して声を張っているわけではないのに、大の大人達が示し合わせたように野次を止める。嵐を意図的に葬る事ができるのも神の力か。

カグヤの左右に位置する老人達は明らかに何か言いたそうに彼女を見るが、澄ましたように無視をする無言の壁を前に静々と言葉を飲み込む。

俺の体に纏わり付いていた無数の手が離れていく。

助けてくれた？

思わずカグヤに礼を言おうとして――

彼女の顔に被さっている能面に半ば愕然とする。

届いたはずだった。そう確信した。別にそれで俺の刑が覆るのを期待したわけじゃない。ただあの仮面を取り外してやりたかっただけなのだ。なのに、まるで最初出会った時のようにカグヤは無表情を貫いていた。

ちらりと、ほんの僅かカグヤが視線を部屋の隅に向けてまた戻す。それで俺は理解する。俺が掴みあげたその手には鎖が絡まっていたのだ。彼女は引きずり戻された。

――隅ではタイラが満足そうに笑みを浮かべていた。

カグヤが静かに告げる。

「被告人はきちんと自分の弁護をして下さい。それとも、先程の内容で終わりですか？」

崩せない。

唐突に二人の関係が分かってしまった。

いかに不正に手を染めようと、カグヤにとってタイラは自分に残された最後の肉親。確かに仲はさほど良いわけではないかもしれない。会話も少ないのかもしれない。でも――

父親なのだ。

裏切れない。裏切れないのだ、カグヤは。

だって父親だから。それだけ。きつと他に理由は無い。

逃れられない運命。血の縛りと、銀の縛りと、彼女は見えない糸に侵されている。

主の隣に立つアマネが一瞬酷く辛そうな顔をした。それは誰のための痛みか。何に気づいての苦しみか。――癒える日はくるのだろ

うか。

「カグヤ……」

掠れた声は自分のものだ。

俺がやってきた事は無駄だったのだろうか。

今日までの自分の行動に、初めて疑問を感じる。最初から無理だったのだろうか。子供の面倒を何人と見てきた。だからカグヤの面倒も見れる、と付け上がっていただけだったのか。途中で何度も見せてくれた歳相応の顔。扱い方が分かってきたなどと調子づく俺。

でも、所詮神様に薄汚い凡人が手を伸ばす事など不可能なのか？ 縋るように、目の前の神にひれ伏す様に、俺の喉から泣き言が這い上がってくる。

「アーティ！」

静まり返った法廷に木霊するのは金切り声に近いツキの叫び。何事かと皆の視線が彼女に向くのが分かった。だがその隣に立っているのがタイラであるため、それ以上の追求は無い。

ただ名前を呼ばただけ。なのに俺はその声に含まれる切実な想いを分かってしまった。いや、逆だ。ツキは俺の心情など手に取るように見抜く事ができる。俺が何を感じ、何に絶望したのかを読み取ったに違いない。だから叫んだのだ。

貧困街で育った俺達は世の中の知識や常識に疎いかもしれない。でも彼女は言った。その上で言い切った。俺の背中を後押ししてくれた。

アーティは間違っていない。

ああ、お前は本当にいい女だ。

「今日も綺麗だな、ツキ」

呟きは自分の胸に。俺の口癖であり賛美歌は彼女に。そして視線はカグヤに。

白き天秤の乙女はツキの言葉も、俺の眼差しも慨さない。

「余計なお節介だけど、覚えておいてくれないか。もしお前に自分を変えようとする気持ちがあるうと、『助けて』と言ってくれなく

ちや周りはお前に踏み込めないんだ。どうしてアマネが俺をお前の元に連れて来たか、もう分かっているんじゃないのか？」

性懲りもなくざわめきが始まる。だがこの部屋の主はカグヤだ。彼女が生殺与奪を握り、指一つで人の首を簡単にはねる事が出来る魔女である限り誰も逆らえない。

「俺が居なくなっただ後でもいい。一言アマネに言っただけでくれよ、お前の気持ち。そうすればアマネも大手振るってより行動を起こせる」

言葉でたたみかければ良いわけではない。

だから俺は心底願う。今はまだ無理でも、いつの日かカグヤが羽ばたける事を。横目で主を気にしているアマネはきつと宣言通り、生涯カグヤに仕え、助けていくだろう。

神を信じていない俺が、女神のために想って死ぬなど皮肉なものだ。

「自己弁護は以上だ。それから最後に。ツキと子供達は無関係だ。頼む、せめてあいつ等くらいは助けてやってくれ」

頭を下げる。

これで終わりだ。

これ以上ダラダラ言うよりも、俺の少ない言葉を噛み締めてほしい。その小さな耳に届いている事を願う。

喧騒が潮を引くように収まっていった。つまり今からカグヤが何か発言するのだろう。冷えた頭で考える。開始から十五分は経ったはず。ならきつとこれで終わりなのだろう。休憩を挟んで判決か。

沈黙。

まだカグヤは発言しない。

やがて固唾を飲んで見守っていた聴衆達から囁き声があがり始める。俺でも、この沈黙の長さが少しおかしい事に気づき始めた。

彼女は表情を作っていない。いつも通りだ。だが動くはずの口が閉ざされたままだ。横でアマネが気遣うように視線を向ける。老人達も戸惑いと、先を促す意図で机の中心部に視線を送った。

一体何を考えている？

少なくとも、ツキと子供達には寛大な処置を願いたい。皆は何もしていないのだ。

沈黙が続く。

眠っているのではないか、と阿呆な疑問を思ってしまうくらいカグヤは身じろぎしない。瞬きさえ忘れているような気さえする。

その空気を一つの唸りが割った。

「カグヤ。今すぐ判決を下しなさい」

タイラだった。日頃の誠実そうな笑顔はどこへやら、鋭い眼光を娘に飛ばしている。

不動なる大岩は雷を受けたように砕け散る。カグヤは驚いたように父親に顔を向けた。

確かこの中ではカグヤが一番地位は高いはずだ。それでも彼女の父親の発言はやはり効力が大きいのか。本来法廷で裁判長が誰かから指示を受けるなど言語道断のはず。でも唯一タイラの言葉は許されるのかもしれない。地位と役職の言葉の境界が非常に曖昧だが、もともと異常なる裁判形式だ。さすがに判決に堂々と関与するのは問題があるだろうが、今みたいに進行を促す程度の言葉ならば表立つては誰も抑制しないのかもしれない。

……いや、やっぱりそれでも異常を越えた摩訶不思議な法廷だ。

「休憩は無しだ。後の裁判が沢山仕えている。この場で判決を出しなさい」

その言葉にカグヤの顔が強張った気がした。タイラの言葉でも分かるが、やはり休憩時間は取る予定——というか取り決めなのだろう。都合のいい考えが浮かぶが、カグヤにとってそれは心の準備をする時間だったのかもしれない。残酷な宣告を下すための。

タイラは昨夜以前から不審がっていたのだ。娘の僅かな変化。親としても、そして裁判を通じてカグヤを見てきたタイラは、もしかしたら焦りさえ覚えたのかもしれない。

だからたたみ掛けるのか。時間を空けて余計な事をカグヤが考え

ないように、今すぐ「いつものように」結論を出せと言っているの
だろう。

彼女がゆっくり俺に向き直る。仮面が揺れている気がした。今力
グヤの心には誰の言葉が渦巻き、誰の言葉に導かれようとしている
のだろう。そんな状態で本当に結論を出せるのか。同じ事を思った
のか、アマネが誰からも分かるくらいはつきりと首をカグヤに動か
す。無言の問いかけ。それでも気丈にカグヤは手で制す。

今度こそ周りは静寂に包まれた。もはや「いつも」と違った裁判
の行方に面白半分のギャラリーも先が見えず、より早く結論を知り
たいに違いない。だから答えを見守る。彼女の言葉を。

手元の書類に羽ペンで何かを書き終えたカグヤは書類から目を離
した。

俺の目を見据える。

時が来た。

宣告の時が。

それでも、いつもの無言の迫力が半分近くカグヤから失われてい
る気がする。迷っているのか？

こんな時なのに俺は思う。

何と残酷なのだろう。こんな小さな少女に人の死を宣言させ、そ
してそれを興味で見守る観客達。ここは何だ？ 何をする場なのだ。
カグヤがどのような思いで判決を下してきたのか、この連中は知っ
ているのか？

「判決――」

カグヤは立ち上がり、自らが記入した書類に両手を付き顎を上げ
た。

「戸籍登録無し、名称アーティ――」

僅かに間が空いた。

時が止まった。

誰もが神を見た。

そして神は応えた。

「懲役九百五十年と課す。収容先はアベニスタン溪谷第二地区、紅の塔。その命尽きるまで——」

——いつもの事なのだろう。

——何百人、もしくはそれ以上の数を見てきたのだろう。

淡々と、事務的に、感慨無く、静かに彼女は俺の罰を口にした。

俺は素直に言葉を受け入れていた。目を閉じる。こうなる事は想定済みだ。

おそらく——今彼女が下した罰は、タイラが事前に決めていたのではなからうか。

そして更に一抹の疑問湧く。

何が？　と思い返して目を閉じたまま考える。

ざわめきが聞こえてこない。もっとう、判決が下った後は興奮の渦に観衆が包まれて——

そこで俺は瞼を開けて、それだけでは飽き足らず更にその目を広げた。

カグヤは止まっていた。判決を全て言い終えずに。俺を見つめたまま時が停止したように、口を少し開けたまま彫像のように立ち尽くしていたのだ。その顔に宿るのは——悲哀。無意識にだろう、肩が震えている。目元が生き物ように動く。波を打っている。それは容量限界にまで溜まり、それでも心より溢れ出した勢いは止まらず——遂に滴が頬に零れ落ちた。

仮面が砕けた。

判決の途中にも関わらず、白き天秤の乙女は人の証である涙を落としたのだ。女神で在り続けなければならない少女はその一時だけ神の座を降りる。

「カグヤ——」

叱咤は悪魔の恫喝。角を生やした地獄の死者が女神の背中に鞭を叩きつける。

別の意味で誰もが静まり返る。温厚な人柄で通っていたであろうタイラが、このような公共の場で、それも判決が出ている最中に白

き天秤の乙女を怒鳴りつけたのだ。

隣にいるアーベストも、アマネでさえもその剣幕に一瞬たじろいだ。

苛立ちの意図は考えるまでも無い。早くケリをつける。たった今カグヤに命令が下されたのだ。

カグヤは声の方へ振り返りはしなかった。

口を結ぶ。僅かな逡巡。額を下げ涙を手で拭き取る。

そして堂々と言い放った。

何故だろう、その姿に貫禄を覚える。俺はその時初めてカグヤに神々しさの欠片を見た気がした。

「アーティを斬首刑に処す。以上。これにて閉廷。連れて行きなさい！」

背後で熱狂の渦が巻き上がった。沈黙を重ねた後のそれは格別なのだろう、群集は溜めていた緊張感を解き放つように声を天へと上げた。いや、魔女の儀式に魅せられたと言った方が正しいかもしれない。歓喜より狂気に近い雄叫びに聞こえるのは間違いか？

俺は取り乱しはしなかった。冷静だ。先程怒鳴ったタイラを見ると、奴は釈然としない顔をしていた。やはり最初言い渡された懲役九百年とか言うのが本来のシナリオだったのだろう。しかしいずれも俺の死を意味する判決。やがて胸を撫で下ろしたように奴の顔は落ち着いた。そこにすかさずアーベストが気安く肩を叩いて笑いかける。腰巾着のお役目だ。ツキは——いや、今は目を合わせないでおこう。

まだやるべき事が残っている。

強制収容所に入れられた人間の末路はカグヤも知っているに違いない。だから最後——おそらく彼女は言い直したのだ。俺に安らかな死を与えるために「真つ当な死刑」を選んでくれた。タイラの言いつけに背いた事はほぼ間違いない。彼女は頑張った。羽ばたく事は適わなかった。だがその口ばしで、本当に些細な抵抗だったかもしれないが、きっと生まれて初めて親に背いたのではないだろうか。

上出来だ。

表情は既に無ではない。今にも泣きそうだ。だが彼女は己の職務を全うして俺を裁いたのだ。自らが決めた罰を下して。今の姿は裁判長そのもの。無い胸を張りながら彼女は椅子に座り込んだ。

そこまで見届けたならばそこから先は俺の役目だ。

当たり前のように。

流れるように。

俺は手錠を外して腰から拳銃を抜くと、銃口を前へとゆっくり定めた。

第十二話（後書き）

あと一話で一気に終わらせるか、二話かけて終わらせるか。
いずれも最終話は間近となりました。

ヘタレですが、最後までお付き合い頂ければ幸いです^^；

最終話

最初の悲鳴は正面の六人の老人達。

一番早い行動はやはりアマネ。一秒も満たないうちに、呆然とするカグヤの机を乗り越え正面に立った。

検察側、記録係がその場にしゃがみ込み反射的に頭を抑える。

何が起こったのか分からない背後の傍聴席でも、誰かが「銃だ！」と叫んだ途端に阿鼻叫喚の絵図に変わったのが伝わってくる。扉に近い位置の人間は転げるように外に逃げ出し、他の人間は銃口と正反対の位置にいるにも関わらず頭を抑えて蹲る。

隣に居る眼鏡はやはり両手で頭を抱えて漫画のように震える。背後に佇む警備員達に下がるよう牽制し、俺は銃の先に位置する人物に声をかける。

タイラだ。

「な、何のつもりだ！　おい、おい誰かそいつから銃を取り上げろ！！」

視線を左右に忙しく彷徨わせ、手足が拳動不審に震えている。「全員動くな。動いたら容赦なくそいつの頭を吹き飛ばすぞ。悪いがこつちも余裕が無いんだ」

悪人台詞を禍々しい笑みで彩る。タイラにはさぞ俺が凶悪じみた人間に映った事だろう。

だが俺へ飛び交ってきた声はその隣の男からだった。

「アーティーー！。何やってんのよ。キレちゃったわけかい？　要求言ってみなよ。一応聞いてあげるからさ」

間延びしたその口調はアーベストのものだ。俺の向く銃口など、どこ吹く風で溜息交じりに肩を竦めて首を振る。その目は笑っていた。怯えている様子は皆無だ。

「カグヤを解放してやれ。もついいだろう？　これ以上、私利私欲のためにあいつを汚すな！」

「な、何を言っているのか、分からないな！ 解放！？ 私はあの子の父親だぞ」

「言うと思ったよ。ならこのまま死んでもらうしかないな。それしかカグヤを助ける方法が無い」

悪党としてはそこそこ出来上がっているのだろうが、銃口を突きつけられた経験は無いらしい。タイラは気丈に振舞おうとしているが、その顔は恐怖で満ちている。大きく胸を上下し呼吸しているその音がここまで聞こえてきそうだった。

意識とは裏腹に五感を細部まで送る。聴衆や警備員に動きは無い。先程証言された俺の残酷無慈悲な所業が良い意味で効いているみたいだ。唯一俺にも察知できないアマネだが、視界の隅で見る限りではカグヤの元から動こうとする気配が無い。そのままじっとしていてくれ。ツキは——ああ、酷く悲しい顔で俺を見ている。その目は暗に言っていた「もうやめて」。心の中で謝罪する。

笑い声が弾けた。

場違いな大笑い。気でも触れたか、そう思った者も少なくなかっただろう。それくらいこの場に似つかわしくない朗らかさがあった。

——アーベストだった。

「ありがとう！ いや、本当にありがとうアーティ！ せっかくシリアスに脅してくれている所で悪いんだけどさ、僕言ったよね？ それをもし他人に向けたら、僕は君を射殺するってさ」

懷に悠然とその金光る手を差し込む。俺の制止の声は無視された。アーベストが取り出したのは先程俺も一度目にした回転式拳銃だ。よく磨かれた銀のフレームが場違いな輝きを放つ。

「アーティさあ、よく考えてごらんよ。凶悪犯である君に、僕が本当に拳銃を渡すと思ったかい？ 普通に考えてそれはちよつと頭が悪い行動だと思うのよ」

得意気に語る探偵の前に、俺の額から脂汗が落ちていくのを感じる。アーベストは続けた。

「弾は一発、それに嘘は無いよ？ でもその銃弾をよく見てみたか

い？ 結論から言うよ。その弾はプラスチックで出来た模造品だから。そんな物で脅しをかけるなんて勇氣あるじゃないアーティ」

もはや今の俺に確かめる術はない。

自分の息が荒くなつていくのを感じた。

頭に亀裂が入ったかのように冷静さが消えていき、銃を持つ手が震え始めた。

そんな俺を嘲笑うかのようにアーベストは心底楽しそうにその一言を放つ。

「繰り返し、ありがとうねアーティ。これで僕は君を殺せる。そっちが銃口を向けてきたのだから、これはどう見ても正当なる射殺だ。ここまで簡単に踊ってくれると僕も気持ちいいよ。……おつと警備員さん、ツキさんを抑えていて下さい」

「お願いアーベストさん！ やめて！！ どうしてこんな——！」

飛び掛ろうとしたツキを牽制すると、アーベストの弛緩した顔が引き締まる。銃口の狙いは俺の顔か、心臓か。目つきが、ふざけたそれから真剣なものに代わる。

「アーベスト……さん」

つい、いつもの敬称付けで呼んでしまった。俺は今どんな顔をしているのだろう。

「今まで楽しかったよ、ありがとうアーティ」

最後に目と目が合う。そこに宿っていた言葉は——

乾いた音。

見えない糸に引かれたように体が傾く。上半身を支えきれず膝が床に付いた。抗う力など無い。頭から床に倒れ込む。崩れ落ちる音よりも早く、悲鳴が法廷を支配した。

「アーティ——！」

意識はある。カグヤの叫びを聞いた気がした。アマネも、ツキの声も聞こえる。傍聴席からも悲鳴が跋扈する。だがもはやそれを視界に入れる力は無い。

「喜んで下さい、タイラさん！ これでようやく邪魔者は消えまし

たよ！ シャーロに続いてアーティだ」

「こ、声が大きいぞアーベスト君」

忌々しい耳だ。そう言えば俺はどこを撃たれたのだろう。まだ意識が落ちない。悪人連中の話し声だけが嫌でも耳に届く。こんな時でもまだ五感はあるらしい。

「アーティが既に色々喋ってしまっています。聴衆や記者から真実が漏れる恐れがある。ここは逆に開き直って、皆に恐怖を植え付けましょう。なに、どうせ言葉なんて証拠に残りませんよ。それに今日来ているのはほとんど貴方側の人達でしょう？」

痛みは無い。アーベストの声が耳を漂っている。茶番劇がまだ続く。

そして聞こえたのはタイラの声だ。殴ってやりたい。

「賢明な皆様は分かっていますね？ 誰が正義で誰が悪か。今日の罪人アーティも、次に裁かれる伴侶も、子供達も、先日のシャーロとか言う子供も、実は罪自体は無かったです。ですが！ 不穏分子としてこの私が裁きました。今日この場から『間違った真実』が外に出るような事があれば、私はその者を処刑するでしょう。ですがご安心を。これまで通り皆様とは良好な関係を築いていきたい何かありましたらご相談下さい。格安で請け賜りますよ？」

怯えた聴衆達の中から幾つかの笑いが漏れる。腐りきった社会の見本が今この場にあった。

そして軽やかな電子音。視界が真っ暗な俺には何の音も分からない。

「……おい、何だねそれはアーベスト君？」

アーベストが何かを取り出したようだ。だが答えは無い。言葉の代わりに聞こえてきたのは、先程の「作り笑い」を越えた、本当のアーベストさんの心よりの笑い。

「アーティ、もういいよ？ ご苦労様。もう笑っていいよ。一緒に笑おうよ！」

俺は……

ゆっくり体を起こすと――

きょとんとしていた面々の真ん中で馬鹿笑いをしてやった。

我慢できなかった。心底おかしくて、周りで目を丸くしている連中の表情がおかしくて、何より俺とアーベストさんの今までのやり取りが、お互い大根役者で似合わなさすぎて！

カグヤが、アマネが、ツキが、タイラが、他の面々が言葉無く俺達に視線を行き来させる。

探偵の右手にはカセットテープが、左手にはそれを一回り大きくしたくらいの、薄型の黒い長方体の電子機器らしき物が見えた。いつの間にか銃は仕舞ったようだ。

「タイラ。今の台詞一言一句、録音させてもらったからな」

見下したアーベストの視線はタイラへのものだ。声色も冷たく変わっている。

茶番劇の中の茶番劇。俺とアーベストさんの目を見て、タイラは嵌められた事を理解する。

「あいつは撃たれて……なかったのか！」

「先程の言葉がほしくて一芝居打ったに過ぎないのよ。……あんたに取り入るためにアーティの逮捕にも協力した。あんたは狡猾で尻尾を掴ませない。けど、宿敵が確実に死んだその瞬間くらいは誰でも祝杯をあげたくなる。それに賭けたまでの事さ！」

ずっと耐えてきたのだろう。その反動であるアーベストさんの拳がタイラの鳩尾に勢いよく食い込んだ。大量の唾液を吐き出し、口をあんぐり開けて悶え苦しむ。眼球が飛び出んばかりの双眸だ。

「ああ、これ返すよ」

そして右手に指していた二つの金色を、未だ息が吸えずに苦しんでいるタイラの口に無造作に投げ入れる。次は容赦なくその横っ面をパンチで張り飛ばした。タイラは受身も取れず床を転がる。

「うちの一番弟子の仇だ」

実際俺がアーベストさんの芝居に気づいたのは、弾一発込みの拳銃を渡された時だ。被さるようにしてその下には手錠の鍵が添えて

あったのだ。だが物のやり取りはその二。一番は、その目を見る事によって伝わってきた。いつだったかカグヤの所在の件でも目でやり取りをした事がある。今回は必要以上に俺の目を覗き込んできたが、それは自分の意思を俺に伝えるためだったのだろう。細部の思考まではさすがに俺も分らない。だがその輝きから、アーベストさんが決して金に目が眩んだわけではない事はずくに理解できた。

シリンダーの中に詰まっているのがオモチャなのは当然チェック済みだ。空の銃を渡す理由は？ 少し悩んだが、そこは言葉にヒントがあった。俺を撃ちたかったのだ。そして先程のは空砲。そこまできたら、あとは死んだフリをする以外俺が取るべき行動は思いつかない。

「な、にを……しているかぁ！！ そいつ……等を！ 捕らえ、ろ！！」

立ち上がり、それでも未だ満足に空気を肺に取り込めないのだろう。タイラは息も絶え絶えに言葉を紡ぎ、あまりの出来事に呆然となっている警備員に指示を飛ばした。

だがそんな事は当然予測しているアーベストさんだ。

「ガナリヤ判事！ 聴衆席の居る皆さんと、警備員の皆さんにご退出いただけるよう指示を出してくれませんか？」

突然自分の名前を呼ばれて肩を震わせたガナリヤという男は、俺から見てカグヤの三つ左隣、机の端席に座る老人だ。

末席とは言えどこの神の都において審判を下す側に座る事を許されたのだ。それなりの地位であろう。警備員がタイラの言葉をよそに、思わず足を止めてガナリヤに視線を向けて判断を仰いだのが分かった。とうのガナリヤは、老人特有の顔の染みに覆われ窪んだ目つきをした男だ。だがその肌色の顔がほんのりとした朱色に染まる。怒りの色だ。

「何を突然！ ふざけるな！ おい、そいつ諸共早く――」

「一昨日、マゼラ地区にある安アパートで二時間程過ごされましたが、楽しかったですか？」

朱色が剥げ落ちる。代わりに浮かび上がってきたのは病人と見間違えるほどの白だ。塵を見る目つきで笑いながら告げるアーベストさんとは裏腹に、視線を落ち着かなく左右へと回し始めた。

何やらもごもごと回答を口に行っているがハッキリと聞き取れない。「仕方ありません。親愛なるベラー判事！ 貴方からお願いできますか？」

次に名前を呼ばれたのはガナリヤの隣に座る老人だったらしい。何やら身構えたのが見て取れるが、アーベストの言葉はその上から心を粉々に打ち砕く。

「一ヶ月前、奥様とアバルト地方へご旅行に行かれましたよね？ 良い所です。けれど夜、貴方はカジノへ出かけると奥様に告げたはずでしたが、どうしてあのような男娼集まる――」

「し、知らん！ 知らん！！ 何を言っているのだね君は！！」
思わず椅子から立ち上がるベラー判事は、同時に傍聴席へと目を向けた。

もしかして奥様が、仕事熱心な旦那さんのお仕事ぶりを見に来ていたのだろうか。

「困りましたね……私の調査ミスでしょうか」
わざとらしく溜息をつくアーベストさんへは誰も近寄れない。
貧困街で命と隣り合わせで探偵業を掲げてきたのだ。そこ等の、権力を振りかざすだけの能無し共などアーベストさんの敵ではない。恐ろしい男だ。シャー口もとんでもない名探偵に弟子入りを許されるものだと思つづくと思う。

「いや、困りました。実は私が事故等で死ぬと、今申し上げた書類が自動的にしかるべき所へ流れてしまうんです。大変だ、ミスなら早く取り消さないといけない」

銃口を突きつけている警備員達への牽制。判事達は慌てて銃を下ろすように指示を出す。

滑稽の一言につきる。

「そつだ！ バルレイ判事！ ミラ孤児院へご熱心に寄付をなさつ

ていますが――」

アーベストの怒りは静まらない。シャー口を無慈悲に殺された怒りは、しかるべき連中へナイフとなつて突き刺さつていく。

「全員法廷から退出なさい！！ 早く、今すぐです！！ これは命令ですぞ！！」

遂に一人の判事が負け犬のように吠えた。制止するタイラをよそに、他の判事も次々と退出を促す。アーベストさんに名前を呼ばれていない判事達も危機を悟つたのだらう、自らの恥部を暴露されないうちに全身全霊をかけて退出を促す。

「警備員の皆さんもお願ひしますね」

「警備員もだ！ 早く出なさい！！」

呑気な口調と裏腹に、追従する言葉の数々は熱い剣幕に満ちている。

ここは笑つていい所か？

「お前等、何をしている！ 戻つて来い！！ 白き天秤の乙女の父親である、この私の言葉が聞けないのか、おい！？」

判事達とタイラ、その権力比は見えない。だがタイラの言葉は沈んだ。六人の老人達から責め立てられるようにしてギャラリーは扉に殺到する。どのみち、拳銃まで登場したこの異様（いつももの異常な裁判とは違う）な場に居たくないのもあつたのだらう。外に出て良いとの言葉に望んで後押しされているのが見て取れた。警備員達は明らかに迷いの念があつたようだが、そこはやはり縦社会バンザイだ。あれよあれよと人が減つていき、呆然とするタイラの前に残つたのは俺とツキ、アーベストさん、それにカグヤとアマネと、すっかり縮こまつた六人の脇役老人だ。水を打つたように静まり返るがらんどうの法廷で、アーベストさんが俺へ視線を向けた。その目は優しい。

「バトンタッチだ、アーティ」

その意味を理解するのに一呼吸かつた。

そうだ、アーベストさんの力により、タイラの不正を遂に証拠と

して収める事ができた。どうやって真相までたどり着いたのかは分からないが、探偵は探偵としての仕事を終えたのだ。

ならば――

「カグヤ！」

見て気の毒なくらい少女は身を震わせた。

そう、鎖が一本が千切れかけているのだ。白き天秤の乙女を呪縛する縛りが！ タイラと言う名の親子の鎖。彼女は父親の不正を見て見ぬフリをしてきた。だがもはや目の逸らしようがない場所までそれが押し出されたのだ。

今なら千切れる！

カグヤは理由があつて庇っているわけではない。父親だから、の一言だけで守っているに過ぎないのだ。ならばそれは覆せる。お膳立てをしてやるのは大人の役目だ。

「父親に引導を渡してやれ。お前の手で」

「え？」

もはや仮面などとうに外れていた。転回する展開。直前の気持ちの爆発もあり、カグヤは何を信じて、どのように行動すれば良いのか分からないに違いない。その証拠に疑問符は焦りとなり顔に浮かんでいる。父親に顔を向けようとして――

「そいつに判断を仰ぐな！ ここは裁判所だ。お前は裁判長だ！ お前が答えを出せ！」

もはやカグヤはただの少女だった。自分の知っている世界が壊れていく怖さを味わっている。

だが俺は一つ失念していた。

鎖はまだもう一本あったのだ。

カグヤもそれに気づく。羅針盤を無くした航路で確固たる道を見つける。

そう――彼女は自分の髪を見つめていた。

「私が……私がやるしかないの。他に誰もできない。続けられるのは私しかないの」

哀願する瞳と共に吐き出されたその言葉は、逃げ口実とも弁解とも受け取れた。何がそこまでカグヤをその椅子に縛り付けるのか。「たとえどんな形であろうと、私は白き天秤の乙女であり続ける。永遠に。だったらこのままでいい。自分で答えを出すのは——怖い」

新たな告白。

そして俺は自分の間抜けさに呆れ果てる。どうして俺はこんな簡単な事も考えてやれなかった？　かつて俺が自分で口に出して言った事ではないか！

ただ十数年生きただけの少女が、真の意味で人を裁く事などできるわけがないのだ！

だから彼女は依存したのだ。父親の不実に。答えを代わりに出してくれる人間に。もしかしたらそこには、死者に対し歪な安心感もあつたのかもしれない。自分が罰を下したのではないとの慰め。

生まれ持った運命。

女神は無条件で人間に慈悲を向けなくてはならない。人は勝手に神の在り方を定める。

それを——たかが貧困街の一市民である俺が変えられるのか？

「その通りだカグヤ！！　これまで通りで良いのだ！　そいつに助けなど求めてみる、私が今まで行っていた罪人への罰の裁定を、今度はお前一人にやらせるぞ！？」　お前にそれができるか？　受け止められるのか！！」

声をまともに出せる程度には回復したのかタイラが叫ぶ。法廷内の味方が消えたにも関わらず、血走った目と食いしばった歯が見せるその狂気に似た相貌は立派な悪人面だ。タイラにとっての最後の生命線。それはカグヤであり、悪人はそこに黒い愛情を持ってその手綱を取ろうと鞭を振るう。

「……星」

数秒の沈黙の後にポツリと漏れた、その場違いな言葉はあまりに小さく、この静寂の法廷でもうつかりすると聞き逃してしまうほど

だった。カグヤだ。突然の意味の分からない言葉に周りの人間は皆その真意が量りかねない。

カグヤは俺を見ている。

このままでいい、と口にして。私がやるしかない、とも口にしたばかりで。

でもその小さく結ばれた口元はひどく頼りなく震えていた。

「……消しゴム」

まただ。カグヤはまた一つ言葉を落とす。俺も、タイラも意味が分からず反応ができない。彼女の一番の理解者であるうアマネも、問いかけの意味を込めてだろうカグヤに振り返った。

「……山」

カグヤの目から再び感情が溢れ出る。溜まったそれは溢れ出ようとする。小さな鼻を鳴らした。

俺に何かを伝えようとしているその姿。だがそれはまるで暗号めいて――

「まさか!？」

星、山、消しゴム……。俺の脳裏に浮かんだのは子供が描いた拙い絵の数々。まさか、まさか？ でもきつとそうだ、間違いない！でも俺は今持っていない。シャーロの暗号表一覧を持っていないのだ――！

「……本」

エメラルドグリーンの瞳が揺らいだ。だがそれはもはや宝石には比喻できない。

カグヤは泣いていた。今度は包み隠さず。両目から落ちる滴を拭おうともしない。

宝石は涙を流さない。カグヤが人であるが所以の、ごく当たり前の事柄が起きただけの事。

俺は手すりを飛び越し、カグヤとの十数メートルの距離を歩き出した。

幸い最初の「星」のみ覚えていた。シャーロの手帳を開いた最初

のページの記号であり、全体を通じて沢山散りばめられていた記号だったからだ。

星は「た」。だが他の三文字は分からない。

それでも、た、で始まる四文字。そして彼女が流した涙の意味。

「このままでいい」。そんな言葉を額面通りに受け取っては永遠に女の気持ちは分からない。

俺はどんな目をしていたのか。

距離を縮めつつある俺にカグヤは緊張しているような、鼻を嚙りながらも頬をこばらせた固い表情で出迎える。

——なに身構えてやがる。お前が自分で今口にしたのだろうが。

白き天秤の乙女の机まであと五メートル弱。

無作法に近づく俺に、もはや周りの老人達は制止の声さえ出さない。良い事だ。自分の立場をよく弁えている。

だが。

それでもその影は俺の前に降り立った。

主を守る為に。

彼女の緊張を見抜いて、俺を敵と判断したのか。

アマネはカグヤが見下ろすその前に、背を向けて俺と敵対する。

「そこだよ。空気の読めない奴だなアマネ」

「カグヤ様は不安がられております。……どうかお下がり下さいア

ーティ様」

アマネの顔にいつものような毅然さは無い。必死さと緊張が混じったかのような、慣れない職務を全うする新人のような面持ち。

——アマネが今の自分の行動に心から自信を持てていない証拠だ。それでも主は従者を止めようとしなない。

このままで良いという思い。変わりたいという思い。相反する二つの心が矛盾を生む。でもそれでいい。我侭も矛盾も子供の特権であり、それを踏まえて成長していくのだろうから。

「それ以上こちらへ来られるのでしたら、失礼ながら攻撃させていただきます」

迷いつつも俺を敵と認識し、アマネが構えを取ったのが分かった。どうしたものか。

一秒カグヤに触れるだけでいい。

それだけで俺は彼女を呪縛から解き放ってやれる自信がある。

援護は意外な人物から行われた。

「待ってアマネさん！」

カグヤにはアマネの背が。そして俺の眼前には何とツキの背が滑り込んだ。手錠は後ろ手にかけられたまま、それでもツキは躊躇う事なくアマネに立ちはだかる。

「お願い、アーティを行かせてあげて。このままではいけない事くらいアマネさんだって分かっているでしょ？ 皆頑張っているの」

後姿からではツキの表情は見えない。だがその雄々しい物言いから簡単に予想はついた。

「カグヤ様の心に僅かでも恐怖や迷いがあるのならば、私の役目はそれを取り除く事です」

「人は変わる時、いつだって不安でいっぱいのはずだぞ。それをいちいち他人が除外していたら、永遠に恐怖に打ち勝つ事などできない！」

ツキは一步踏み出す。

それを見てアマネが——あのアマネがたじろいだ。狼狽が顔に浮かんでいる。

「それ以上来ないで下さい。お願いします。でないと私は貴方を攻撃しなければなりません」

「アマネさんがそこを退けばいい」

「おいツキ、待て！ アマネは本当にやるぞ！！」

疾風迅雷。俺が言い終わるより早くアマネの体が動いた。衝撃が先、風は後からやってくる。身をもって体験したそれが目の前のツキに起こった。真後ろに位置する俺にツキの体が背中から飛び込んできく。勢いは相当なものだ、その軽い体を慌てて受け止めるが二人して盛大に床に倒れ込む。視線を真正面に向けると、上半身を捻

つたまま掌底を突き出したメイド服が映る。追撃は無い。

「ツキ！ おいツキ！！」

「……平気、だぞ」

閉じた口の奥で痛みを押し殺しているのが分かった。ツキは当然戦闘など無縁の女だ。しかめた顔は我慢の顔。立ち上がると再び俺に背を向ける。一撃をどこに打ち込まれたのか、あれだけ派手に飛んだにも関わらず、ツキは気丈にも前へと歩き出した。

「アマネさん。狙うなら顔にした方がいいぞ。私はこう見えても打たれ強い」

「どうして……どうしてです」

その言葉だけで、ツキはアマネが言おうとした事を察したらしい。眉間に皺を寄せ、苦しそうな、悩ましそうなその顔にツキはしれつと言いつつ放つ。

「私達の子供だ。我が家のママは優しいが、それでも時には心を鬼にして厳しくなるぞ」

かぶりを振るアマネに葛藤は無い。向けられる一切の言葉を打ち消すように、右手をスカートの中に差し込むと遂にその得物を取り出した。

啞然とする皆の前で、アマネはダガーの矛先をツキに向ける。その流れに逡巡は見られない。

「これが……最後です。お願いです、退いて下さいツキ様」

「これはウチのアーティとそちらのカグヤさんの問題。貴方こそ、そこを退いてくれたら私も下がるわ。私達は本来お呼びでない」

後ろで見ていたアーベストさんが何かを叫ぶが、それよりも早く俺は言葉を紡いだ。

「ツキ！ もうやめろ！！」

「アーティは黙って見てる。どのみちアーティではアマネさんは倒せない」

ならお前には倒せるのかよ！？

俺が駆け出すより早くアマネの姿が消えた。以前のようにカグヤ

に許可を求めない。そしてきつとあの時のように白銀に抑制の命令は落ちる事はない！

不思議だ。

アマネのスタートは肉眼では捉えられなかったのに、そこからツキまで突き抜ける刹那の間は俺の目にもその姿が映った。もしかしてわざとスピードを緩めているのだろうか。ツキがその刃から身を引くのを期待しているのか。ツキの体を押し倒そうと俺は手を伸ばす。でもそれは空を切った。

アマネの目が見えた。

ツキの顔を見ている。

ダガーを迎え撃つ彼女は何ら構えを取る事はない。背後からではその顔も窺い知れない。

だが顔の位置関係を予測するに、ツキもアマネの視線に視線を返している。

「ツキ……！」

悲痛な俺の声を塗り潰す漆黒の瞳。

アマネは最後までツキから視線を逸らす事なくダガーを突き抜いた！

生と死が弾け飛んだ。

ツキの瞳とアマネの瞳が交差した。

悪寒で支配される俺の体。

ツキが胸から血を流して崩れ落ちる。白銀は血に染まり、その生なる源を存分に吸い付くす。

なのに。

——ツキは落ちなかった。

血の一滴さえ外界には流れ出なかった。

俺は駆け寄って二人の位置を凝視する。

アマネは——その得物をツキの体に入れ込む寸前に停止していた。いつかの再現。ダガーは宙に浮かんだまま動きを止めている。そしてそれは……揺らいでいた。信じられない事にアマネはその手を震

わせていたのだ。

彼女の瞳孔は風起こる水面のように波打っている。涙とは違う動揺。ついで息が少し荒い。

ツキを見る。その瞳は凜として揺るがない。死への誘いが自分の心臓の真横まで来ていると言うのに、そちらにただの一度も注意を払う事をせずにカグヤの目を見つめ続けていた。

最初に退いたのはアマネだ。強く、ただ強く、屈強なる大の男が束でかかっても適わない力を持つメイドが、見えない何かに弾かれたかのように一歩後ずさった。

墨色の髪を揺らしながらアマネが息を飲んだのが分かった。

ツキの目に何を見たのか。

武人としての力であれば確実にアマネの方が上だ。だがツキが試したのはそのようなどうでもいい事ではない。俺は理解する。あの貧困街で、子供達の支えとなって真っ直ぐ生きている彼女は逞しく、強い。あえて言うならば意思の強さとも言うのだろうか。アマネを怯ませたのはそれだろう。

アマネの心が醜悪ならばそんな事には気にも留めずツキを刺し殺したかもしれない。でもツキはアマネをずっと褒めていたし、何より今その心に渦巻いている迷いにも当然気づいている。

カグヤを救いたいとのツキの意思。カグヤを守りたいとのアマネの意思。

強い想いはツキの方だ。

清らかであればあるほど、優しければ優しいほど、相手はツキの瞳からその意思を理解してしまう。

もしかしたらこの勝負を誰かは鼻で笑うかもしれない。絵空事である。

力でも口論でもなく、想いの戦い。優しい二人にはお似合いの戦争だ。

——なるほど、俺ではアマネに勝てないわけだ。

「カグヤ様……ごめん……」

アマネの右手から甲高い音を立ててダガーが床に弾かれた。膝を着く事はない。だが体を覆っていたその覇気が大気に溶けていく。萎んだ風船のように彼女の臨戦態勢は解けていった。

残ったのは、春風とは程遠い哀愁に満ちた顔だ。

そして俺はその横を素通りさせてもらう。

アマネも、もはや何も言わなかった。

ツキの戦いは終わった。

「何をしているかアマネ！！ そいつをカグヤに近づけさせるな！
聞いて…… うゴツ!？」

どこから犬が吠えていたようだが、押しつぶされたような声を最後に黙ったようだ。振り返る価値も無い。常に周囲に張り巡らせていた五感を解除する。

俺は全身全霊を、目の前に座る白き天秤の乙女に集中させた。

カグヤは若干腰が引けているようだ。仮面が外れた顔は涙で塗らした為か、いつもより何倍も人間らしく見える。鼻を鳴らすその姿は威厳も何もあつたものではない。

でも俺から逃げなかった。

だから俺はこいつを解き放つ。既に今の状態で女神としての鎖など切れているようにも感じるのだが、それは決定打ではない。だが俺は墨など持つてきていない。髪の毛の色など変えようがない。

見落としてしまうほど小さな光をその緑の奥に垣間見る。何かを期待するような眼差し。

散々引つ掻き回され、惑わされたが、やはり彼女は待っていたのではないだろうか。

「救いにきたぞ、お姫様」

高価そうな赤茶色の木彫り机に、偉そうに胡坐をかいて俺は座った。見上げる瞳と見下ろす瞳。どうやって？ 何を持って？ 聞きたい事は山ほどあるのだろう。

正解など分らない。いや、この際不正解でも構わない。

ここまで歩く途中に俺は一つの決意を固めていた。

この女がたとえ傷付こうとも、今この場から引つ張り上げないと永遠に変わらない気がした。

アーベストさん、そして特にツキ、こんな答えでごめん。
頭が悪すぎる回答。

俺はカグヤの項に左手を添えると、驚きに満ちたその美しい目を無視し、自分の唇をカグヤのそれに重ね合わせた。

全ては一瞬。

時が止まる。

五感を働かせるまでもなく、皆があっけに取られた顔でこちらを見ているのが嫌でも分かった。

言葉は無し。

音も無し。

そして三秒が経過した。

唇の柔らかな感触が消え去ったかと思うと、左頬に焼けるような凄まじい痛み。同時に小気味良い破裂音。

あのカグヤが――

平手打ちで思い切り俺を叩き上げた瞬間だった。

真っ赤な顔、怒りに満ちた目、食いしばった歯。

きつと周りは別の意味で再度あっけに取られているだろう。

白き天秤の乙女が、沈着冷静な彼女が、無表情しか見せた事の無いカグヤの顔が、こんなにも人間らしく、歳相応の乙女と化しているのだから。

カグヤだけはそれに気づいていないに違いない。

神は陵辱された。髪の色など関係ない。汚された女神はもはや神ではなくただの女だ。少なくとも女神は平手打ちなど放たない。

俺はピエロの役目よろしく、無様に机から転がり落ち受身も取らずに床へと激突した。

しばらくしても誰も何も声を発さない。約一名、俺の見上げる先に、荒い息で呼吸を整えている奴が居るがそれ以外は何も聞こえてこない。

机を杖代わりにしてやつと立ち上がる。忘れていたが、俺の体は昨夜のリンチでどこもかしこも悲鳴をあげていたのだ。

そして言っちゃった。

「いいビンタだ。お前そんな顔してまだ女神気取りか？」

「お前……！」

カグヤは未だ息を大きく吐きながら朱の差した顔で俺を睨む。そしてその後、現在の自分の悩みを思い出したようだ。純潔を奪われた一大事を考えれば、女神だ何だのは即座に頭から蒸発していた瑣末な事柄だったに違いない。我に返ったかのように再び難しい顔に戻ろうとする。

でも、もはや戻れるはずもない。

火の点いた導火線だ。良い意味で解釈してみる。吹っ切れた、だ。どうでもいいが、何度も唇を手で拭うのをやめる。

「もう一度言うぜ。カグヤ。お前の手で親父に引導を渡してやれよ」
銀色の鎖は砕け散った。そして残る一本は既に罅の入った死にかけの鎖。

「くっ……」

俺を睨みつけている場合でないと判断したのか、カグヤは呼吸を整え、とその未だ潤んだ瞳を自らの父親に向けた。

「カ、カグヤ！ そいつを許すな！！ この場を支配しているのはお前だ、白き天秤の乙女！ お前さえ一声かければ警備員達だって――」

「もう終わりにしよう、お父さん」

言葉の意味が意外だったのか、それとも自分に真っ直ぐ意見を通した事に驚いたのか、タイラは目を見開いて言葉を失う。

「お母さんが生きていた頃のお父さんは、もっともつと優しくかった。どうして……変わってしまったの？」

その一言はタイラの何の記憶を呼び覚ましたのか。無垢なる瞳に照らされ、自らの染まった色を恥じるかのように視線をカグヤから逸らす。その顔に怒りは無く、強いて言うなら――迷惑をかけた子

供が親に見せる時のような、そんなやり切れなさが見え隠れする。

「私も一緒に罰を受ける。だから、こんな変な裁判はもうやめよう？」

「どうしてだ！ 沢山の金が入る、お前の望む物だつて何でも買つてやれた！ カグヤ、一体何が不満だと言うんだ！！？」

それでもタイラは叫んだ。身振り手振りで必死に説く。

どうして分からないのだろう。カグヤが一番望んでいたものが何なのか、本当にタイラは思いつかないのだろうか。それとも——金に塗れ、分からなくなってしまったのだろうか。

「アーティ……その……今の件は一旦不問とします。それから貴方に先ほど与えた斬首刑の罰は、この白き天秤の乙女の権限を持つて取り消します。ツキも、貴方の子供達も罪に問われる事はありません。そして——」

一度俺に優しい目を向けたカグヤは、再びタイラに視線を戻す。

——憐憫の眼差しで。

「お父さん。貴方を裁きます。今すぐにはありません。時間をかけて、過去の事を遡って、ゆっくりと一つずつ明らかにしましょう。こんなおざなりの裁判ではなく、真の裁判で……」

「カ、カグ……！」

それでも詰め寄ろうとするタイラ。だがカグヤの瞳に映る感情を読み取ったのか、途中で言葉を失うと、項垂れてやがてその双眸に左手を添えて肩を震わせ始めた。

愛情は有ったのだ。

タイラもカグヤもお互い親子としての愛情は存在していたのだ。なのに、いつか、どこから、歯車が狂い出してしまったのだろうか。

タイラを見つめるカグヤの眼差しは苦渋に満ちている。アマネはそんなカグヤを憂うように見守り、アーベストさんはやり切れなさそうに物思いに耽る。ツキが労わるように俺の肩に寄りかかった。

「終わった？」

「ああ。……いや、月並みな事を言うようだが、これから始まるのかもしれないな。あの二人は」

忙しくなるだろうカグヤは。思えば奇妙な縁だった。

もう会えないかもしれない。せめて最後に一言詫びを入れようと口を開いて――

「全員動くな。……特にそのメイド。一步でも妙な素振りを見せたらコイツを撃つ」

最初にアマネが通った、判事達の背後に聳え立つ扉が開かれたかと思うとそこから見覚えのある巨軀が姿を現した。どこから手に入れたのか、その右手には黒の回転式拳銃が握られている。

「探偵もだ。銃を持っているのは分かっている」

ランバルドだった。

全員の眼差しを浴びても怯む素振りは微塵も無い。唯一ツキだけは、素顔でランバルドを見た事がないので誰か分からないだろうが、それでも巨人から立ち上る黒い陽炎と、射抜くだけで相手を殺せそうな殺意溢れる目と、何より手にした拳銃を見ればどの類の人物かは自ずと分かる。

銃口は目の前の背もたれに。

すなわちカグヤの頭に。

最初にアマネを牽制したのは流石と言えよう。一番のジョーカーを真っ先に封じられる。俺の背後のアマネは主の元へ敵の侵入を許した事をさぞ悔いているに違いない。いくら神速を誇るアマネでも数メートルの距離を駆けるてカグヤを庇う事は適わない……

見ればランバルドの脇腹辺りには真新しい染みがはつきりと形作られていた。血だ。グレーのシャツがベタベタとなって肌に張り付いている。

「……なるほど。あらかじめ体内に何か仕込んでいたな？ その上から縫合して隠していたのか」

俺と同じ箇所を見つめていたのか、冷静に解析するアーベストさんの呟きはランバルドが今ここに存在する謎の解明だ。だがその声

にはかつてないほどの緊張感で溢れている。

そうか。鍵程度の大きさの物だったら体内に十分隠す事が可能だ。もしかしたら、いつ自分が捕まってもいいように、ずっと以前からあの男は準備をしていたのかもしれない。拳銃はここに来るまでの誰かを襲って調達したのだろう。

「白き天秤の乙女。いちいち殺した人間の事など覚えていないだろうな。だから教えてやる。私の妻と娘は、お前の『裁判』によって惨たらしい死を与えられた。私だけ無様にも生き延びてしまった。その日から俺の命はこの瞬間のためにあつたのだ！」

「待てよ！！ 言っただろう、カグヤじゃない！ カグヤはただ――」

「それこそ言っただけだ。関係ない、とな。娘も父も殺す」
押し問答は先ほど済ませてしまった。ランバルドの信念は揺るがない。

絶望が押し寄せる。

警備員を全員外に出してしまったのがこんな形で裏目に出るとは

……！

そんな中、一人ゆっくりと動いた者がいた。

ランバルドの目に怒りが宿る。

カグヤだった。

首だけ背後に向けていたが、椅子から立ち上がりランバルドに面と向かい合う。

「馬鹿野郎！！」

罵詈雑言を飛ばしたのは俺だ。動くな、とランバルドは言った。あの男ならば本当に殺しを躊躇なく行うだろう！ カグヤも感じているはずだ、巨軀全身から吹き出る瘴気のような禍々しい感情を！！

なのに、何故動いた！？

銃声は鳴らなかった。もし他の人間が動いたなら容赦なく撃ち殺されていたと思う。動いたのがカグヤだったからか？ これから命を奪う相手が、自らその命を差し出す行動に出たのはランバルド

を少なからず戸惑わせたのかもしれない。

「私は――」

「私にものを言うな、白き天秤の乙女。命乞いの類は妻と娘に言え」
「貴方の言う通り、私は自らが下した裁判を全く覚えていない」

直球な言葉はランバルドに怒りを与えるかと思えた。だがその顔に浮かんだのは一抹の疑問だ。

――カグヤの行動と言葉、一つ一つが俺の心臓に嫌な響きを与える。

「ごめんなさい」

銀髪が垂れる。だが顔を上げたカグヤが見る先にあつたのは――
悪魔の形相と化したランバルドだった。

何も考えずに、自分の思うがままに今のカグヤは行動しているのだろう。謝りたかつたのも本心だろう。でも……でも今はそれは駄目なのだ！ いつでも正しい事をすれば良いわけではないのだ！

「ごめんなさい……だと？ ごめんなさい、だとオ！？」

カグヤは怯えて後ずさる。アマネも俺も、この場から飛び出してカグヤを庇ってやりたかつた。だがランバルドには激怒しながらも隙が見当たらない。

「貴様は！ そうやって詫びて、泣きながら懇願した者達を葬ってきたのだろぅが！！ ふざけるな！ 一体どれだけの人間が、この場で無実の罪を着せられて、自分が悪くないのにも関わらず助かりたい一心で謝罪の言葉を口にしている！！」

銃口を持つ手に、より明確な意思が加わったのが分かつた。カグヤはランバルドの逆鱗に触れたのだ。それでもまだ銃弾は発射されない！

死体となった人間はそれ以上後悔をする必要がなくなる。もしかしたらランバルドはそれを考えて、皮肉にも引き金を引けないのかもしれない。

仮面を捨て、歪な鎧をも脱ぎ捨てたカグヤに迫り来る炎は、とてもただの少女が耐え切れるものではない。人形だからこそ何も考え

ずに済んでいたのだ。人の生と死を取り決める法廷は、所詮何の覚悟も無しに訪れる者が通過できるほど甘いものではなかったのだ。

「ごめん……なさい……」

恐怖か、悔いか、その両方か。カグヤは肩を震わせながらオウムのように繰り返す。

泣いている。今その小さな肩に、ありとあらゆる怨嗟が重く押し掛かっている事だろう。

無慈悲にも、今度は額に冷たい銃口が直で押し付けられた。

齒軋りがここまで飛んできそうなランバルドの怒りは見る者全てを圧倒する。ただの殺意ではない、家族を失ったが故の、父親としての憤怒は一人の男を修羅へと変えた。

「私も、お父さんも……然るべき罰を……受けます……」

「いい加減にしろ！！ 貴様はもう喋るな！！」

いつかの俺が受けたように、ランバルドはその手でカグヤの喉を押さえつけた。銃口は変わらず額に強く当てたままだ。カグヤはか弱い両手でその手を振り解こうとするも、当然豪腕なるランバルドからすれば虫に叩かれているに等しい。

でも引き金は引かれない。

何故だ？ 勿論引かないに越した事はないが――あれだけの怒気と殺意だ。その意思は本物だろう。苛めて楽しんでいるようには見えない。やはり殺したらそれで終わってしまうからか？

「おい放してやれランバルド！！」

背後からアマネの殺意が膨れ上がるのを俺は感じていた。下手をすればこの場が血みどろの戦場になりかねない！ 彼女はやるだろう。チャンスさえくれば、自分はおろか、俺や他の者を犠牲にしてもカグヤを助けるに違いない。

俺に言われたからではないだろう。

だがランバルドはその手を離しカグヤを解放した。途端咳き込むカグヤに、しかし銃口は向けられたままだ。修羅の相貌は変わらず、だが意外な人物の名前を呼んだ。

「おい、アーティー!!」

「……何だよ」

この場で俺の名前を呼ぶ意図は。困惑を露に聞き返す。ランバルドは声だけで、視線は一切こちらに向けようとはしない。全てをカグヤに定めている。

「……貴様がこの娘をこんなに変えたのか……？ こいつは白き天秤の乙女なのか!？」

何をワケの分らない事を——と胸中で呟いて俺はようやく気づく。

ランバルドの全てを塗り潰した激昂はそのままだ。だがよく見れば、その中に苦悩の欠片が見え隠れしているのが僅かに見えた。必死の形相は決して一枚岩ではなかったのだ。

「ランバルド……」

返答を忘れて思わずその名を漏らす。

ランバルドの目には一体何が映っているのか。

カグヤだ。でもカグヤと言う名の鏡に見えるものは？

「クソッ！ クソッ!! ちくしょう!!」

撃ちたい。けれど撃てない。そんなアンバランスな思念が、ランバルドからもどかしい思いとなつて口から吐き出たように感じた。いつかの夜の襲撃には何の躊躇いもなかった。

でも先程は？ そう言えばカグヤが俺への面会の最中から既にランバルドは押し黙っていた。彼女達が出て行くと急激にその殺意を膨れ上がらせた。あれはまさか……鼓舞だったのか？ 何故？

——引き金を引けば、苦しみから解放されるのだろうか。

「……どうぞ。……辛いのでしたら撃つて下さい」

震えながら、泣きながら、それでもカグヤはありのままの思いを言葉に変える。背中越しでその顔は俺からは見えない。唯一見えるのは対峙するランバルドだけだ。

その言葉に救いを見出したのか。

まさか背中を押されたとも言うのか。

己の中の全てを総動員するかのような氣勢がこちらにも伝わってくる。

その銃口を眉間に突きつけた。

そこで何を見たのか。

ランバルドの顔に悲しみが浮かんた。修羅が剥がれ落ち、懐古するような、寂寥感のような、どこかに思いを馳せたような顔。何かを懐かしみ、けれど決して手が届かない――

「……シャ」

異常なる聴覚を持つ俺だからこそ聞き取れた。ツキと、あとはランバルドの目の前にいるカグヤもか。小さな呟き。

それは人の名前に聞こえた。

それでようやくランバルドを引き止めているものの正体が分かった。

「やめろランバルド!!」

「私は復讐を、復讐を果たすのだ!!」

自分の力で心を捻じ曲げる。体内の葛藤は知る由もない。

それでもランバルドは遂にそれを乗り越えた。いや、踏み越えてしまった。

大切なものの面影を――

自らの手で葬り――

アマネが風を切った！　それが耳に入り、次いで視覚した時には既に俺の前方だ！

ダガーの投擲は無い。

恐るべき神の風！　床に落ちたダガーを拾って投げるよりも、彼女は自らがその足で風を追い越した方が早いと判断したのだ。

最初で最後の賭け。

ランバルドが自らの裡なるものと戦っている一瞬に、アマネは己の全てを込める。

それでも。

その行動はランバルドには予測の範囲だったのか。

「うおおおおお！！！！！！」

復讐者の雄叫びは背後から届いた。

先駆け宙を抜けたのは――

ランバルドの放った発砲音。

アマネは足が棒になったかのように立ち尽くす。

鮮血が溢れ出た。

ツキの悲鳴。

殺傷音は眉間に吸い込まれる。そしてそこで死の花を咲かせた。

脳を撃ち抜かれ、生命の一切の機能を失った人型は、背中から床に倒れ落ちた。

死んだ。

白き天秤の乙女の父親。

タイラはランバルドの手によってその生を終えた。

俺も、ツキもカグヤもアマネもアーベストさんも、皆の視線が死者へと向けられる。撃たれたのはどこか？ まだ生きているのでは？ そう思っている人間中には居るかもしれない。でも俺は見えてしまった。どの箇所を撃たれ、それが人体に置いてどのような意味を持つか。

そしてすぐに、このような時に死者へ感けてしまった事を悔いる。一人それをしなかったランバルドに十分の時間を与えてしまった事を悟る。

カグヤはまだ生きている。

アマネはそれを守るために再度駆け出す。

だが。

次にランバルドの銃口が向かった先は――

「待て！！」

「駄目！！！！」

俺とカグヤの声が重なった。

自らのこめかみに拳銃を押し付け、ランバルドはその時、初めて顔に似合う誠実な、優しいな、見る者に安心感と温かさを与える――

——そう、まるで父親のような顔を——

「今、逝くよ」

呟きと銃音と、そしてカグヤが目の中の巨軀に飛び掛ったのはほぼ同時だった。

再度宙に舞い上がる血飛沫。

それは法廷の壁に掛かっていた麗しき女神の油絵に赤化粧を施した。

人が神を騙った罰だったのだろうか。

俺の視界の隅で、女神は赤い涙を流しているように見えた——

エピローグ

ドリル音が喧しく耳朵を打つ中、人の顔ほどもある大きさの、碎いたセメントの破片をまとめて一輪車に載せて運ぶとそれを指定された更地の上に積み上げていく。別の人間がそれを軍手をはめた手でトラックに放り投げていった。土埃と砂煙が鼻に入り咳き込む。

一息ついて汚れた腕で汗を拭う。

「こらアーティ、サボッているんじゃないぞ！」

怒鳴り声の方へ振り返ってみればそこには相変わらずの髭顔が。

ノート片手にしかめ面だ。

「すいませんっす、ボス！」

「ボケツとしている暇があったら、一つでも多くのゴミ片しとけ！」

呆けているように見えたのだろうか。確かに少しでも時間があると最近考え込んでしまう。

俺は慌てて両手で一輪車を押し、瓦礫の山目指して転がして行った。

その日の仕事を終えて家に帰ると、我が家の鉄扉から、いい歳したスーツが転がり落ちるように外へ出て行くのが目に飛び込んできた。

「す、す、すいません！ ツキさん、本当、本当ごめんなさい！」

と思つたら本当に何かに躓いて探偵は地面に転がった。脱兎の如く駆け出して行くその様を、玄関からエプロン姿でおたまを振りかざしたツキが見送る。例の一件で騙され切ったツキはアーベストさんに対し前以上に容赦がない。俺はのんびりとツキの元まで歩いて行く。

「アーベストさん、何の用だったんだ？」

蛇のような目で逃げていく兎を睨んでいたツキは、俺に気づくと出迎えてくれた。

「お帰りアーティ。新聞を届けてくれたみたいだ」

「ふーん」

無関心に振舞う俺だが、その実興味津々だ。

もはや俺が裕福街の情報を得るにはアーベストさんを頼るしかないのだから。

あれから一週間。カグヤには会っていない。

あの時、狙いを逸らされた弾丸はランバルドの左肩甲骨に吸い込まれた。ちなみに、やはりタイラは即死。カグヤは――

情報を貪るべく居間で新聞を広げようとした所で、一分前に俺が閉めたばかりの玄関がノックされた。もう夜も遅い。仕事で疲れきっていた俺は億劫になりながらも立ち上がりドアへ向かう。大方アーベストさんが忘れ物でもしたのだろう。堂々とした足音。加え律儀にノックをするのだ、少なくとも悪い人間でない事は分かる。俺は錠を外して、力を込めて玄関をスライドさせた。

メイドが居た。

それも知っている顔だった。

更に言えば、途方もない大きさの、緑の風呂敷を肩に背負っている。

「こんばんわアーティ様。夜分に失礼致します」

あんぐり口を開ける俺を前に、メイドは相変わらず教科書に乗っ

ているようなお辞儀をする。

「……何やってるんだ？ アマネ」

「お願いがありますが宜しいでしょうか」

俺の疑問は流され、アマネは有無を言わさぬ迫力で言葉を押し出してくる。無機質な顔。端的に言葉を紡いでいくそれは拒否権の選択を奪っていく。それでも俺はこの家の大黒柱として、奮起し異様な空気を切り裂くべく声を出す。

「内容によ——」

「この家にしばらく住まわせて頂きたいです。見たところ大家族。メイドの手があっても決して損はないかと思われます」

冗談みたいな背中の大風呂敷を見た時点から、まさかの想像はしていた。だがアマネに限って冗談はないだろう。俺は威厳あるこの家の父親相応に、頑な態度を崩さず腕組みをする。

「理由が無いだろう。大体うちは裕福なメイドを養うほどお金が——」

「理由ならあるわ」

大風呂敷の背後から、ひょこ、と効果音が似合いそうな首が飛び出てきた。

——見ると、そちらも風呂敷を背負っていらっしやる。

「アーティは案外薄情なのね。家族なら一緒に住む事に理由なんて必要無いでしょ？」

一週間ぶりに見る銀髪は不覚にも俺の目を奪った。ここ一週間、散々新聞で見てきたのだ。その顔が今日の前に直に現れた事に軽く衝撃を受ける。

だが俺と目が合ったカゲヤは、やがてその視線を徐々に下げて行き、俺の顎辺りを見てその動きが止まった。そして何故か頬を赤らめると、アマネの大風呂敷の後ろにその顔を隠してしまう。

——何やってるの？

「ツイダアッ！！？」

人と思えない声は俺の口から飛び出たものだ。いつの間にか背後

に立っていたツキが、ランチ後まだ完治していない俺の背中 of 傷をつねり上げた事を、地に崩れた後に理解した。

「どうぞ、上がって下さい。何も無い所ですが」

横から見上げるツキさんは笑顔だ。カグヤとアマネの来訪を快く思っている——んですよな？

勘違いであってほしい。

俺がつねられたのも、何かこう……苛々していたから、で済ませ
てほしい。

まだ晩飯を済ませていない俺と、カグヤ、アマネもその日は一緒に食卓を囲む事になった。

今日はスープだった。

アマネには沢山の具が入っていたのに、俺とカグヤのスープに何も入っていないのはきつと偶然だと信じたい。

やたらと量が少ない自分のスープを啜りながら、心の中で懺悔すべき相手を見つけ語りかける。

シャ一口。そう言えば、まだ質問に答えてなかったな。

ツキにはまだ……してません。

完

最終話（後書き）

終わりです！

これにて「女神の微笑みは刃の味」は完結です。

ここまでお付き合い下さった方、本当にどうもありがとうございました。

誰かが読んで下さっている。それだけで書き手としては意欲を失わずにすみませう。

これを一作目とし、これからも二作目、三作目と様々な物語を書いていきたいと思っておりますので、お時間がありましたらどうぞ宜しくお願い致します。

*まったくの余談ですが、一応HPがありますのでアドレス晒します；

<http://tobiryu.hp.infoseek.co.jp/>

（現在更新ほぼ停止中；）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1983i/>

女神の微笑みは刃の味

2010年10月8日12時46分発行